

門

夏目漱石

青空文庫

宗助そうすけは先刻さつきから縁側えんがわへ坐蒲団ざぶとんを持ち出して、日当りの好きそうな所へ気楽あぐらに胡坐あぐらをかいて見たが、やがて手に持つてゐる雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になつた。秋あきび日和よりと名のつくほどの上天気なので、往來を行く人の下駄げたの響なが、静かな町だけに、朗らかに聞えて来る。肱枕ひじまくらをして軒から上を見上げると、奇麗きれいな空が一面あおに蒼く澄あんでゐる。その空が自分の寝ている縁側の、窮屈な寸法くわに較くらべて見ると、非常に広大である。たまの日曜にこうして緩ゆるくり空を見るだけでもだいぶ違ちがうなと思おもいながら、眉まゆを寄せて、ぎらぎらする日をしばらく見つめていたが、眩まほしくなつたので、今度はぐるりと寝返りをして障子しょうじの方を向いた。障子の中では細君しよこが裁縫しよとをしてゐる。

「おい、好よい天気だな」と話しかけた。細君は、

「ええ」と云いつたなりであつた。宗助も別に話わがしたい訳でもなかつたと見えて、それなり黙もつてしまつた。しばらくすると今度は細君の方から、

「ちつと散歩でもしていらつしやい」と云つた。しかしその時は宗助がただうんと云いう生な

返事を返したただけであった。

二三分して、細君は障子の硝子の所へ顔を寄せて、縁側に寝ている夫の姿を覗いて見た。夫はどう云う了見か、両膝を曲げて海老のように窮屈になっている。そうして両手を組み合わせて、その中へ黒い頭を突つ込んでいるから、腕に挟まれて顔がちつとも見えない。

「あなたそんな所へ寝ると風邪引いてよ」と細君が注意した。細君の言葉は東京のような東京でないような、現代の女学生に共通な一種の調子を持つている。

宗助は両腕の中で大きな眼をぱちぱちさせながら、

「寝やせん、大丈夫だ」と小声で答えた。

それからまた静かになつた。外を通る護謨車のベルの音が二三度鳴つた後から、遠くで鶏の時音をつくる声が聞えた。宗助は仕立おろしの紡績織の背中へ、自然と浸み込んで来る光線の暖味を、襯衣の下で食ぼるほど味いながら、表の音を聴くともなく聴いていたが、急に思い出したように、障子越しの細君を呼んで、

「御米、近來の近の字はどう書いたつけね」と尋ねた。細君は別に呆れた様子もなく、若い女に特有なけたたましい笑声も立てず、

「近江おうみのおうの字じゃなくなつて」と答えた。

「その近江おうみのおうの字が分らないんだ」

細君は立て切つた障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物指ものさしを出して、その先で近の字を縁側へ書いて見せて、

「こうでしよう」と云つたぎり、物指の先を、字の留つた所へ置いたなり、澄み渡つた空を一しきり眺めなが入つた。宗助は細君の顔も見ずに、

「やつぱりそうか」と云つたが、冗談じょうだんでもなかつたと見えて、別に笑もしなかつた。

細君も近の字はまるで気にならない様子で、

「本当に好い御天気だわね」と半ば独り言なつかひごとのように云いながら、障子を開けたまままた裁縫ざいしやうを始めた。すると宗助は脇で挟んだ頭を少し擡もたげて、

「どうも字と云うものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

「なぜ」

「なぜつて、いくら容易やさしい字でも、こりや変だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。この間も今日こんにちの今の字こんで大変迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、じつと眺めてみると、何だか違つたような気がする。しまいには見れば見るほど今こんらしくなくなつて来る。――

御前おまへそんな事を経験した事はないかい」

「まさか」

「おれだけかな」と宗助は頭へ手を当てた。

「あなたどうかしていらつしやるのよ」

「やっぱり神経衰弱のせいかも知れない」

「そうよ」と細君は夫の顔を見た。夫はようやく立ち上つた。

針箱と糸いと屑くずの上を飛び越すように跨またいで、茶の間の襖ふすまを開けると、すぐ座敷である。南が玄関くわんで塞ふさがれているので、突き当りの障子が、日向ひなたから急に這入はいつて来た眸ひとみには、うそ寒く映つた。そこを開けると、廂ひさしに逼せまるような勾こう配ばいの崖がけが、縁えん鼻ばなから聳そびえているので、朝の内は当あたつて然しかるべきはずの日も容易に影を落さない。崖には草が生えている。下からして一側ひとかわも石で畳んでないから、いつ壊くずれるか分らない虞おそれがあるのだけれども、不思議にまだ壊れた事がないそううで、そのためか家主やぬしも長い間昔のままにして放はなつてある。もつとも元は一面の竹たけ藪やぶだったとかで、それを切り開く時に根だけは掘り返さずに土堤どての中に埋めて置いたから、地じは存外しま緊しまつていますからねと、町内に二十年も住んでいる八百屋おやじの爺おやじが勝手口でわざわざ説明してくれた事がある。その時宗助はだつて根が残つてい

れば、また竹が生えて藪になりそうなものじゃないかと聞き返して見た。すると爺は、それがね、ああ切り開かれて見ると、そう甘く行くもんじゃありませんよ。しかし崖だけは大丈夫です。どんな事があつたつて壊えつこはねえんだからと、あたかも自分のものを弁護でもするように力んで帰つて行つた。

崖は秋に入つても別に色づく様子もない。ただ青い草の匂が褪めて、不揃にもじやもじやするばかりである。薄だの薦だのと云う洒落たものに至つてはさらに見当らない。その代り昔の名残りの孟宗が中途に二本、上の方に三本ほどすつくりと立っている。それが多少黄に染まつて、幹に日の射すときなどは、軒から首を出すと、土手の上に秋の暖味を眺められるような心持がする。宗助は朝出て四時過に帰る男だから、日の詰まるころ頃は、滅多に崖の上を覗く暇を有たなかつた。暗い便所から出て、手水鉢の水を手を受けながら、ふと廂の外を見上げた時、始めて竹の事を思い出した。幹の頂に濃かな葉が集まつて、まるで坊主頭のように見える。それが秋の日に酔つて重く下を向いて、寂そりと重なつた葉が一枚も動かない。

宗助は障子を閉てて座敷へ歸つて、机の前へ坐つた。座敷とは云いながら客を通すからそう名づけるまでで、実は書齋とか居間とか云う方が穩当である。北側に床があるので、

申訳のために変な軸じくを掛けて、その前に朱泥しゆでいの色をした拙せつな花活はないけが飾つてある。欄間らんまには額がくも何もない。ただ真鍮しんちゆうの折釘おれくぎだけが二本光つている。その他には硝子戸ガラスドの張つた書棚が一つある。けれども中には別にこれと云つて目立つほどの立派なものも這入つていない。

宗助は銀金具ぎんかなぐの付いた机ひきだしの抽出ひきだしを開けてしきりに中を檢しらべ出したが、別に何も見つけ出さないうちに、はたりと締あきらめてしまった。それから硯箱すずりばこの蓋ふたを取つて、手紙を書き始めた。一本書いて封をして、ちよつと考えたが、

「おい、佐伯さへきのうちの中六番町なかくくばんちよう何番地ひきだしだったかね」と襖越ごしに細君に聞いた。

「二十五番地じゃなくつて」と細君は答えたが、宗助が名宛を書き終る頃になつて、

「手紙じゃ駄目よ、行つてよく話をして来なくつちや」と付け加えた。

「まあ、駄目までも手紙を一本出しておこう。それでいけなかつたら出掛けるとするさ」と云い切つたが、細君が返事をしないので、

「ねえ、おい、それで好いだらう」と念を押した。

細君は悪いとも云い兼ねたと見えて、その上争いもしなかつた。宗助は郵便を持つたまま、座敷から直すぐ玄關に出た。細君は夫の足音を聞いて始めて、座を立つたが、これは茶

の間の縁えんづた伝いに玄関に出た。

「ちよつと散歩に行つて来るよ」

「行つていらつしやい」と細君は微笑しながら答えた。

三十分ばかりして格子こうしががらりと開いたので、御米はまた裁縫しじとの手をやめて、縁伝いに玄関へ出て見ると、帰つたと思う宗助の代りに、高等学校の制帽かぶつを被つた、弟の小六ころくが這入つて来た。袴はかますその裾が五六寸しか出ないくらいの長い黒羅紗くろらしゃのマントの釦ボタンを外しながら、

「暑い」と云つている。

「だつて余あんまりだわ。この御天氣にそんな厚いものを着て出るなんて」

「何、日が暮れたら寒いだろうと思つて」と小六は云い訳わけを半分しながら、嫂あによめあとの後に跟ついて、茶の間へ通つたが、縫い掛けてある着物へ眼を着けて、

「相変らず精が出ますね」と云つたなり、長火鉢ながひばちの前へ胡坐あぐらをかいた。嫂は裁縫すみを隅すみの方へ押しやつておいて、小六の向むこへ来て、ちよつと鉄瓶てつびんをおろして炭すすを継つぎ始めた。

「御茶ならたくさんです」と小六が云つた。

「厭いや？」と女学生流に念を押した御米は、

「じゃ御菓子は」と云つて笑いかけた。

「あるんですか」と小六が聞いた。

「いいえ、無いの」と正直に答えたが、思い出したように、「待ってちようだい、あるかも知れないわ」と云いながら立ち上がる拍子ひょうしに、横にあつた炭取を取り退けて、袋戸ふくろと棚だなを開けた。小六は御米うしろすがたの後姿はおりの、羽織はおりが帯で高くなつた辺あたりを眺めていた。何を探さがすのだから手間てまが取れそうなので、

「じゃ御菓子も廃よしにしましょう。それよりか、今日は兄さんはどうしました」と聞いた。「兄さんは今ちよいと」と後向のまま答えて、御米はやはり戸棚の中を探している。やがてぱたりと戸を締めて、

「駄目よ。いつの間にか兄さんがみんな食べてしまった」と云いながら、また火鉢むこの向へ歸つて来た。

「じゃ晩に何か御馳走ごちそうなさい」

「ええしてよ」と柱時計を見ると、もう四時近くである。御米は「四時、五時、六時」と時間を勘定かんじょうした。小六は黙つて嫂の顔を見ていた。彼は實際嫂の御馳走には余り興味を持ち得なかつたのである。

「姉さん、兄さんは佐伯さへきへ行つてくれたんですかね」と聞いた。

「この間から行く行くって云ってる事は云ってるのよ。だけど、兄さんも朝出て夕方に帰るんでしよう。帰ると草臥くたびれちまつて、御湯に行くのも大儀そうなんですから、そう責めるのも実際御気の毒よ」

「そりや兄さんも忙がしいには違なかるうけれども、僕もあれがきまらないと気がかりで落ちついて勉強もできないんだから」と云いながら、小六は真しんちゆう鍬くわの火箸ひばしを取つて火鉢ひばちの灰の中へ何かしきりに書き出した。御米はその動く火箸の先を見ていた。

「だから先刻手紙さつきを出しておいたのよ」と慰めるように云った。

「何て」

「そりや私わたしもつい見なかつたの。けれども、きつとあの相談よ。今に兄さんが帰つて来たら聞いて御覧なさい。きつとそうよ」

「もし手紙を出したのなら、その用には違ないでしょう」

「ええ、本当に出したのよ。今兄さんがその手紙を持って、出しに行つたところなの」

小六はこれ以上弁解のような慰藉いしやのような嫂あによめの言葉に耳を借したくなかつた。散歩に出る閑ひまがあるなら、手紙の代りに自分で足を運んでくれたらよさそうなものだと思ふと余り好い心持でもなかつた。座敷へ来て、書棚の中から赤い表紙の洋書を出して、方々ページ頁はくを剥

つて見ていた。

二一

そこに気のつかなかった宗助は、町の角まで来て、切手と「敷島」を同じ店で買って、郵便だけはすぐ出したが、その足でまた同じ道に戻るのが何だか不足だったので、唧え煙草の煙を秋の日に揺つかせながら、ぶらぶら歩いているうちに、どこか遠くへ行つて、東京と云う所はこんな所だと云う印象をはつきり頭の中へ刻みつけて、そうしてそれを今日の日曜の土産に家へ帰つて寝ようと云う氣になった。彼は年来東京の空気を吸つて生きている男であるのみならず、毎日役所の行通には電車を利用して、賑やかな町を二度ずつはきつと往つたり来たりする習慣になつていたのであるが、身体と頭に樂がないので、いつでも上の空で素通りをする事になつてゐるから、自分がその賑やかな町の中に生きてゐると云う自覚は近來とんと起つた事がない。もつとも平生は忙がしさに追われて、別段氣にも掛からないが、七日に一返の休日に来て、心がゆつたりと落ちつける機会に出逢うと、不斷の生活が急にそわそわした上調子に見えて来る。必竟自分は東京の

中に住みながら、ついまだ東京というものを見た事がないんだという結論に到着すると、彼はそこにいつも妙な物淋しさを感ずるのである。

そう云う時には彼は急に思い出したように町へ出る。その上懐に多少余裕でもあると、これで一つ豪遊でもしてみようかと考える事もある。けれども彼の淋しみは、彼を思い切った極端に駆り去るほどに、強烈の程度なものでないから、彼がそこまで猛進する前に、それも馬鹿馬鹿しくなつてやめてしまふ。のみならず、こんな人の常態として、紙入の底が大抵の場合には、軽拳を戒める程度内に膨らんでいるので、億劫な工夫を凝らすよりも、懐手をして、ぶらりと家へ帰る方が、つい楽になる。だから宗助の淋しみは単なる散歩か勸工場縦覧ぐらいなところで、次の日曜まではどうかこうか慰藉されるのである。

この日も宗助はともかくもと思つて電車へ乗った。ところが日曜の好天気にもかかわらず、平常よりは乗客が少ないので例になく乗心地が好かつた。その上乘客がみんな平和な顔をして、どれもこれも悠たりと落ちついて見えた。宗助は腰を掛けながら、毎朝例刻に先を争つて席を奪い合いながら、丸の内方面へ向う自分の運命を顧みた。出勤刻限の電車の道伴ほど殺風景なものはない。革にぶら下がるにしても、天鷲絨に腰を掛

けるにしても、人間的な優しい心持の起った試はいまだかつてない。自分もそれでたくさ
んだと考えて、器械か何ぞと膝を突き合せ肩を並べたかのごとくに、行きたい所まで同席
して不意と下りてしまうだけであつた。前の御婆さんが八つぐらいになる孫娘の耳の所へ
口を付けて何か云つているのを、傍に見ていた三十恰好の商家の御神さんらしいのが、
可愛らしがつて、年を聞いたり名を尋ねたりするところを眺めっていると、今更ながら別
の世界に來たような心持がした。

頭の上には広告が一面に枠に嵌めて掛けてあつた。宗助は平生これにさえ気がつかなか
つた。何心なしに一番目のを読んで見ると、引越は容易にできますと云う移転会社の引
札であつた。その次には経済を心得る人は、衛生に注意する人は、火の用心を好むもの
は、と三行に並べておいてその後には瓦斯竈を使えと書いて、瓦斯竈から火の出ている画
で添えてあつた。三番目には露国文豪トルストイ伯傑作「千古の雪」と云うのと、バンカ
ラ喜劇小辰大一座と云うのが、赤地に白で染め抜いてあつた。

宗助は約十分もかかつて、すべての広告を丁寧に三返ほど読み直した。別に行つて見
ようと思うものも、買つて見たいと思うものも無かつたが、ただこれらの広告が判然と
自分の頭に映つて、そうしてそれを一々読み終せた時間のあつた事と、それをことごとく

理解し得たと云う心の余裕が、宗助には少なからぬ満足を与えた。彼の生活はこれほどの余裕にすら誇りを感じずるほどに、日曜以外の出入りには、落ちついていられないものであった。

宗助は駿河台下で電車を降りた。降りるとすぐ右側の窓硝子の中に美しく並べてある洋書に眼がついた。宗助はしばらくその前に立つて、赤や青や縞や模様の上に、鮮かに叩き込んである金文字を眺めた。表題の意味は無論解るが、手に取って、中を調べて見ようという好奇心はちつとも起らなかった。本屋の前を通ると、きつと中へ這入って見たくなったり、中へ這入ると必ず何か欲しくなったりするのは、宗助から云うと、すでに一

昔し前の生活である。ただ History 《ヒストリ》 of 《オフ》 Gambling 《ガムブリング》 (博奕史) と云うのが、ことさらに美装して、一番真中に飾られてあったので、それが幾分か彼の頭に突飛な新し味を加えただけであった。

宗助は微笑しながら、急忙しい通りを向側へ渡つて、今度は時計屋の店を覗き込んだ。金時計だの金鎖が幾つも並べてあるが、これもただ美しい色や恰好として、彼の眸に映るだけで、買いたい了簡を誘致するには至らなかった。その癖彼は一々絹糸で釣った価格札を読んで、品物と見較べて見た。そうして実際金時計の安価なのに驚ろいた。

蝙蝠傘屋こつもりがさやの前にもちよつと立ちどまつた。西洋小間物こまものを売る店先では、礼帽シルクハットの傍わきにかけてあつた襟飾えりかぎりに眼がついた。自分の毎日かけているのよりも大変柄がらが好かつたので、価ねを聞いてみようかと思つて、半分店の中へ這入りはいかけたが、明日あしたから襟飾りなどをかけ替えたところが下らない事だと思ひ直すと、急に臺口がまぐちの口を開けるのが厭いやになつて行き過ぎた。呉服店でもだいぶ立見をした。鶉御召うずらおめしだの、高貴織こうきおりだの、清凌織せいりょうおりだの、自分の今日こんにちまで知らずに過ぎた名をたくさん覚えた。京都の襟新えりしんと云う家の出店はの前で、窓硝子まどガラスへ帽子の鍰つばを突きつけるように近く寄せて、精巧せうこうに刺繡ぬいをした女の半襟はんえりを、いつまでも眺めていた。その中うちにちようど細君こまぎみに似合にあいそうな上品じやうひんのがあつた。買かつて行つてやろうかという気がちよつと起るや否いなや、そりや五六年ごねん前の事ことだと云う考かんがが後あとから出て来て、せつかく心持こころもちの好このい思おもいつきをすぐ揉もみ消くしてしまつた。宗助は苦笑しながら窓硝子を離れてまた歩き出したが、それから半町はんまちほどの間は何だかつまらないような気分きぶんがして、往來わうらいにも店先にも格段かくたんの注意ちゆういを払はらわなかつた。

ふと気がついて見ると角に大きな雑誌屋があつて、その軒先には新刊の書物が大きな字で広告してある。梯子はしごのような細長い棹わくへ紙を張つたり、ペンキ塗ぬりの一枚板まいいたへ模様もやう画えみたような色彩しきさいを施せこしたりしてある。宗助はそれを一々読んだ。著者しやくしやの名前なまえも作物さくぶつの名前なまえ

も、一度は新聞の広告で見たようでもあり、また全く新奇のようでもあった。

この店の曲り角の影になつた所で、黒い山高帽を被つた三十ぐらいの男が地面の上へ気楽そうに胡坐をかいて、ええ御子供衆の御慰みと云いながら、大きな護謨風船を膨らましている。それが膨れると自然と達磨の恰好になつて、好加減な所に眼口まで墨で書いてあるのに宗助は感心した。その上一度息を入れると、いつまでも膨れている。かつ指の先へでも、手の平の上へでも自由に尻が据る。それが尻の穴へ楊枝のような細いものを突っ込むとしゆうつと一度に収縮してしまう。

忙がしい往来の人は何人でも通るが、誰も立ちどまって見るほどのものはない。山高帽の男は賑やかな町の隅に、冷やかに胡坐をかいて、身の周囲に何事が起りつつあるかを感じざるものごとくに、ええ御子供衆の御慰みと云つては、達磨を膨らましている。宗助は一錢五厘出して、その風船を一つ買って、しゅつと縮ましてもらつて、それを袂へ入れた。奇麗な床屋へ行つて、髪を刈りたくなつたが、どこにそんな奇麗なのがあるか、ちよつと見つからないうちに、日が限つて来たので、また電車へ乗つて、宅の方へ向つた。

宗助が電車の終点まで来て、運転手に切符を渡した時には、もう空の色が光を失いかけて、湿つた往来に、暗い影が射し募る頃であつた。降りようとして、鉄の柱を握つたら、

急に寒い心持がした。いっしょに降りた人は、皆な離れ離れになって、事あり気に忙がしく歩いて行く。町のはずれを見ると、左右の家の軒から家根へかけて、灰白い煙りが大気の中に動いているように見える。宗助も樹の多い方角に向いて早足に歩を移した。今日の日曜も、暢びりした御天気も、もうすでにおしまいだと思うと、少しはかないようなまいた淋しいような一種の気分が起つて来た。そうして明日からまた例によつて例のごとく、せつせと働らかなくてはならない身体だと考えると、今日半日の生活が急に惜しくなつて、残る六日半の非精神的な行動が、いかにもつまらなく感ぜられた。歩いているうちにも、日当の悪い、窓の乏しい、大きな部屋の模様や、隣りに坐っている同僚の顔や、野中さんちよつとと云う上官の様子ばかりが眼に浮かんだ。

魚勝と云う肴屋の前を通り越して、その五六軒先の露次とも横丁ともつかない所を曲ると、行き当りが高い崖で、その左右に四五軒同じ構の貸家が並んでいる。ついこの間までは疎らな杉垣の奥に、御家人でも住み古したと思われる、物寂た家も一つ地所のうちに混つていたが、崖の上の坂井という人がここを買つてから、たちまち萱葺を壊して、杉垣を引き抜いて、今のような新らしい普請に建て易えてしまった。宗助の家は横丁を突き当つて、一番奥の左側で、すぐの崖下だから、多少陰気ではあるが、その代り通りから

はもつとも隔っているだけに、まあ幾分か閑静だろうと云うので、細君と相談の上、とくにそこを択んだのである。

宗助は七日に一返の日曜ももう暮れかかったので、早く湯にでも入って、暇があつたら髪でも刈つて、そうして緩くり晩食を食おうと思つて、急いで格子を開けた。台所の方で皿小鉢の音がする。上がろうとする拍子に、小六の脱ぎ棄てた下駄の上へ、気がつかずに足に乗せた。曲んで位置を調べているところへ小六が出て来た。台所の方で御米が、
「誰？ 兄さん？」と聞いた。宗助は、

「やあ、来ていたのか」と云いながら座敷へ上つた。先刻郵便を出してから、神田を散歩して、電車を降りて家へ帰るまで、宗助の頭には小六の小的字も閃めかなかった。宗助は小六の顔を見た時、何となく悪い事でもしたようにきまりが好くなかった。

「御米、御米」と細君を台所から呼んで、

「小六が来たから、何か御馳走でもするが好い」と云いつけた。細君は、忙がしそうに、台所の障子を開け放したまま出て来て、座敷の入口に立っていたが、この分り切つた注意を聞くや否や、

「ええ今直」と云つたなり、引き返そうとしたが、また戻つて来て、

「その代り小六さん、懼り様。座敷の戸を閉てて、洋灯を点けてちようだい。今私も清も手が放せないところだから」と依頼んだ。小六は簡単に、

「はあ」と云つて立ち上がった。

勝手では清が物を刻む音がする。湯か水をざあと流しへ空ける音がする。「奥様これはどちらへ移します」と云う声がする。「姉さん、ランプの心を剪る鋏はどこにあるんですか」と云う小六の声がする。しゅうと湯が沸つて七輪の火へかかった様子である。

宗助は暗い座敷の中で黙然と手焙へ手を翳していた。灰の上に出た火の塊まりだけが色づいて赤く見えた。その時裏の崖の上の家主の家の御嬢さんがピアノを鳴らし出した。宗助は思い出したように立ち上がつて、座敷の雨戸を引き縁側へ出た。孟宗竹が薄黒く空の色を乱す上に、一つ二つの星が燦めいた。ピアノの音は孟宗竹の後から響いた。

三

宗助と小六が手拭を下げて、風呂から帰つて来た時は、座敷の真中に真四角な食卓を据えて、御米の手料理が手際よくその上に並べてあつた。手焙の火も出がけよりは濃

い色に燃えていた。洋灯も明るかった。

宗助が机の前の座蒲団を引き寄せて、その上に楽々と胡坐を掻いた時、手拭と石鹸を受取った御米は、

「好い御湯だった事？」と聞いた。宗助はただ一言、

「うん」と答えただけであったが、その様子は素気ないと云うよりも、むしろ湯上りで、精神が弛緩した気味に見えた。

「なかなか好い湯でした」と小六が御米の方を見て調子を合せた。

「しかしああ込んだり溜らないよ」と宗助が机の端へ肘を持たせながら、倦怠るそうに云った。宗助が風呂に行くのは、いつでも役所が退けて、家へ帰ってからの事だから、ちようど人の立て込む夕食前の黄昏である。彼はこの二三カ月間ついで、日の光に透かして湯の色を眺めた事がない。それならまだしもだが、ややともすると三日も四日もまるで銭湯の敷居を跨がずに過してしまふ。日曜になつたら、朝早く起きて何よりも第一に綺麗な湯に首だけ浸つてみよう、常は考えているが、さてその日曜が来て見ると、たまに悠くり寝られるのは、今日ばかりじゃないかと云う氣になつて、つい床のうちでぐずぐずしているうちに、時間が遠慮なく過ぎて、ええ面倒だ、今日はやめにして、その代り今度の

日曜に行こうと思ひ直すのが、ほとんど惰性のようになってゐる。

「どうかして、朝湯にだけは行きたいね」と宗助が云つた。

「その癖朝湯に行ける日は、きつと寝坊ねぼうなさるのね」と細君は調戯からかうような口調であつた。小六は腹の中でこれが兄の性うまれつき来の弱点であると思ひ込んでいた。彼は自分で学校生活をしてゐるにもかかわらず、兄の日曜が、いかに兄にとつて貴たつといかを会得えとくできなかつた。六日間の暗い精神作用を、ただこの一日で暖かに回復すべく、兄は多くの希望を二十四時間のうちに投げ込んでゐる。だからやりたい事があり過ぎて、十の二三も実行できない。否、その二三にしろ進んで実行にかかると、かえつてそのために費やす時間の方が惜しくなつて来て、ついまた手を引込めて、じつとしてゐるうちに日曜はいつか暮れてしまうのである。自分の気晴しや保養や、娯樂ごらくもしくは好尚こうしょうについてですら、かように節儉しなければならぬ境遇にある宗助が、小六のために尽さないのは、尽さないのではない、頭に尽す余裕よゆうのないのだとは、小六から見ると、どうしても受取れなかつた。兄はただ手前勝手な男で、暇があればぶらぶらして細君と遊んでばかりいて、いっこう頼りにも力もなつてくれない、真底は情合じょうあいに薄い人だぐらいに考へていた。

けれども、小六がそう感じ出したのは、つい近頃の事で、実を云うと、佐伯との交渉が

始まつて以来の話である。年の若いだけ、すべてに性急な小六は、兄に頼めば今日明日にも方かたがつくものと、思い込んでいたのに、何日いつまでも埒らちが明かないのみか、まだ先方へ出かけてもくれないので、だいぶ不平になつたのである。

ところが今日帰りを待ち受けて逢あつて見ると、そこが兄弟で、別に御世辞も使わないうちに、どこか暖あたたかみ味のある仕打も見えるので、つい云いたい事も後廻しにして、いっしよに湯になんぞ這入はいつて、穏やかに打ち解けて話せるようになって来た。

兄弟は寛くつろいで膳ぜんについた。御米も遠慮なく食卓の隅ひとすみを領りようした。宗助も小六も猪口を二三杯ずつ干した。飯にかかる前に、宗助は笑いながら、

「うん、面白いものが有つたつけ」と云いながら、袂たもとから買つて来た護謨風船ゴムふうせんの達磨だるまを出して、大きく膨ふくらませて見せた。そうして、それを椀わんの蓋ふたの上へ載のせて、その特色を説明して聞かせた。御米も小六も面白がつて、ふわふわした玉を見ていた。しまいに小六が、ふうつと吹いたら達磨は膳ぜんの上から畳の上へ落ちた。それでも、まだ覆かえらなかつた。

「それ御覧」と宗助が云つた。

御米は女だけに声を出して笑つたが、御櫃おほちの蓋ふたを開けて、夫の飯を盛りながら、「兄さんも随分呑気のんきね」と小六の方を向いて、半ば夫を弁護するように云つた。宗助は細

君から茶碗を受取つて、一言の弁解もなく食事を始めた。小六も正式に箸を取り上げた。達磨はそれぎり話題に上らなかつたが、これが緒になつて、三人は飯の済むまで無邪気に長閑な話をつづけた。しまいに小六が気を換えて、

「時に伊藤さんもとんだ事になりましたね」と云い出した。宗助は五六日前伊藤公暗殺の号外を見たとき、御米の働いている台所へ出て来て、「おい大変だ、伊藤さんが殺された」と云つて、手に持った号外を御米のエプロンの上に乗せたなり書齋へ這入つたが、その語気からいうと、むしろ落ちついたものであつた。

「あなた大変だつて云う癖に、ちつとも大変らしい声じゃなくなつてよ」と御米が後から冗談 半分にわざわざ注意したくらいである。その後日ごとの新聞に伊藤公の事が五六段ずつ出ない事はないが、宗助はそれに目を通してゐるんだか、いないんだか分らないほど、暗殺事件については平氣に見えた。夜歸つて来て、御米が飯の御給仕をするときなどに、「今日も伊藤さんの事が何か出ていて」と聞く事があるが、その時には「うんだいぶ出てゐる」と答えるぐらいだから、夫の隠袋の中に畳んである今朝の読殻を、後から出して読んで見ないと、その日の記事は分らなかつた。御米もつまりは夫が帰宅後の会話の材料として、伊藤公を引合に出すぐらいのところだから、宗助が進まない方向へは、たつて話

を引張りたくはなかった。それでこの二人の間には、号外発行の当日以後、今夜小六がそれを云い出したまでは、公おおやけには天下を動かしつつある問題も、格別の興味をもって迎えられていなかったのである。

「どうして、まあ殺されたんでしよう」と御米は号外を見たとき、宗助に聞いたと同じ事をまた小六に向つて聞いた。

「短銃ピストルをポンポン連発したのが命めい中ちゆうしたんです」と小六は正直に答えた。

「だけどさ。どうして、まあ殺されたんでしよう」

小六は要領を得ないような顔をしている。宗助は落ちついた調子で、

「やっぱり運命だなあ」と云つて、茶碗の茶を旨うまそうに飲んだ。御米はこれでも納なつとく得が
できなかつたと見えて、

「どうしてまた満まん洲しゆうなどへ行つたんでしよう」と聞いた。

「本当にな」と宗助は腹が張つて充分物足りた様子であつた。

「何でも露西亞ロシアに秘密な用があつたんだそうです」と小六が真面目まじめな顔をして云つた。御
米は、

「そう。でも厭いやねえ。殺されちや」と云つた。

「おれみたような腰こしべん弁べんは、殺されちや厭だが、伊藤さんみたような人は、哈爾賓ハルビンへ行つて殺される方がいいんだよ」と宗助が始めて調子づいた口を利きいた。

「あら、なぜ」

「なぜつて伊藤さんは殺されたから、歴史的に偉い人になれるのさ。ただ死んで御覽、こ
うはいかないよ」

「なるほどそんなものかも知れないな」と小六は少し感服したようだったが、やがて、

「とにかく満洲だの、哈爾賓だのつて物騒な所ですね。僕は何だか危険なような心持がし
てならない」と云った。

「そりや、色んな人が落ち合つてるからね」

この時御米は妙な顔をして、こう答えた夫の顔を見た。宗助もそれに気がついたらしく、
「さあ、もう御膳おぜんを下おげたら好おかろう」と細君うなを促うながして、先刻さつきの達磨だるまをまた畳の上から
取とつて、人指指ひとさしゆびの先へ載のせながら、

「どうも妙だよ。よくこう調子好おくできるものだと思つてね」と云つていた。

台所から清きよが出て来て、食くい散ちらした皿さし小鉢こぼちを食卓しょくたくごと引ひいて行いつた後のちで、御米も茶
を入れ替かえるために、次の間へ立たつたから、兄弟は差向さむかいになつた。

「ああ奇麗きれいになった。どうも食った後は汚きたないいものでね」と宗助は全く食卓に未練のない顔をした。勝手の方で清がしきりに笑っている。

「何がそんなにおかしいの、清」と御米が障子しょうじ越こに話しかける声が聞えた。清はへへと云つてなお笑い出した。兄弟は何にも云わず、半なかば下女の笑い声に耳を傾けていた。

しばらくして、御米が菓子皿と茶盆を両手に持つて、また出て来た。藤蔓ふじづるの着いた大きな急須きゅうすから、胃にも頭にもこた思えない番茶を、湯呑ゆのみほどな大きな茶碗ちやわんに注いで、両人ふたりの前へ置いた。

「何だつて、あんなに笑うんだい」と夫が聞いた。けれども御米の顔は見ずにかえつて菓子皿の中を覗のぞいていた。

「あなたがあんな玩具おもちゃを買つて来て、面白そうに指の先へ乗せていらつしやるからよ。子供もない癖くせに」

宗助は意にも留めないように、軽く「そうか」と云つたが、後あとから緩ゆるくり、

「これでも元は子供があつたんだがね」と、さも自分で自分の言葉を味わっている風につけて足して、生なまぬる温ぬるい眼を挙げて細君を見た。御米はぴたりと黙つてしまった。

「あなた御菓子食くべなくつて」と、しばらくしてから小六の方へ向いて話し掛けたが、

「ええ食べます」と云う小六の返事を聞き流して、ついと茶の間へ立つて行つた。兄弟はまた差向いになつた。

電車の終点から歩くと二十分近くもかかる山の手の奥だけあつて、まだ宵の口だけれども、四隣は存外静かである。時々表を通る薄齒の下駄の響が冴えて、夜寒がしだいに増して来る。宗助は懐手をして、

「昼間は暖たかいが、夜になると急に寒くなるね。寄宿じゃもう蒸気を通してあるかい」と聞いた。

「いえ、まだです。学校じゃよつぽど寒くならなくつちや、蒸気なんか焚きやしません」「そうかい。それじゃ寒いだろう」

「ええ。しかし寒いくらいどうでも構わないつもりですが」と云つたまま、小六はすこし云い淀んでいたが、しまいにとうとう思い切つて、

「兄さん、佐伯の方はいつたいどうなるんでしょう。先刻姉さんから聞いたら、今日手紙を出して下すつたそうですが」

「ああ出した。二三日中に何とか云つて来るだろう。その上でまたおれが行くともどうともしようよ」

小六は兄の平気な態度を、心の中うちでは飽足らず眺めた。しかし宗助の様子にどこと云つて、他ひとを激させるような鋭するどいところも、自らみずかを庇護かばうような卑いやしい点もないので、喰くつてかかる勇氣はさらになかった。ただ

「じゃ今日きょうまであのままにしてあつたんですか」と単に事実を確めた。

「うん、実は濟まないがあのままだ。手紙も今日やつとの事で書いたくらいだ。どうも仕方がないよ。近頃神経衰弱でね」と真面目まじめに云う。小六は苦笑した。

「もし駄目なら、僕は学校をやめて、いつそのうち、満洲か朝鮮へでも行こうかと思つてるんです」

「満洲か朝鮮？ ひどくまた思い切つたもんだね。だって、御前さつき先刻満洲は物騒いやで厭いやだつて云つたじゃないか」

用談はこんなところに往つたり来たりして、ついに要領を得なかつた。しまいに宗助が、「まあ、好いや、そう心配しないで、どうかなるよ。何しろ返事の来しだい、おれがすぐ知らせてやる。その上でまた相談するでしょう」と云つたので、談話はなしに区切がついた。

小六が帰りがけに茶の間を覗のぞいたら、御米は何にもせずに、長火鉢ながひばちに倚よりかかつていた。

「姉さん、さようなら」と声を掛けたら、「おや御帰り」と云いながらようやく立つて来た。

四

小六ころうくの苦くにしていた佐伯さえきからは、予期の通り二三日して返事があつたが、それは極きまめて簡単なもので、端書はがきでも用の足りるところを、鄭重ていちょうに封筒へ入れて三銭の切手を貼はつた、叔母の自筆に過ぎなかつた。

役所から帰つて、筒袖つつそでの仕事着を、窮屈きうくつそうに脱ぬぎ易かえて、火鉢ひばちの前へ坐すわるや否や、抽出ひきだしから一寸ほどわざと余して差し込んであつた状袋に眼が着いたので、御米およねの汲ひんで出す番茶を一口呑のんだまま、宗助そうすけはすぐ封を切つた。

「へえ、安やすさんは神戸へ行つたんだつてね」と手紙を読みながら云つた。

「いつ?」と御米は湯呑を夫の前に出した時の姿勢のままに聞いた。

「いつも書いてないがね。何しろ遠からぬうちには帰京仕るべく候間と書いてあるから、もうじき帰つて来るんだらう」

「遠からぬうちなんて、やっぱり叔母さんね」

宗助は御米の批評に、同意も不同意も表しなかった。読んだ手紙を巻き納めて、投げるようにそこへ放り出して、四五日目になる、ざらざらした腮あざを、気味わるそうに撫なで廻まわした。

御米はすぐその手紙を拾ったが、別に読もうともしなかった。それを膝ひざの上へ乗せたまま、夫の顔を見て、

「遠からぬうちには帰京つかまつ仕るべく候間、どうだつて云うの」と聞いた。

「いずれ帰つたら、安之助やすのすけと相談して何とか御挨拶ごあいさつを致しますと云うのさ」

「遠からぬうちじや曖あいまい昧まいね。いつ帰るとも書いてなくつて」

「いいや」

御米は念のため、膝の上の手紙を始めて開いて見た。そうしてそれを元のように畳んで、「ちよつとその状袋を」と手おとを夫の方へ出した。宗助は自分と火鉢の間に挟くまっている青い封筒を取つて細君に渡した。御米はそれをふつと吹いて、中を膨ふくらまして手紙を収めた。そうして台所へ立った。

宗助はそれぎり手紙の事には気を留めなかった。今日役所で同僚が、この間英吉利イギリスから

来遊したキチナー元帥に、新橋の傍で逢つたと云う話を思い出して、ああ云う人間になると、世界中どこへ行つても、世間を騒がせるようにできているようだが、実際そういう風に生れついて来たものかも知れない。自分の過去から引き摺ってきた運命や、またその続きとして、これから自分の眼前に展開されべき将来を取つて、キチナーと云う人のそれに比べて見ると、とうてい同じ人間とは思えないぐらい懸け隔たっている。

こう考えて宗助はしきりに煙草を吹かした。表は夕方から風が吹き出して、わざと遠くの方から襲つて来るような音がする。それが時々やむと、やんだ間は寂として、吹き荒れる時よりはなお淋しい。宗助は腕組をしながら、もうそろそろ火事の半鐘が鳴り出す時節だと思つた。

台所へ出て見ると、細君は七輪の火を赤くして、肴の切身を焼いていた。清は流し元に曲んで漬物を洗っていた。二人とも口を利かずにせつせと自分のやる事をやっている。宗助は障子を開けたなり、しばらく肴から垂る汗か膏の音を聞いていたが、無言のまままた障子を閉てて元の座へ戻つた。細君は眼さえ肴から離さなかつた。

食事を済まして、夫婦が火鉢を間に向い合つた時、御米はまた

「佐伯の方は困るのね」と云い出した。

「まあ仕方がない。安さんが神戸から帰るまで待つよりほかに道はあるまい」

「その前にちよつと叔母さんに逢つて話をしておいた方が好かなくなつて」

「そうさ。まあそのうち何とか云つて来るだろう。それまで打遣つておこよう」

「小六さんが怒つてよ。よくつて」と御米はわざと念を押しにおいて微笑した。宗助は下眼を使つて、手に持った小楊枝こようじを着物の襟えりへ差した。

なかいちんち
中一日置いて、

宗助はようやく佐伯からの返事を小六に知らせた。その時も手

紙しりの尻に、まあそのうちどうかなるだろうと云う意味を、例のごとく付け加えた。そうし

て当分はこの事件について肩が抜けたように感じた。自然の経過なりゆきがまた窮屈に眼の前に

押し寄せて来るまでは、忘れている方が面倒がなくなつて好いぐらいな顔をして、毎日役所

へ出てはまた役所から歸つて来た。歸りも遅いが、歸つてから出かけるなどという億劫おっくう

な事は滅多めったになかつた。客はほとんど来ない。用のない時は清を十時前に寝かす事さえあ

つた。夫婦は毎夜同じ火鉢の両側に向き合つて、食後一時間ぐらい話をした。話の題目は

彼らの生活状態に相応した程度のものであつた。けれども米屋の払を、この三十日みそかにはど

うしたものだろつという、苦しい世帯話は、いまだかつて一度も彼らの口には上らなかつ

た。と云つて、小説や文学の批評はもちろんの事、男と女の間を陽炎かげろうのように飛び廻る、

花やかな言葉のやりとりはほとんど聞かれなかった。彼らはそれほど年輩でもないのに、もうそこを通り抜けて、日ごとに地味になって行く人のようにも見えた。または最初から、色彩の薄い極めて通俗の人間が、習慣的に夫婦の関係を結ぶために寄り合ったようにも見えた。

上部うわべから見ると、夫婦ともそう物に屈托くつたくする気色けしきはなかった。それは彼らが小六の事に関して取った態度について見てもほぼ想像がつく。さすが女だけに御米は一二度、

「安さんは、まだ帰らないんでしょうかね。あなた今度の日曜ぐらいに番町まで行って御覧なさらなくって」と注意した事があるが、宗助は、

「うん、行っても好い」ぐらいな返事をするだけで、その行っても好い日曜が来ると、まるで忘れたように済ましている。御米もそれを見て、責める様子もない。天氣が好いと、「ちと散歩でもしていらっしやい」と云う。雨が降ったり、風が吹いたりすると、

「今日は日曜で仕合せね」と云う。

幸にして小六はその後一度もやって来ない。この青年は、至つて凝り性の神経質で、こうと思うとどこまでも進んで来るところが、書生時代の宗助によく似ている代りに、ふと気が変ると、昨日の事はまるで忘れたように引つ繰り返って、けろりとした顔をしている。

そこも兄弟だけあって、昔の宗助にそのままである。それから、頭脳が比較的明瞭で、理路に感情を注ぎ込むのか、または感情に理窟の枠を張るのか、どっちか分らないが、とにかく物に筋道を付けないと承知しないし、また一返筋道が付くと、その筋道を生かさなくってはおかないように熱中したがる。その上体質の割合に精力がつづくから、若い血気に任せて大抵の事はする。

宗助は弟を見るたびに、昔の自分が再び蘇生して、自分の眼の前に活動しているような気がしてならなかった。時には、はらはらする事もあった。また苦々しく思う折もあった。そう云う場合には、心のうちに、当時の自分が一閃に振舞った苦い記憶を、できるだけしびしび呼び起させるために、とくに天が小六を自分の眼の前に据え付けるのではなからうかと思つた。そうして非常に恐ろしくなつた。こいつもあるいはおれと同一の運命に陥るために生れて来たのではなからうかと考えると、今度は大いに心がかりになつた。時によると心がかりよりは不愉快であつた。

けれども、今日まで宗助は、小六に対して意見がましい事を云つた事もなければ、将来について注意を与えた事もなかつた。彼の弟に対する待遇方はただ普通凡庸のものであつた。彼の今の生活が、彼のような過去を有っている人とは思えないほどに、沈んでい

るごとく、彼の弟を取り扱う様子にも、過去と名のつくほどの経験をもった年長者の素振は容易に出なかつた。

宗助と小六の間には、まだ二人ほど男の子が挟まっていたが、いずれも早世してしまつたので、兄弟とは云いながら、年は十ばかり違つている。その上宗助はある事情のために、一年の時京都へ転学したから、朝夕いっしょに生活していたのは、小六の十二三の時までである。宗助は剛情な聴かぬ氣の腕白小僧としての小六をいまだに記憶している。その時分は父も生きていたし、家の都合も悪くはなかつたので、抱車夫を邸内の長屋に住まわして、楽に暮していた。この車夫に小六よりは三つほど年下の子供があつて、始終小六の御相手をして遊んでいた。ある夏の日盛りに、二人して、長い竿のさきへ菓子袋を括り付けて、大きな柿の木の下で蟬の捕りくらをしているのを、宗助が見て、兼坊そんなに頭を日に照らしつけると霍乱になるよ、さあこれを被れと云つて、小六の古い夏帽を出してやつた。すると、小六は自分の所有物を兄が無断で他にくれてやつたのが、癩に障つたので、突然兼坊の受取つた帽子を引つたくつて、それを地面の上へ抛げつけるや否や、馳け上がるようにその上へ乗つて、くしゃりと麦藁帽を踏み潰してしまつた。宗助は縁から跣足で飛んで下りて、小六の頭を擲りつけた。その時から、宗助の眼

には、小六が小悪らしい小僧として映った。

二年の時宗助は大学を去らなければならぬ事になった。東京の家へも帰えれない事になった。京都からすぐ広島へ行つて、そこに半年ばかり暮らしているうちに父が死んだ。母は父よりも六年ほど前に死んでいた。だから後には二十五六になる妾と、十六になる小六が残つただけであつた。

佐伯から電報を受け取つて、久しぶりに出京した宗助は、葬式を済ました上、家の始末をつけようと思つてだんだん調べて見ると、あると思つた財産は案外に少なくなつて、かえつて無いつもりでの借金がいふあつたに驚ろかされた。叔父の佐伯に相談すると、仕方がないから邸を売るが好かろうと云う話であつた。妾は相当の金をやつてすぐ暇を出す事にきめた。小六は当分叔父の家に引き取つて世話をして貰う事にした。しかし肝心の家屋敷はすぐ右から左へと売れる訳には行かなかつた。仕方がないから、叔父に一時の工面を頼んで、当座の片をつけて貰つた。叔父は事業家でいろいろな事に手を出しては失敗する、云わば山氣の多い男であつた。宗助が東京にいる時分も、よく宗助の父を説きつけては、旨い事を云つて金を引き出したものである。宗助の父にも慾があつたかも知れないが、この伝で叔父の事業に注ぎ込んだ金高はけつして少ないものではなかつた。

父の亡くなったこの際にも、叔父の都合は元と余り変っていない様子であったが、生前の義理もあるし、またこう云う男の常として、いざと云う場合には比較的融通のつくものと見えて、叔父は快よく整理を引き受けてくれた。その代り宗助は自分の家屋敷の売却方についていつさいの事を叔父に一任してしまった。早く云うと、急場の金策に対する報酬として土地家屋を提供したようなものである。叔父は、

「何しろ、こう云うものは買手を見て売らないと損だからね」と云った。

道具類も積せきばかり取つて、金目にならないものは、ことごとく売り払つたが、五六幅の掛物と十二三点の骨董品こつとうひんだけは、やはり気長に欲しがる人を探さがさないと損だと云う叔父の意見に同意して、叔父に保管を頼む事にした。すべてを差し引いて手元に残つた有金は、約二千円ほどのものであったが、宗助はそのうちの幾分を、小六の学資として、使わなければならぬと気がついた。しかし月々自分の方から送るとすると、今日こんにちの位置が堅固でない当時、はなはだ実行しにくい結果に陥おちいりそうなので、苦しくはあつたが、思い切つて、半分だけを叔父に渡して、何分宜よろしくと頼んだ。自分が途中で失敗しくじつたから、せめて弟だけは物にしてやりたい気もあるので、この千円が尽きたあとは、またどうにか心配もできようしまたしてくるだろうぐらいの不ふたしか慥な希望を残して、また広島へ帰つて行つ

た。

それから半年ばかりして、叔父の自筆で、家はとうとう売れたから安心しろと云う手紙が来たが、いくらに売れたとも何とも書いてないので、折り返して聞き合せると、二週間ほど経つての返事に、優に例の立替を償うに足る金額だから心配しなくても好いとあつた。宗助はこの返事に対して少なからず不満を感じたには感じたが、同じ書信の中に、委細はいずれ御面会の節云々とあつたので、すぐにも東京へ行きたいような気がして、実はこうだがと、相談半分細君に話して見ると、御米は気の毒そうな顔をして、

「でも、行けないんだから、仕方がないわね」と云つて、例のごとく微笑した。その時宗助は始めて細君から宣告を受けた人のように、しばらく腕組をして考えたが、どう工夫したつて、抜ける事のできないような位地と事情の下に束縛されていたので、ついそれなりになつてしまつた。

仕方がないから、なお三四回書面で往復を重ねて見たが、結果はいつも同じ事で、版はんこ行で押ししたようにいづれ御面会の節を繰り返して来るだけであつた。

「これじゃしようがないよ」と宗助は腹が立ったような顔をして御米を見た。三カ月ばかりして、ようやく都合がついたので、久し振りに御米を連れて、出京しようと思ふ矢先に、

つい風邪を引いて寝たのが元で、腸窒扶斯に変化したため、六十日余りを床の上に暮らし、あとの三十日ほどは充分仕事もできないくらい衰えてしまった。

病気が本復してから間もなく、宗助はまた広島を去って福岡の方へ移らなければならぬ身となった。移る前に、好い機会だからちよつと東京まで出たいものだと考えているうちに、今度もいろいろの事情に制せられて、ついそれも遂行せずに、やはり下り列車の走る方に自己の運命を托した。その頃は東京の家を畳むとき、懐にして出た金は、ほとんど使い果たしていた。彼の福岡生活は前後二年を通じて、なかなかの苦闘であった。彼は書生として京都にいる時分、種々の口実の下に、父から臨時随意に多額の学資を請求して、勝手に勝手に消費した昔をよく思い出して、今の身分と比較しつつ、しきりに因果の束縛を恐れた。ある時はひそかに過ぎた春を回顧して、あれが己の栄華の頂点だったんだと、始めて醒めた眼に遠い霞を眺める事もあった。いよいよ苦しくなった時、

「御米、久しく放っておいたが、また東京へ掛合つてみようかな」と云い出した。御米は無論逆いはしなかつた。ただ下を向いて、

「駄目よ。だって、叔父さんに全く信用がないんですもの」と心細そうに答えた。

「向うじゃこつちに信用がないかも知れないが、こつちじゃまた向うに信用がないんだ」

と宗助は威張つて云い出したが、御米の俯目ふしめになつてゐる様子を見ると、急に勇氣が挫くじける風に見えた。こんな問答を最初は月に一二返ぐらい繰り返していたが、後のちには二月ふたつきに一返みつきになり、三月に一返になり、とうとう、

「好いいや、小六さえどうかしてくれば。あとの事はいづれ東京へ出たら、逢あつた上で話をつけらあ。ねえ御米、そうすると、しようじやないか」と云い出した。

「それで、好よござんすとも」と御米は答えた。

宗助は佐伯の事をそれなり放つてしまった。単なる無心は、自分の過去に対しても、叔父に向つて云い出せるものでないと、宗助は考えていた。したがつてその方の談判は、始めからいまだかつて筆にした事がなかつた。小六からは時々手紙が来たが、極きわめて短かい形式的のものが多かった。宗助は父の死んだ時、東京で逢つた小六を覚えてゐるだけだから、いまだに小六を他愛たわいない小供ぐらいに想像するので、自分の代理に叔父と交渉させようなどと云う気は無論起らなかつた。

夫婦は世の中の日の目を見ないものが、寒さに堪たえかねて、抱き合つて暖だんを取るような具合に、御互同志を頼りとして暮らしていた。苦しい時には、御米がいつでも、宗助に、「でも仕方がないわ」と云つた。宗助は御米に、

「まあ我慢するさ」と云った。

二人の間には諦めとか、忍耐とか云うものが断えず動いていたが、未来とか希望と云うものの影はほとんど射さないように見えた。彼らは余り多く過去を語らなかつた。時としては申し合わせたように、それを回避する風さえあつた。御米が時として、

「そのうちにはまたきつと好い事があつてよ。そうそう悪い事ばかり続くものじゃないから」と夫を慰さめるように云う事があつた。すると、宗助にはそれが、真心ある妻の口を藉りて、自分を翻弄する運命の毒舌のごとくに感ぜられた。宗助はそう云う場合には何にも答えずにただ苦笑するだけであつた。御米がそれでも気がつかずに、なにか云い続けるのと、

「我々は、そんな好い事を予期する権利のない人間じゃないか」と思い切つて投げ出してしまふ。細君はようやく気がついて口を噤んでしまふ。そうして二人が黙つて向き合つてみると、いつの間にか、自分達は自分達の拵えた、過去という暗い大きな窖の中に落ちてゐる。

彼らは自業自得で、彼らの未来を塗抹した。だから歩いてゐる先の方には、花やかな色彩を認める事ができないものと諦らめて、ただ二人手を携えて行く気になつた。叔父の売

り払つたと云う地面家作についても、固^{もと}より多くの期待は持っていないなかつた。時々考え出したように、

「だって、近頃の相場なら、捨^{すて}売^{うり}にしたつて、あの時叔父の拵^{しら}えにくれた金の倍にはなるんだもの。あんまり馬鹿馬鹿しいからね」と宗助が云い出すと、御米は淋^{さみ}しそうに笑つて、

「また地面？　いつまでもあの事ばかり考えていらつしやるのね。だって、あなたが万事宜^{よろ}しく願いますと、叔父さんにおつしやつたんでしよう」と云う。

「そりや仕方がないさ。あの場合ああでもしなければ方^{ほう}がつかないんだもの」と宗助が云う。

「だからさ。叔父さんの方では、御金の代りに家^{うち}と地面を貰^{もら}つたつもりでいらつしやるかも知れなかつてよ」と御米が云う。

そう云われると、宗助も叔父の処置に一理あるようにも思われて、口では、

「そのつもりが好くないじゃないか」と答弁するようなもの、この問題はその都度^{つど}しいしだいに背景の奥に遠ざかつて行くのであつた。

夫婦がこんな風に淋^{むっ}しく睦^{むつ}まじく暮らして来た二年目の末に、宗助はもとの同級生で、

学生時代には大変懇意であつた杉原と云う男に偶然出逢つた。杉原は卒業後高等文官試験に合格して、その時すでに或省に奉職していたのだが、公務上福岡と佐賀へ出張することになつて、東京からわざわざやつて来たのである。宗助は所の新聞で、杉原のいつ着いて、どこに泊つているかをよく知つてはいたが、失敗者としての自分に顧みて、成効者の前に頭を下げる対照を恥ずかしく思つた上に、自分は在学当時の旧友に逢うのを、特に避けたい理由を持つていたので、彼の旅館を訪ねる気は毛頭なかつた。

ところが杉原の方では、妙な引掛りから、宗助のここに燻ぶつてゐる事を聞き出して、強いて面会を希望するので、宗助もやむを得ず我を折つた。宗助が福岡から東京へ移れるようになったのは、全くこの杉原の御蔭である。杉原から手紙が来て、いよいよ事がきまつたとき、宗助は箸を置いて、

「御米、とうとう東京へ行けるよ」と云つた。

「まあ結構ね」と御米が夫の顔を見た。

東京に着いてから二三週間は、眼の回るように日が経つた。新らしく世帯を有つて、新しい仕事を始める人に、あり勝ちな急忙しなさと、自分達を包む大都の空気の、日夜劇しく震盪する刺戟とに駆られて、何事をもじつと考える閑もなく、また落ちついて手を

下す分別も出なかつた。

夜汽車で新橋へ着いた時は、久しぶりに叔父夫婦の顔を見たが、夫婦とも灯のせいか晴れやかな色には宗助の眼に映らなかつた。途中に事故があつて、着の時間が珍らしく十分ほど後れたのを、宗助の過失でもあるかのように、待草臥れた気色であつた。

宗助がこの時叔母から聞いた言葉は、

「おや宗さん、しばらく御目に掛からないうちに、大変御老けなすつた事」という一句であつた。御米はその折始めて叔父夫婦に紹介された。

「これがあの……」と叔母は逡巡つて宗助の方を見た。御米は何と挨拶のしようもないので、無言のままただ頭を下げた。

小六も無論叔父夫婦と共に二人を迎いに來ていた。宗助は一眼その姿を見たとき、いつの間にか自分を凌ぐように大きくなつた、弟の發育に驚ろかされた。小六はその時中学を出て、これから高等学校へ這入ろうという間際であつた。宗助を見て、「兄さん」とも「御帰りなさい」とも云わないで、ただ不器用に挨拶をした。

宗助と御米は一週ばかり宿屋住居をして、それから今の所に引き移つた。その時は叔父夫婦がいろいろ世話を焼いてくれた。細々しい台所道具のようなものは買うまでもある

まい、古いのでよければと云うので、小人数に必要なだけ一通り取り揃えて送って来た。その上、

「御前も新世帯だから、さぞ物もの要いりが多かろう」と云つて金を六十円くれた。

家うちを持つてかれこれ取り紛まぎれているうちに、早はや半月よ余も経つたが、地方にいる時分あんなに気にしていた家いえ邸やしきの事は、ついまだ叔父に言い出さずにいた。ある時御米が、

「あなたあの事を叔父さんにおつしやつて」と聞いた。宗助はそれで急に思い出したように、

「うん、まだ云わないよ」と答えた。

「妙ね、あれほど気にしていらしたのに」と御米がうす笑をした。

「だって、落ちついて、そんな事を云い出す暇ひまがないんだもの」と宗助が弁解した。

また十日ほど経たつた。すると今こん度は宗助の方から、

「御米、あの事はまだ云わないよ。どうも云うのが面倒いで厭いやになった」と云い出した。

「厭いやなのを無理におつしやらなくつてもいいわ」と御米が答えた。

「好こいかい」と宗助が聞き返した。

「好こいかいって、もともとあなたの事じゃなくつて。私は先せんからどうでも好こいんだわ」と

御米が答えた。

その時宗助は、

「じゃ、鹿爪しかつめらしく云い出すのも何だか妙だから、そのうち機会おひがあつたら、聞くとしよう。なにそのうち聞いて見る機会おひがきつと出て来るよ」と云つて延ばしてしまった。

小六は何不足なく叔父の家に寝起ねおきしていた。試験を受けて高等学校へ這入はいれれば、寄宿へ入舎しなければならぬと云うので、その相談まですでに叔父と打合せがしてあるようであつた。新らしく出京した兄からは別段学資の世話を受けないせい、自分の身の上については叔父ほどに親しい相談も持ち込んで来なかつた。従兄弟いとこの安之助とは今までの關係上大変仲が好かつた。かえつてこの方が兄弟らしかつた。

宗助は自然叔父の家うちに足が遠くなるようになった。たまに行つても、義理一遍の訪問に終る事が多いので、帰り路にはいつもつまらない気がしてならなかつた。しまいには時候の挨拶あいさつを済ますと、すぐ帰りたくなる事もあつた。こう云う時には三十分と坐すわつて、世間話に時間を繋つなぐのにさえ骨が折れた。向うでも何だか気が置けて窮屈だと云う風が見えた。

「まあいいじゃありませんか」と叔母が留めてくれるのが例であるが、そうすると、なお

さらいにくい心持がした。それでも、たまには行かないと、心のうちで気が咎めるような不安を感じるので、また行くようになった。折々は、

「どうも小六が御厄介になりました」とこつちから頭を下げて礼を云う事もあった。けれども、それ以上は、弟の将来の学資についても、また自分が叔父に頼んで、留守中に売り払って貰った地所家作についても、口を切るのがつい面倒になった。しかし宗助が興味を有たない叔父の所へ、不精無精にせよ、時たま出掛けて行くのは、単に叔父甥の血属關係を、世間並に持ち堪えるための義務心からではなくって、いつか機会があつたら、片をつけたい或物を胸の奥に控えていた結果に過ぎないのは明かであつた。

「宗さんはどうもすっかり変つちまいましたね」と叔母が叔父に話す事があつた。すると叔父は、

「そうよなあ。やつぱり、ああ云う事があると、永くまで後へ響くものだからな」と答えて、因果は恐ろしいと云う風をする。叔母は重ねて、

「本当に、怖いもんですね。元はあんな寝入った子じやなかつたが——どうもはしやぎ過ぎるくらい活潑でしたからね。それが二三年見ないうちに、まるで別の人みたように老けちまつて。今じやあなたより御爺さん御爺さんしていますよ」と云う。

「真逆^{まさか}」と叔父がまた答える。

「いえ、頭や顔は別として、様子がさ」と叔母がまた弁解する。

こんな会話が老夫婦の間に取り換わされたのは、宗助が出京して以来一度や二度ではなかった。実際彼は叔父の所へ来ると、老人の眼に映る通りの人間に見えた。

御米はどう云うものか、新橋へ着いた時、老人夫婦に紹介されたぎり、かつて叔父の家の敷居を跨^{また}いだ事がない。むこうから見れば叔父さん叔母さんと丁寧^{ていねい}に接待するが、帰りがけに、

「どうです、ちと御出かけなすつちや」などと云われると、ただ、

「ありがとう」と頭を下げるだけで、ついで出掛けた試^{ためし}はなかつた。さすがの宗助さえ一度は、

「叔父さんの所へ一度行つて見ちや、どうだい」と勧め^{すす}めた事があるが、

「でも」と変な顔をするので、宗助はそれぎりけつしてその事を云い出さなかつた。

両家族はこの状態で約一年ばかりを送つた。すると宗助よりも気分は若いと許された叔父が突然死んだ。病症は脊髄^{せきずい}脳膜炎^{のうまくえん}とかいう劇^{げき}症^{しょう}で、二三日風邪^{かぜ}の気味で寝^ねていたが、便所へ行つた帰りに、手を洗おうとして、柄杓^{ひしゃく}を持ったまま卒倒したなり、一^{いち}

日^ち経^たつか経^たないうちに冷たくなってしまったのである。

「御米、叔父はどうとう話をしずに死んでしまったよ」と宗助が云った。

「あなたまだ、あの事を聞くつもりだったの、あなたも随分執^{しゅう}念^{ねん}深^{ふか}いのね」と御米が云った。

それからまた一年ばかり経ったら、叔父の子の安之助が大学を卒業して、小六が高等学校の二年生になった。叔母は安之助といっしよに中六番町に引き移った。

三年目の夏休みに小六は房州の海水浴へ行^いった。そこに一月余りも滞在しているうちに九月になり掛けたので、保^ほ田^たから向^{むか}うへ突^つ切^きって、上^か総^ずの海岸^{かいがん}を九十九里^{くじゅうじゅうり}伝^{でん}いに、銚^ち子^{しょうし}まで来たが、そこから思い出したように東京へ帰^{かえ}った。宗助の所へ見^みえたのは、帰^{かえ}ってから、まだ二三日しか立たない、残暑^{ざんしよ}の強い午後である。真黒^{まぐろ}に焦^こげた顔^{かお}の中に、眼^{まなこ}だけ光^{ひかり}らして、見^み違^{ちが}えるように 蚤^{ばん}色^{しよく}を帯^おびた彼は、比較^{ひかく}的^{てき}日の遠^{とほ}い座敷^{ざしき}へ這^は入^いったなり横^{よこ}になって、兄^{あに}の帰^{かえ}りを待^{まち}ち受^うけていたが、宗助の顔^{かお}を見るや否^{いな}や、むっくり起^たき上^あがって、「兄^{あに}さん、少し御話^{ごわ}があつて来たんですが」と開^{ひら}き直^{ただ}られたので、宗助は少し驚^{おど}ろいた気^き味^みで、暑^{あつ}苦^くしい洋服^{やうふく}さえ脱^かぎ更^かえずに、小六の話を聞^きいた。

小六の云^いうところによると、二三日^{ふたみっか}前^{まへ}彼^{かれ}が上^{かみ}総^ずから帰^{かえ}った晩^{ばん}、彼^{かれ}の学^{がく}資^しはこの暮^{くれ}限^り、

気の毒ながら出してやれないと叔母から申し渡されたのだそうである。小六は父が死んで、すぐと叔父に引き取られて以来、学校へも行けるし、着物も自然にできるし、小遣も適宜に貰えるので、父の存生中と同じように、何不足なく暮らせて来た惰性から、その日その晩までも、ついで学資と云う問題を頭に思い浮べた事がなかったため、叔母の宣告を受けた時は、茫然してとかくの挨拶さえできなかったのだと云う。

叔母は気の毒そうに、なぜ小六の世話ができなくなったかを、女だけに、一時間も掛かって委しく説明してくれたそうである。それには叔父の亡くなった事やら、継いで起る経済上の変化やら、また安之助の卒業やら、卒業後に控えている結婚問題やらが這入っていたのだと云う。

「できるならば、せめて高等学校を卒業するまでと思つて、今日までいろいろ骨を折つただけでも」

叔母はこう云つたと小六は繰り返した。小六はその時ふと兄が、先年父の葬式の時に出席して、万事を片づけた後、広島へ帰るとき、小六に、御前の学資は叔父さんに預けてあるからと云つた事があるのを思い出して、叔母に始めて聞いて見ると、叔母は案外な顔をして、

「そりや、あの時、宗そうさんが若干いくらか置いて行きなすつた事は、行きなすつたが、それはもうありやしないよ。叔父さんのまだ生きて御出おいでの時分から、御前の学資は融通して来たんだから」と答えた。

小六は兄から自分の学資がどれほどあつて、何年分の勘かんじょう定じょうで、叔父に預けられたかを、聞いておかなかつたから、叔母からこう云われて見ると、一ひと言ことも返しうがなかつた。

「御前おまえも一人じやなし、兄さんもある事だからよく相談をして見たら好いだらう。その代り私わたしも宗さんに逢つて、とつくり訳わけを話しましょうから。どうも、宗さんも余あんまり近頃は御出おいででないし、私も御無沙汰ごぶさたばかりしているのでね、つい御前の事は御話をする訳にも行かなかつたんだよ」と叔母は最後につけ加えたそうである。

小六から一部いちぶ始し終しゆうを聞いた時、宗助はただ弟の顔を眺ながめて、一口、
「困つたな」と云つた。昔のように赫かつと激して、すぐ叔母の所へ談判に押し掛ける気色けしきもなければ、今まで自分に対して、世話にならないでも済む人のように、よそよそしく仕向けて来た弟の態度が、急に方向を転じたのを、悪にくいと思う様子も見えなかつた。

自分の勝手に作り上げた美しくい未来が、半分壊くずれかかつたのを、さも傍はたの人のせい

でもあるかのごとく心を乱している小六の帰る姿を見送った宗助は、暗い玄關の敷居の上に立って、格子こうしの外に射す夕日をしばらく眺ながめていた。

その晩宗助は裏から大きな芭蕉ばしやうの葉を二枚剪きつて来て、それを座敷の縁に敷いて、その上に御米と並んで涼すずみながら、小六の事を話した。

「叔母さんは、こつちで、小六さんの世話をしろつて云う気なんじゃなくなつて」と御米が聞いた。

「まあ、逢つて聞いて見ないうちは、どう云う料簡りやうけんか分らないがね」と宗助が云うと、御米は、

「きつとそうよ」と答えながら、暗がりうちわで団扇をはたはた動かした。宗助は何も云わずに、頸くびを延ばして、庇ひさしと崖がけの間に細く映る空の色を眺めた。二人はそのまましばらく黙つていたが、良やあつて、

「だつてそれじゃ無理ね」と御米がまた云つた。

「人間一人大学を卒業させるなんて、おれの手際てぎわじゃ到底駄目だ」と宗助は自分の能力だけを明らかにした。

会話はそこで別の題目に移つて、再び小六の上にも叔母の上にも帰つて来なかつた。そ

れから二三日するとちようど土曜が来たので、宗助は役所の帰りに、番町の叔母の所へ寄つて見た。叔母は、

「おやおや、まあ御珍らしい事」と云つて、いつもよりは愛想よく宗助を款待してくれた。その時宗助は厭なのを我慢して、この四五年來溜めて置いた質問を始めて叔母に掛けた。叔母は固よりできるだけは弁解しない訳に行かなかつた。

叔母の云うところによると、宗助の邸宅を売払つた時、叔父の手に這入つた金は、たしかには覚えていないが、何でも、宗助のために、急場の間に合せた借財を返した上、なお四千五百円とか四千三百円とか余つたそうである。ところが叔父の意見によると、あの屋敷は宗助が自分に提供して行つたのだから、たといいくら余ろうと、余つた分は自分の所得と見做して差支ない。しかし宗助の邸宅を売つて儲けたと云われては心持が悪いから、これは小六の名義で保管して置いて、小六の財産にしてやる。宗助はあんな事をして廢嫡にまでされかかつた奴だから、一文だつて取る権利はない。

「宗さん怒つちやいけませんよ。ただ叔父さんの云つた通りを話すんだから」と叔母が断つた。宗助は黙つてあとを聞いていた。

小六の名義で保管されべき財産は、不幸にして、叔父の手腕で、すぐ神田の賑やかな表

通りの家屋に変形した。そうして、まだ保険をつけないうちに、火事で焼けてしまった。小六には始めから話してない事だから、そのままにして、わざと知らせずにおいた。

「そう云う訳でね、まことに宗さんにも、御気の毒だけれども、何しろ取って返しのない事だから仕方がない。運だと思つて諦^{あき}ちめて下さい。もつとも叔父さんさえ生きていれば、またどうともなるんでしようさ。小六一人ぐらいそりや訳はありますまいよ。よしんば、叔父さんがいなさらない、今にしたつて、こつちの都合さえ好ければ、焼けた家^{うち}と同じだけのものを、小六に返すか、それでなくつても、当人の卒業するまでぐらいは、どうにかして世話もできるんですけれど」と云つて叔母はまたほかの内幕話をして聞かせた。それは安之助の職業についてであつた。

安之助は叔父の一人息子で、この夏大学を出たばかりの青年である。家庭で暖かに育つた上に、同級の学生ぐらいよりほかに交際のない男だから、世の中の事にはむしろ迂濶^{うかつ}と云つてもいいが、その迂濶なところどころか鷹揚^{おうよう}な趣^{おもむき}を具^{そな}へて実社会へ顔を出したのである。専門は工科の器械学だから、企業熱の下火になつた今^{こんにち}日といえども、日本中にたくさんある会社に、相応の口の一つや二つあるのは、もちろんであるが、親譲^{おやゆず}りの山氣^{やまぎ}がどこかに潜^{ひそ}んでいるものと見えて、自分で自分の仕事をして見たくてならない矢先へ、

同じ科の出身で、小規模ながら専有の工場こうばを月島へん辺に建てて、独立の経営をやっている先輩に出逢ったのが縁となつて、その先輩と相談の上、自分も幾分かの資本を注ぎ込んで、いつしよに仕事をしてみようという考になつた。叔母の内幕話と云つたのはそこである。

「でね、少しあつた株をみんなその方へ廻す事にしたもんだから、今じや本當に一文いちもんなし同然な仕儀しぎでいるんですよ。それは世間から見ると、人数は少なし、家いえ邸やしきは持つてゐるし、樂に見えるのも無理のないところでしょう。この間も原の御母おつかさんが来て、まああなたほど氣樂な方はない、いつ来て見ても万年青おもとの葉ばかり丹念に洗つてゐるつてね。真逆まさかさうでも無いんですけれども」と叔母が云つた。

宗助が叔母の説明を聞いた時は、ぼんやりしてとかくの返事が容易に出なかつた。心のなかで、これは神経衰弱の結果、昔のように機敏で明快な判断を、すぐ作り上げる頭が失なくなつた証しやうこ拠こだろうと自覺した。叔母は自分の云う通りが、宗助に本當と受けられないのを氣にするように、安之助から持ち出した資本の高まで話した。それは五千円ほどであつた。安之助は当分の間、わずかな月給と、この五千円に対する利益配当とで暮らさなければならぬのださうである。

「その配当だつて、まだどうなるか分りやしないんでさあね。旨うまく行つたところで、一割

か一割五分ぐらいなものでしようし、また一つ間違えばまるで煙けむにならないとも限らないんですから」と叔母がつけ加えた。

宗助は叔母の仕打に、これと云う目立つた阿漕あこぎなところも見えないので、心の中うちでは少なからず困ったが、小六の将来について一口の掛合かけあいもせず帰るのはいかにも馬鹿馬鹿しい気がした。そこで今までの問題はそこに据すえつきりにして置いて、自分が当時小六の学資として叔父に預けて行った千円の所置を聞き糺ただして見ると、叔母は、

「宗さん、あれこそ本当に小六が使つちまつたんですよ。小六が高等学校へ這入はいつてからでも、もうかれこれ七百元は掛かつているんですもの」と答えた。

宗助はついだから、それと同時に、叔父に保管を頼んだ書画や骨董品こつとうひんの成行なりゆきを確かめて見た。すると、叔母は、

「ありあとんだ馬鹿な目に逢つて」と云いかけたが、宗助の様子を見て、

「宗さん、何ですか、あの事はまだ御話をしなかつたんでしたかね」と聞いた。宗助がいえと答えると、

「おやおや、それじゃ叔父さんが忘れちまつたんですよ」と云いながら、その顛末てんまつを語つて聞かした。

宗助が広島へ帰ると間もなく、叔父はその売捌方を真田とかいう懇意の男に依頼した。この男は書画骨董の道に明るいとかいっているので、平生そんなものの売買の周旋をして諸方へ出入するそうであつたが、すぐさま叔父の依頼を引き受けて、誰某が何を欲しいと云うから、ちよつと拝見とか、何々氏がこう云う物を希望だから、見せましようとか号して、品物を持って行つたぎり、返して来ない。催促すると、まだ先方から戻つて参りませんからとか何とか言訳をするだけであつて埒の明いた試がなかつたが、とうとう持ち切れなくなつたと見えて、どこかへ姿を隠してしまつた。

「でもね、まだ屏風が一つ残つていますよ。この間引越の時に、気がついて、こりや宗さんのだから、今度ついでがあつたら届けて上げたらいだらうって、安がそう云つていましたつけ」

叔母は宗助の預けて行つた品物にはまるで重きを置いていないような、ものの云い方をした。宗助も今日まで放つておくくらいだから、あまりその方面には興味を有ち得なかつたので、少しも良心に悩まされている気色のない叔母の様子を見ても、別に腹は立たなかつた。それでも、叔母が、

「宗さん、どうせ家じゃ使つていないんだから、なんなら持つておいでなすつちやどうで

す。この頃はああいうものが、大変価が出たと云う話じやありませんか」と云つたときは、実際それを持つて帰る氣になつた。

納戸なんどから取り出して貰つて、明るい所で眺めると、たしかに見覚みおぼえのある二枚折であつた。下に萩はぎ、桔梗ききよう、すずき、芒すすき、葛くず、女郎花おみなえしを隙間すきまなく描いた上に、真丸な月を銀で出して、その横の空いた所へ、野路のじや空月の中なる女郎花、其一きいちと題してある。宗助は膝ひざを突いて銀の色の黒く焦げた辺あたりから、葛の葉の風に裏を返している色の乾いた様から、大福だいふくほどな大きな丸い朱の輪廓りんかくの中に、抱ほう一いつと行書で書いた落款らくかんをつくづくと見て、父の生きていた當時を憶い起さずにはいられなかつた。

父は正月になると、きつとこの屏風びやうぶを薄暗い蔵くらの中から出して、玄關の仕切りに立てて、その前へ紫檀したんの角な名刺入を置いて、年賀を受けたものである。その時はめでたいからと云うので、客間の床とこには必ず虎の双幅そうふくを懸けた。これは岸駒がんくじやない岸岱がんだいだと父が宗助に云つて聞かせた事があるのを、宗助はいまだに記憶していた。この虎の面えには墨が着いていた。虎が舌を出して谷の水を呑のんでいる鼻柱が少し汚けがされたのを、父は苛ひどく氣にして、宗助を見るたびに、御前ここへ墨を塗つた事を覚えてゐるか、これは御前の小さい時分の悪戯いたずらだぞと云つて、おかしいような恨めしいような一種の表情をした。

宗助は屏風びょうぶの前に畏かしこまつて、自分が東京にいた昔の事を考えながら、

「叔母さん、じゃこの屏風はちようだいして行きましよう」と云った。

「ああああ、御持ちなさいとも。何なら使に持たせて上げましよう」と叔母は好意から申し添えた。

宗助は然しかるべく叔母に頼んで、その日はそれで切り上げて帰った。晩食ばんめしの後御米のちといつしよにまた縁側へ出て、暗い所で白地の浴衣ゆかたを並べて、涼みながら、画の話をした。

「安さんには、御逢いなさらなかつたの」と御米が聞いた。

「ああ、安さんは土曜でも何でも夕方まで、工場にいるんだそうだ」

「随分骨が折れるでしょうね」

御米はそう云つたなり、叔父や叔母の処置については、一言ひとことの批評も加えなかつた。

「小六の事はどうしたものだろう」と宗助が聞くと、

「そうね」と云うだけであつた。

「理窟りくつを云えば、こつちにも云い分はあるが、云い出せば、とどのつまりは裁判沙汰になるばかりだから、証しょうこ拠も何もなければ勝てる訳のものじゃなし」と宗助が極端を予想すると、

「裁判なんかには勝たなくたってもいいわ」と御米がすぐ云ったので、宗助は苦笑してやめた。

「つまりおれがあの時東京へ出られなかつたからの事さ」

「そうして東京へ出られた時は、もうそんな事はどうでもよかつたんですもの」

夫婦はこんな話をしながら、また細い空を底ひさしの下から覗のぞいて見て、明日あしたの天気を語り合つて蚊帳かやに這入はいつた。

次の日曜に宗助は小六を呼んで、叔母の云つた通りを残らず話して聞かせて、

「叔母さんが御前に詳しい説明をしなかつたのは、短兵急な御前の性質を知ってるせいか、それともまだ小供だと思つてわざと略してしまつたのか、そこはおれにも分らないが、何しろ事實は今云つた通りなんだよ」と教えた。

小六にはいかに詳しい説明も腹の足しにはならなかつた。ただ、

「そうですか」と云つてむずかしい不満な顔をして宗助を見た。

「仕方がないよ。叔母さんだつて、安さんだつて、そう悪い料簡りょうけんはないんだから」

「そりゃ、分つています」と弟は峻けわしい物の云い方をした。

「じゃおれが悪いつて云うんだろう。おれは無論悪いよ。昔から今日こんにちまで悪いところだ

らかな男だもの」

宗助は横になつて煙草たばこを吹かしながら、これより以上は何とも語らなかつた。小六も黙つて、座敷の隅すみに立ててあつた二枚折の抱一の屏風びょうぶを眺めていた。

「御前あの屏風を覚えているかい」とやがて兄が聞いた。

「ええ」と小六が答えた。

「おととい昨日佐伯から届けてくれた。御父さんの持つてたもので、おれの手に残つたのは、今じゃこれだけだ。これが御前の学資になるなら、今すぐにでもやるが、剥はげた屏風一枚で大学を卒業する訳にも行かずな」と宗助が云つた。そうして苦笑しながら、

「この暑いのに、こんなものを立てて置くのは、氣きちがい狂じみているが、入れておく所がないから、仕方がない」と云う述懐じゆっかいをした。

小六はこの氣樂なような、ぐずのような、自分とは余りに懸かけ隔へだたっている兄を、いつも物足りなくは思うものの、いざという場合に、けつして喧嘩けんかはし得なかつた。この時も急に癩癩かんしゃくの角つのを折られた氣味で、

「屏風はどうでも好いが、これから先僕さきはどうしたもんでしよう」と聞き出した。

「それは問題だ。何しろことしいっぱいにきまれば好い事だから、まあよく考えるさ。お

れも考えて置こう」と宗助が云った。

弟は彼の性質として、そんな中ぶらりんの姿は嫌きらである、学校へ出ても落ちついて稽古けいこもできず、下調も手につかないような境遇は、とうてい自分には堪たえられないと云う訴うったえを切にやり出したが、宗助の態度は依然として変らなかつた。小六があまり癩かんの高い不平を並べると、

「そのくらいな事でそれほど不平が並べられれば、どこへ行つたつて大丈夫だ。学校をやめたつて、いっこう差さ支しかない。御前の方がおれよりよっぽどえらいよ」と兄が云つたので、話はそれぎり頓挫とんざして、小六はどうとう本郷へ歸つて行つた。

宗助はそれから湯を浴びて、晩食ばんめしを済まして、夜は近所の縁日へ御米といっしよに出掛けた。そうして手頃な花物を二鉢買つて、夫婦して一つずつ持つて歸つて来た。夜露にあてた方がよからうと云うので、崖下がけしたの雨戸を明けて、庭先にそれを二つ並べて置いた。蚊帳かやの中へ這入はいつた時、御米は、

「小六さんの事はどうなつて」と夫に聞くと、

「まだどうもならないさ」と宗助は答えたが、十分ばかりの後夫婦ともすやすや寝入ねいつた。翌日眼が覚めて役所の生活が始まると、宗助はもう小六の事を考える暇を有もたなかつた。

家へ帰つて、のっそりしている時ですら、この問題を確^{はつきり}的^{てき}眼^{がん}の前に描^{えが}いて明らかにそれを眺^{なが}める事を憚^{はば}かった。髪^{かみ}の毛^けの中に包^かんである彼の脳^{のう}は、その煩^{わづら}わしさに堪^たえなかつた。昔^{むかし}は数学^がが好きで、随分^{ずいぶん}込み入^いつた幾何^{きか}の問題^を、頭^{あたま}の中で明^{めい}瞭^{りょう}な図^ずにして見るだけの根^ね氣^きがあつた事を憶^{おも}い出すと、時^{とき}日^ひの割^{わり}には非常^{ひじょう}に烈^{はげ}しく來^きたこの變化^{へんか}が自分^{おのれ}にも恐^{おそ}ろしく映^{うつ}つた。

それでも日に一度ぐらひは小六^{せうろく}の姿^{すがた}がぼんやり頭^{あたま}の奥^{おく}に浮^ういて來^きる事があつて、その時^{とき}だけは、あいつの将来^{しょうらい}も何とか考^{かんが}えておかなくつちやならないと云^いう氣^きも起^おつた。しかしすぐあとから、まあ急^{いそ}ぐにも及^{およ}ぶまいぐらひに、自分^{おのれ}と打^うち消^けしてしまふのが常^{じょう}であつた。そうして、胸^{むね}の筋^{きん}が一本^{いっぴん}鉤^{かぎ}に引^ひつ掛^かつたよう^{よう}な心^{こころ}を抱^{いだ}いて、日^ひを暮^くらしていた。

そのうち九月^{くわがつ}も末^{すえ}になつて、毎^{まい}晚^{ばん}天^{あま}の河^{がわ}が濃^のく見^みえるある宵^{よい}の事^{こと}、空^{そら}から降^{くだ}つたよう^{よう}に安^{やす}之^の助^{すけ}がやつて來^きた。宗^{むね}助^{すけ}にも御^ご米^{まい}にも思^{おも}ひ掛^かけないほど稀^たま客^まなので、二人^{ふたり}とも何か用^{よう}があつての訪^{ほう}問^{もん}だろうと推^{すい}したが、はたして小六^{せうろく}に關^{かん}する件^{けん}であつた。

この間^ま月^{つき}島^{しま}の工^{こう}場^ばへひよつくり小六^{せうろく}がやつて來^きて云^いうには、自分^{おのれ}の学^{がく}資^しについての詳^{しょう}しい話^わは兄^{あに}から聞^きいたが、自分^{おのれ}も今^{いま}まで学^{がく}問^{もん}をやつて來^きて、とうとう大^{だい}学^{がく}へ這^{はい}入^いれずじまいになるのはいかにも殘^{ざん}念^{ねん}だから、借^か金^{きん}でも何^{なに}でもして、行^いけるところまで行^いきたいが、何

か好い工夫はあるまいかと相談をかけるので、安之助はよく宗さんにも話して見ようと答えると、小六はたちまちそれを遮ぎつて、兄はどうてい相談になつてくれる人じゃない。

自分が大学を卒業しないから、他も中途でやめるのは当然だぐらいに考えている。元來今度の事も元を糺せば兄が責任者であるのに、あの通りいつこう平気なもので、他が何を云つても取り合つてくれない。だから、ただ頼りにするのは君だけだ。叔母さんに正式に断わられながら、また君に依頼するのはおかしいようだが、君の方が叔母さんより話が分るだろうと思つて来たと云つて、なかなか動きそうもなかつたそうである。

安之助は、そんな事はない、宗さんも君の事ではだいぶ心配して、近いうちまた家へ相談に来るはずになつてゐるんだからと慰めて、小六を帰したんだと云う。帰るときに、小六は袂から半紙を何枚も出して、欠席届が入用だからこれに判を押してくれと請求して、僕は退学か在校か片がつくまでは勉強ができないから、毎日学校へ出る必要はないんだと云つたそうである。

安之助は忙がしいとかで、一時間足らず話して歸つて行つたが、小六の所置については、兩人の間に具体的案は別に出なかつた。いずれ緩くりみんなで寄つてきめよう、都合がよければ小六も列席するが好かろうというのが別れる時の言葉であつた。二人になつたと

き、御米は宗助に、

「何を考えていらつしやるの」と聞いた。宗助は両手を兵児帯へこおびの間に挟はさんで、心持肩を高くしたなり、

「おれももう一返小六みたようになって見たい」と云った。「こつちじや、向むがおれのよ
うな運命おちいに陥おちいるだろうと思つて心配しているのに、向じや兄貴なんざあ眼中まなこにないから偉
いや」

御米は茶器を引いて台所へ出た。夫婦はそれぎり話を切り上げて、また床とこを延べて寝ねた。
夢の上に高い銀あまのがわ河が涼しく懸かかつた。

次の週間には、小六も来ず、佐伯からの音信たよりもなく、宗助の家庭はまた平日の無事に帰
つた。夫婦は毎朝露に光る頃起きて、美しい日を廂ひさしの上に見た。夜は煤すす竹だけの台を着けた
洋灯ランの両側に、長い影を描えがいて坐つていた。話が途切れた時はひそりとして、柱時計の振
子の音だけが聞える事も稀まれではなかつた。

それでも夫婦はこの間に小六の事を相談した。小六がもしどうしても学問を続ける気な
ら無論の事、そうでなくても、今の下宿を一時引き上げなければならなくなるのは知れて
いるが、そうすればまた佐伯へ帰るか、あるいは宗助の所へ置くよりほかに途みちはない。佐

伯ではいったんああ云い出したようなものの、頼んで見たら、当分宅へ置くぐらいの事は、好意上してくれまいものでもない。が、その上修業をさせるとなると、月謝小遣その他は宗助の方で担任しなければ義理が悪い。ところがそれは家計上宗助の堪えるところではなかつた。月々の収支を事細かに計算して見た兩人は、

「どうてい駄目だね」

「どうしたつて無理ですわ」と云つた。

夫婦の坐つている茶の間の次が台所で、台所の右に下女部屋、左に六畳が一間ある。下女を入れて三人の小人数だから、この六畳には余り必要を感じない御米は、東向の窓側にいつも自分の鏡台を置いた。宗助も朝起きて顔を洗つて、飯を済ますと、ここへ来て着物を脱ぎ更えた。

「それよりか、あの六畳を空けて、あすこへ来ちやいけなくつて」と御米が云い出した。御米の考えでは、こうして自分の方で部屋と食物だけを分担して、あとのところを月々いくらか佐伯から助て貰つたら、小六の望み通り大学卒業までやって行かれようと云うのである。

「着物は安さんの古いのや、あなたのを直して上げたら、どうかなるでしょう」と御米が

云い添えた。実は宗助にもこんな考が、多少頭に浮かんでいた。ただ御米に遠慮がある上に、それほど気が進まなかつたので、つい口へ出さなかつたまでだから、細君からこう反あべこべに相談を掛けられて見ると、固もとよりそれを拒こばむだけの勇氣はなかつた。

小六にその通りを通知して、御前さえそれで差さ支しなければ、おれがもう一遍佐伯へ行つて掛合つて見るがと、手紙で問い合せると、小六は郵便の着いた晩、すぐ雨の降る中を、傘からかさに音を立ててやつて来て、もう学資ができでもしたように嬉うれしがつた。

「何、叔母さんの方じゃ、こつちでいつまでもあなたの事を放り出したまんま、構わずにおくもんだから、それでああおつしやるのよ。なに兄さんだつて、もう少し都合が好ければ、疾とうにもどうにかしたんですけれども、御存じの通りだから實際やむを得なかつたんですわ。しかしこつちからこう云つて行けば、叔母さんだつて、安さんだつて、それでも否いやだとは云われないわ。きつとできるから安心していらつしやい。私わたし受合うわうわ」

御米にこう受合つて貰つた小六は、また雨の音を頭の上に受けて本郷へ歸つて行つた。しかし中一日置いて、兄さんはまだ行かないんですかと聞きに来た。また三日ばかり過ぎから、今度は叔母さんの所へ行つて聞いたたら、兄さんはまだ来ないそうだから、なるべく早く行くように勧すすめてくれと催促して行つた。

宗助が行く行くと云つて、日を暮らしているうちに世の中はようやく秋になった。その朗らかな或日曜の午後には、宗助はあまり佐伯へ行くのが後れるので、この要件を手紙に認めて番町へ相談したのである。すると、叔母から安之助は神戸へ行つて留守だと云う返事が来たのである。

五

佐伯の叔母の尋ねて来たのは、土曜の午後の二時過であつた。その日は例になく朝から雲が出て、突然と風が北に変わったように寒かつた。叔母は竹で編んだ丸い火桶の上へ手を翳して、

「何ですね、御米さん。この御部屋は夏は涼しそうで結構だが、これからはちと寒うござんすね」と云つた。叔母は癖のある髪を、奇麗に髷に結つて、古風な丸打の羽織の紐を、胸の所で結んでいた。酒の好きな質で、今でも少しづつは晩酌をやるせいか、色沢もよく、でっぷり肥っているから、年よりはよほど若く見える。御米は叔母が来るたんびに、叔母さんは若いのねと、後でよく宗助に話した。すると宗助がいつでも、若いはずだ、

あの年になるまで、子供をたつた一人しか生まないんだからと説明した。御米は実際そうかも知れないと思つた。そうしてこう云われた後では、折々そつと六畳へ這入つて、自分の顔を鏡に映して見た。その時は何だか自分の頬が見るたびに瘡けて行くような気がした。御米には自分と子供とを連想して考えるほど辛い事はなかつたのである。裏の家主の宅に、小さい子供が大勢いて、それが崖の上の庭へ出て、ブランコへ乗つたり、鬼ごっこをやつたりして騒ぐ声が、よく聞えると、御米はいつでも、はかないような恨めしいような心持になつた。今自分の前に坐つている叔母は、たつた一人の男の子を生んで、その男の子が順当に育つて、立派な学士になつたればこそ、叔父が死んだ今日でも、何不足のない顔をして、腮などは二重に見えるくらいに豊なのである。御母さんは肥っているから剣呑だ、気をつけないと卒中でやられるかも知れないと、安之助が始終心配するそうだけれども、御米から云わせると、心配する安之助も、心配される叔母も、共に幸福を享け合つているものと思われなかつた。

「安さんは」と御米が聞いた。

「ええようやくね、あなた。一昨日の晩帰りましてね。それでついつい御返事も後れちまつて、まことに済みませんような訳で」と云つたが、返事の方はそれなりにして、話はま

た安之助へ戻つて来た。

「あれもね、御蔭おかげさまでようやく学校だけは卒業しましたが、これからが大事のところ、心配でございます。——それでもこの九月から、月島の工場の方へ出る事になりまして、まあさいわいとこの分で勉強さえして行つてくれれば、この末ともに、そう悪い事も無からうかと思つてるんですけれども、まあ若いものの事ですから、これから先どう変化へんげするか分りやしませんよ」

御米はただ結構でございますとか、おめでとうございますとか云う言葉を、あいだあいだ間々まじに挟はさんでいた。

「神戸へ参つたのも、全くその方の用向なので。石油発動機とか何とか云うものをかつおぶ船ねへ据すえ付けるんだとかつてねあなた」

御米にはまるで意味が分らなかつた。分らないながらただへええと受けていると、叔母はすぐ後あとを話した。

「私にも何のこつたか、ちつとも分らなかつたんですが、安之助の講釈を聞いて始めて、おやさうかいと云うような訳でしてね。——もつとも石油発動機は今もつて分らないんですけれども」と云いながら、大きな声を出して笑つた。「何でも石油を焚たいて、それで船

を自由にする器械なんだそうですが、聞いて見るとよほど重宝なものらしいんですよ。それさえ付ければ、舟を漕ぐ手間がまるで省けるとかね。五里も十里も沖へ出るのに、大変なんですよ。ところがあなた、この日本全国で鯉船の数ったら、それこそ大したものでしょう。その鯉船が一つずつこの器械を具え付けるようになったら、莫大な利益だつて云うんで、この頃は夢中になつてその方ばかりに掛つていらっしゃるんですよ。莫大な利益はありがたいが、そう凝つて身体でも悪くしちやつまらないじゃないかって、この間も笑つたくらいで」

叔母はしきりに鯉船と安之助の話をした。そうして大變得意のように見えたが、小六の事はなかなか云い出さなかつた。もう疾に帰るはずの宗助もどうしたか帰つて来なかつた。彼はその日役所の帰りがけに駿河台下まで来て、電車を下りて、酸いものを頬張つたような口を穿めて一二町歩いた後、ある歯医者かどの門を潜つたのである。三四日前彼は御米と差向いで、夕飯の膳ぜんに着いて、話しながら箸を取つている際に、どうした拍子か、前歯を逆にぎりりと噛んでから、それが急に痛み出した。指で揺かすと、根がぐらぐらする。食事の時には湯茶が染みる。口を開けて息をすると風も染みた。宗助はこの朝歯を磨くために、わぎと痛い所を避けて楊枝を使いながら、口の中を鏡に照らして見たら、広島で銀

を埋めた二枚の奥歯と、研いだように磨り減らした不揃の前歯とが、にわかには寒く光った。洋服に着換える時、

「御米、おれは歯の性がよつほど悪いと見えるね。こうやると大抵動くぜ」と下歯を指で動かして見せた。御米は笑いながら、

「もう御年のせいよ」と云つて白い襟を後へ廻つて襯衣へ着けた。

宗助はその日の午後とうとう思い切つて、歯医者へ寄つたのである。応接間へ通ると、大きな洋卓の周囲に天鷲絨で張つた腰掛が并んでいて、待ち合している三四人が、うづくまるように腮を襟に埋めていた。それが皆女であつた。奇麗な茶色の瓦斯暖炉には火がまだ焚いてなかつた。宗助は大きな姿見に映る白壁の色を斜めに見て、番の来るのを待つていたが、あまり退屈になつたので、洋卓の上に重ねてあつた雑誌に眼を着けた。一二冊手に取つて見ると、いづれも婦人用のものであつた。宗助はその口絵に出ている女の写真を、何枚も繰り返して眺めた。それから「成功」と云う雑誌を取り上げた。その初めに、成效の秘訣というようものが箇条書にしてあつたうちに、何でも猛進しなくつてはいけないと云う一カ条と、ただ猛進してもいけない、立派な根底の上に立つて、猛進しなくつてはならないと云う一カ条を読んで、それなり雑誌を伏せた。「成功」と宗助は非常に縁

の遠いものであった。宗助はこういう名の雑誌があると云う事さえ、今日まで知らなかった。それでまた珍らしくなって、いったん伏せたのをまた開けて見ると、ふと仮名の交らない四角な字が二行ほど並んでいた。それには風碧落を吹いて浮雲尽き、月東山に上つて玉一団とあつた。宗助は詩とか歌とかいうものには、元から余り興味を持たない男であつたが、どう云う訳かこの二句を読んだ時に大変感心した。対句が旨くできたとか何とか云う意味ではなくつて、こんな景色と同じような心持になれたら、人間もさぞ嬉しかろうと、ひよつと心が動いたのである。宗助は好奇心からこの句の前に付いている論文を読んで見た。しかしそれはまるで無関係のように思われた。ただこの二句が雑誌を置いた後でも、しきりに彼の頭の中を徘徊した。彼の生活は實際この四五年来こういう景色に出逢つた事がなかつたのである。

その時向うの戸が開いて、紙片を持った書生が野中さんと宗助を手術室へ呼び入れた。中へ這入ると、そこは応接間よりは倍も広かつた。光線がなるべく余計取れるように明るく拵らえた部屋の二側に、手術用の椅子を四台ほど据えて、白い胸掛をかけた受持の男が、一人ずつ別々に療治をしていた。宗助は一番奥の方にある一脚に案内されて、これへと云われるので、踏段のようなものの上へ乗つて、椅子へ腰をおろした。書生が厚い縞

まいり
入の前掛で丁寧ていねいに膝ひざから下を包くるんでくれた。

こう穏おだやかに寝ねかされた時、宗助は例の歯がさほど苦になるほど痛んでいないと云う事を発見した。そればかりか、肩も背せなも、腰の周りまわりも、心安く落ちついて、いかにも楽に調子が取れている事に気がついた。彼はただ仰向あおむいて天てんじよう井いから下つている瓦斯ガス管を眺めた。そうしてこの構かまえと設備では、帰りがけに思ったより高い療治代を取られるかも知れないと氣遣きづかった。

ところへ顔の割に頭の薄くなり過ぎた肥ふとった男が出て来て、大変丁寧ていねいに挨拶あいさつをしたので、宗助は少し椅子の上で狼狽あわてたように首を動かした。肥ふとった男は一応容体を聞いて、口中を検査して、宗助の痛いと言いう歯をちよつと揺ゆつて見たが、

「どうもこう弛ゆるみますと、とても元のように緊しまる訳には参りますまいと思いますが。何しろ中がエソになっておりますから」と云った。

宗助はこの宣告を淋さびしい秋の光のように感じた。もうそんな年なんでしょうかと聞いて見たくなつたが、少しまりが悪いので、ただ、

「じゃ癒なおらないんですか」と念を押した。

肥ふとった男は笑いながらこう云った。――

「まあ癒らないと申し上げるよりほかに仕方がござんせんな。やむを得なければ、思い切つて抜いてしまふんですが、今のところでは、まだそれほどでもございますまいから、ただ御痛みだけを留めておきましよう。何しろエソ——エソと申しても御分りにならないかも知れませんが、中がまるで腐つております」

宗助は、そうですかと云つて、ただ肥つた男のなすがままにしておいた。すると彼は器械をぐるぐる廻して、宗助の齒の根へ穴を開け始めた。そうしてその中へ細長い針のようなものを刺し通しては、その先を嗅いでいたが、しまいに糸ほどな筋を引き出して、神経がこれだけ取れましたと云いながら、それを宗助に見せてくれた。それから薬でその穴を埋めて、明日またいらつしやいと注意を与えた。

椅子を下りるとき、身体が真直ぐになつたので、視線の位置が天井からふと庭先に移つたら、そこにあつた高さ五尺もあろうと云う大きな鉢栽の松が宗助の眼に這入つた。その根方の所を、草鞋がけの植木屋が丁寧ていねいに薦で包んでいた。だんだん露が凝こつて霜しもになる時節なので、余裕よゆうのあるものは、もう今時分から手廻しをするのだと気がついた。

帰りがけに玄関脇の薬局で、粉薬こなすりのまま含嗽剂がんそうざいを受取つて、それを百倍の微温湯びおんとうに溶解して、一日十数回使用すべき注意を受けた時、宗助は会計の請求した治療代の案外

廉れんなのを喜んだ。これならば向うで云う通り四五回通かよつたところが、さして困難でもないと思つて、靴はを穿はこうとすると、今度は靴の底がいつの間にか破れている事に気がついた。

宅うちへ着いた時は一足違ひとあしちがひで叔母がもう帰つたあとであつた。宗助は、

「おお、そうだったか」と云いながら、はなはだ面倒そうに洋服を脱ぎ更かえて、いつもの通り火鉢ひばちの前に坐つた。御米は襯衣シャツや洋袴ズボンや靴足袋くつたびを一抱ひとかかえにして六畳へ這入はいつた。宗助はほんやりして、煙草たばこを吹かし始めたが、向うの部屋で、刷毛ブラッシを掛ける音がし出した時、

「御米、佐伯の叔母さんは何とか云つて来たのかい」と聞いた。

齒痛しつうが自おのずから治おさまつたので、秋に襲おそわれるような寒い気分は、少し軽くなつたけれども、やがて御米が隠袋ポケットから取り出して来た粉薬ぬるを、温湯ぬるに溶といて貰もらつて、しきりに含嗽うがいを始めた。その時彼は縁側えんがわへ立つたまま、

「どうも日が短かくなつたなあ」と云つた。

やがて日が暮れた。昼間からあまり車の音を聞かない町内は、宵よいの口くちから寂しんとしていた。夫婦は例の通り洋灯ランプの下もとに寄つた。広い世の中で、自分達の坐っている所だけが明るく思われた。そうしてこの明るい灯影に、宗助は御米だけを意識して、洋

灯の力の届かない暗い社会は忘れていた。彼らは毎晩こう暮らして行く裡に、自分達の生命を見出していたのである。

この静かな夫婦は、安之助の神戸から土産に買って来たと言ふ養老昆布の缶をがらがら振つて、中から山椒入りの小さく結んだ奴を撰り出しながら、緩くり佐伯からの返事を語り合つた。

「しかし月謝と小遣ぐらいは都合してやつてくれても好きそうなもんじやないか」

「それができないんだつて。どう見積つても両方寄せると、十円にはなる。十円と言ふ纏つた御金を、今のところ月々出すのは骨が折れるつて云うのよ」

「それじゃことしの暮まで二十何円ずつか出してやるのも無理じやないか」

「だから、無理をしても、もう一二月のところだけは間に合せるから、そのうちにどうかして下さいと、安さんがそう云うんだつて」

「實際できないのかな」

「そりや私には分らないわ。何しろ叔母さんが、そう云うのよ」

「鯉舟で儲けたら、そのくらい訳なさそうなもんじやないか」

「本当ね」

御米は低い声で笑った。宗助もちよつと口の端はたを動かしたが、話はそれで途切とぎれてしまった。しばらくしてから、

「何しろ小六は家うちへ来るときめるよりほかに道はあるまいよ。後あとはその上の事だ。今じゃ学校へは出ているんだね」と宗助が云った。

「そうでしょう」と御米が答えるのを聞き流して、彼は珍らしく書斎はいに這入はいった。一時間ほどして、御米がそつと襖ふすまを開あけて覗のぞいて見ると、机に向つて、何か読んでいた。

「勉強？ もう御休みなさならなくつて」と誘われた時、彼は振り返つて、

「うん、もう寝よう」と答えながら立ち上つた。

寝る時、着物を脱いで、寝巻の上に、絞しぼりの兵児帯へこおびをぐるぐる巻きつけながら、

「今夜は久し振に論語を読んだ」と云った。

「論語に何かあつて」と御米が聞き返したら、宗助は、

「いや何にもない」と答えた。それから、「おい、おれの齒はやつぱり年のせいだとき。

ぐらぐらするのはとても癒ならないそうだ」と云いつつ、黒い頭を枕の上に着けた。

六

小六はともかくも都合しだい下宿を引き払って兄の家へ移る事に相談が調った。御米は六畳に置きつけた桑の鏡台を眺めて、ちよつと残り惜しい顔をしたが、

「こうなると少し遣場に困るのね」と訴えるように宗助に告げた。実際ここを取り上げられては、御米の御化粧をする場所が無くなってしまうのである。宗助は何の工夫もつかずに、立ちながら、向うの窓側に据えてある鏡の裏を斜に眺めた。すると角度の具合で、そこに御米の襟元から片頬が映っていた。それがいかにも血色のわるい横顔なのに驚ろかされて、

「御前、どうかしたのかい。大変色が悪いよ」と云いながら、鏡から眼を放して、実際の御米の姿を見た。鬢が乱れて、襟の後の辺が垢で少し汚れていた。御米はただ、

「寒いせいなんでしょう」と答えて、すぐ西側に付いている。一間の戸棚を明けた。下には古い創だらけの箆筒があつて、上には支那鞆と柳行李が二つ三つ載っていた。

「こんなもの、どうしたつて片づけようがないわね」

「だからそのままにしておくさ」

小六のここへ引移つて来るのは、こう云う点から見ても、夫婦のいずれにも、多少迷惑で

あつた。だから来ると云つて約束しておきながら、今だに來ない小六に對しては、別段の催促もしなかつた。一日延びれば延びただけ窮屈が逃げたような気がどこかでした。小六にもちようどそれと同じ憚はばかりがあつたので、いられる限は下宿かきりにいる方が便利だと胸をきめたものか、つい一日一日と引越さきを前へ送つていた。その癖彼の性質として、兄夫婦のごとく、荏苒じんぜんの境に落ちついてはいられなかつたのである。

そのうち薄い霜しもが降りて、裏の芭蕉ばしやうを見事に摧くだいた。朝は崖がけ上うえの家主やぬしの庭の方で、鶉ひよどりが鋭とどろい声を立てた。夕方には表を急ぐ豆腐屋の喇叭らっぱに交つて、円明寺の木魚の音が聞えた。日はますます短かくなつた。そうして御米の顔色は、宗助が鏡の中に認めた時よりも、爽さわかにはならなかつた。夫おつとが役所から歸つて来て見ると、六畳で寝ている事が一二度あつた。どうかしたかと尋ねると、ただ少し心持が悪いと答えるだけであつた。医者に見て貰えと勧めると、それには及ばないと云つて取り合あわなかつた。

宗助は心配した。役所へ出ていてもよく御米の事が氣にかかつて、用の邪魔になるのを意識する時ときもあつた。ところがある日歸りがけに突然電車の中で膝ひざを拍うつた。その日は例になく元氣よく格子こうしを明けて、すぐと勢いきおいよく今日はどうかだと御米に聞いた。御米がいつもの通り服や靴足袋くつたびを一纏ひとまとめにして、六畳へ這入はいる後あとから追ついて来て、

「御米、御前子供ができたんじゃないか」と笑いながら云った。御米は返事もせず俯向いてしきりに夫の背広の埃を払った。刷毛の音がやんでもなかなか六畳から出て来ないので、また行つて見ると、薄暗い部屋の中で、御米はたった一人寒そうに、鏡台の前に坐つていた。はいと云つて立つたが、その声が泣いた後の声のようであつた。

その晩夫婦は火鉢に掛けた鉄瓶を、双方から手で掩うようにして差し向つた。

「どうですな世の中は」と宗助が例にない浮いた調子を出した。御米の頭の中には、夫婦にならない前の、宗助と自分の姿が奇麗に浮んだ。

「ちつと、面白くしようじゃないか。この頃はいかにも不景気だよ」と宗助がまた云つた。二人はそれから今度の日曜にはいつしよにどこへ行こうか、ここへ行こうかと、しばらくそればかり話し合つていた。それから二人の春着の事が題目になった。宗助の同僚の高木とか云う男が、細君に小袖とかを強請られた時、おれは細君の虚栄心を満足させるために稼いでるんじゃないと云つて跳ねつけたら、細君がそりや非道い、実際寒くなつても着て出るものがないんだと弁解するので、寒ければやむを得ない、夜具を着るとか、毛布を被るとかして、当分我慢しろと云つた話を、宗助はおかしく繰り返して御米を笑わした。御米は夫のこの様子を見て、昔がまた眼の前に戻つたような気がした。

「高木の細君は夜具でも構わないが、おれは一つ新らしい外套マントを拵こしらえたいな。この間齒医者へ行つたら、植木屋が薦こもで盆栽ぼんさいの松の根を包んでいたので、つくづくそう思った」

「外套が欲しいって」

「ああ」

御米は夫の顔を見て、さも気の毒だと云う風に、

「御拵おしらえなさいな。月賦で」と云つた。宗助は、

「まあ止そうよ」と急に侘わびしく答えた。そうして「時に小六はいつから来る気なんだろう」と聞いた。

「来るのは厭なんでしょう」と御米が答えた。御米には、自分が始めから小六きくらに嫌きらわれていると云う自覚があつた。それでも夫の弟だと思つたので、なるべくは反そりを合せて、少しでも近づけるように近づけるようにと、今こんにち日まで仕向けて来た。そのためか、今では以前と違つて、まあ普通の小こ舅じゆうとぐらいの親しみはあると信じているようなものの、こんな場合になると、つい実際以上にも気を回して、自分だけが小六の来ない唯一ゆいの原因のよいうに考えられるのであつた。

「そりや下宿からこんな所へ移るのは好かあないだろうよ。ちようどこつちが迷惑を感じず

る通り、向うでも窮屈を感じる訳だから。おれだって、小六が来ないとすれば、今のうち
 思い切つて外套マントを作るだけの勇氣があるんだけれども」

宗助は男だけに思い切つてこう云つてしまった。けれどもこれだけでは御米の心を尽し
 ていなかった。御米は返事もせず、しばらく黙つていたが、細い腮あごを襟えりの中へ埋うめたま
 ま、上眼うわめを使つて、

「小六さんは、まだ私の事を悪にくんでいらつしやるでしようか」と聞き出した。宗助が東京
 へ来た当座は、時々これに類似の質問を御米から受けて、その都度つど慰めるのにだいが骨の
 折れた事もあつたが、近来は全く忘れたように何も云わなくなつたので、宗助もつい氣に
 留めなかつたのである。

「またヒステリーが始まつたね。好いじやないか小六なんぞが、どう思つたつて。おれさ
 えついでれば」

「論語にそう書いてあつて」

御米はこんな時に、こういう冗談じょうだんを云う女であつた。宗助は

「うん、書いてある」と答えた。それで二人の会話がしまいになった。

翌日宗助が眼を覚さますと、亜鉛張トタン張りの底ひきしの上で寒い音がした。御米が襷たすきがけ掛がけのまま枕

元へ来て、

「さあ、もう時間よ」と注意したとき、彼はこの点滴の音を聞きながら、もう少し暖かい蒲団の中に温もつていたかつた。けれども血色のよくない御米の、かいがいしい姿を見るや否や、

「おい」と云つて直起き上つた。

外は濃い雨に鎖されていた。崖の上の孟宗竹が時々鬣を振うように、雨を吹いて動いた。この侘びしい空の下へ濡れに出る宗助に取つて、力になるものは、暖かい味噌汁と暖かい飯よりほかになかつた。

「また靴の中が濡れる。どうしても二足持つていないと困る」と云つて、底に小さい穴のあるのを仕方なしに穿いて、洋袴の裾を一すばばかりまくり上げた。

午過に帰つて来て見ると、御米は金盥の中に雑巾を浸けて、六畳の鏡台の傍に置いていた。その上の所だけ天井の色が變つて、時々雫が落ちて来た。

「靴ばかりじゃない。家の中まで濡れるんだね」と云つて宗助は苦笑した。御米はその晩夫のために置炬燵へ火を入れて、スコツチの靴下と縞羅紗の洋袴を乾かした。

明る日もまた同じように雨が降つた。夫婦もまた同じように同じ事を繰り返した。その

明る日もまだ晴れなかつた。三日目の朝になって、宗助は眉を縮めて舌打をした。

「いつまで降る気なんだ。靴がじめじめして我慢にも穿けやしない」

「六畳だつて困るわ、ああ漏つちや」

夫婦は相談して、雨が晴れしだい、家根を繕つて貰うように家主へ掛け合う事にした。

けれども靴の方は何ともしようがなかつた。宗助はきしんで這入らないのを無理に穿いて出て行つた。

幸にその日は十一時頃からかりと晴れて、垣に雀の鳴く小春日和になつた。宗助が帰

つた時、御米は例より冴え冴えしい顔色をして、

「あなた、あの屏風を売つちやいけなくつて」と突然聞いた。抱一の屏風はせんだつ

て佐伯から受取つたまま、元の通り書斎の隅に立ててあつたのである。二枚折だけれども、

座敷の位置と広さから云つても、実はむしろ邪魔な装飾であつた。南へ廻すと、玄関から

の入口を半分塞いでしまふし、東へ出すと暗くなる、と云つて、残る一方へ立てれば床の

間を隠すので、宗助は、

「せつかく親爺の記念だと思つて、取つて来たよなもの、しようがないねこれじゃ、

場塞げで」と零した事も一二度あつた。その都度御米は真丸な縁の焼けた銀の月と、絹地

からほとんど区別できないような穂芒ほすずきの色を眺めて、こんなものを珍重する人の気が知れないと云うような見えをした。けれども、夫を憚はばかつて、明白あからさまには何とも云い出さなかつた。ただ一返いっぺん

「これでもいい絵なんでしょうかね」と聞いた事があつた。その時宗助は始めて抱一の名を御米に説明して聞かした。しかしそれは自分が昔むかし父から聞いた覚おぼえのある、臃氣おぼろげな記憶を好加減いいかげんに繰り返すに過ぎなかつた。實際の画えの価値や、また抱一についての詳しい歴史などに至ると宗助にもその実じつはなはだ覚束おぼつかなかつたのである。

ところがそれが偶然御米のために妙な行為の動機を構かたちづく成なるの原因となつた。過去一週間夫と自分の間に起つた会話に、ふとこの知識を結びつけて考え得た彼女はちよつと微笑ほほえんだ。この日雨が上つて、日脚ひあしがさつと茶の間の障子しょうじに射した時、御米は不断着の上へ、妙な色の肩掛とも、襟巻えりまきともつかない織物を纏まとつて外へ出た。通りを二丁目ほど来て、それを電車の方角へ曲つて真直まっすぐに来ると、乾物屋と麵麩屋パンの間に、古道具を売っているかなり大きな店があつた。御米はかつてそこで足の畳み込める食卓を買つた記憶がある。今火鉢ひばちに掛けてある鉄瓶てつびんも、宗助がここから提さげて帰つたものである。

御米は手を袖そでにして道具屋の前に立ち留まつた。見ると相変らず新しい鉄瓶てつびんがたくさ

ん並べてあつた。そのほかには時節柄とでも云うのか火鉢ひばちが一番多く眼に着いた。しかし骨董こつどうと名のつくほどのものは、一つもないようであつた。ひとり何とも知れぬ大きな亀の甲こうが、真向まむこうに釣るしてあつて、その下から長い黄ばんだほつす 尻尾しっぽのように出ていた。それから紫檀したんの茶棚ちやだなが一つ二つ飾つてあつたが、いずれも狂くるいの出なま そうな生なまなものばかりであつた。しかし御米にはそんな区別はいつこう映らなかつた。ただ掛物も屏風びやうぶも一つも見当らない事だけ確かめて、中へ這入はいつた。

御米は無論夫が佐伯から受取つた屏風びやうぶを、いくらかに売り払うつもりでわざわざここまで足を運んだのであるが、広島以来こう云う事にだいぶ經驗を積んだ御蔭おかげで、普通の細君このような努力も苦痛も感ぜずに、思い切つて亭主と口を利きく事ができた。亭主は五十恰か好こうの色の黒い頬この瘡かさけた男で、鼈べつこう甲こうの縁ふちを取つた馬鹿ばかに大きな眼鏡めがねを掛けて、新聞を讀みながら、疣いぼだらけの唐金からかねの火鉢ひばちに手を翳かざしていた。

「そうですね、拝見に出てもようがす」と軽く受合つたが、別に氣の乗つた様子もないので、御米は腹の中で少し失望した。しかし自分からがすでに大した望いたを抱いだいて出て来た訳でもないで、こう簡易に受けられると、こつちから頼むようにしても、見て貰もらわなければならなかつた。

「ようがす。じやのちほど伺いましょう。今小僧がちよつと出ておりませんからな」

御米はこの存在ぞんざいな言葉を聞いてそのまま宅うちへ帰ったが、心の中では、はたして道具屋が来るか来ないかはなほだ疑わしく思った。一人でいつものように簡単な食事を済まして、清きよに膳を下げさしていると、いきなり御免下さいと云つて、大きな声を出して道具屋が玄関からやつて来た。座敷へ上げて、例の屏風を見せると、なるほどと云つて裏だの縁だのを撫なでていたが、

「御おほら払いになるなら」と少し考えて、「六円に頂いておきましょう」と否いや々やそうに価ねを付けた。御米には道具屋の付けた相場が至当のように思われた。けれども一応宗助に話してからでなくつては、余り専断過ぎると心づいた上、品物の歴史が歴史だけに、なおさら遠慮して、いずれ帰つたらよく相談して見た上でと答えたまま、道具屋を帰そうとした。道具屋は出掛に、

「じゃ、奥さんせつかくだから、もう一円奮発しましょう。それで御払い下さい」と云つた。御米はその時思い切つて、

「でも、道具屋さん、ありや抱ほう一いつですよ」と答えて、腹の中ではひやりとした。道具屋は、平気で、

「抱一は近来流行りませんからな」と受け流したが、じろじろ御米の姿を眺めた上、
「じやおよく御相談なすつて」と云い捨てて帰つて行つた。

御米はその時の模様を詳しく話した後で、

「売つちやいけなくつて」とまた無邪氣に聞いた。

宗助の頭の中には、この間から物質上の欲求が、絶えず動いていた。ただ地味な生活を
しなれた結果として、足らぬ家計を足ると諦らめる癖がついているので、毎月きまつて這
入るもののほかには、臨時に不意の工面をしてまで、少しでも常以上に寛ろいでみようと
云う働は出なかつた。話を聞いたとき彼はむしろ御米の機敏な才覚に驚ろかさされた。同時
にはたしてそれだけの必要があるかを疑つた。御米の思わくを聞いて見ると、ここで十円
足らずの金が入れば、宗助の穿く新しい靴を誂らえた上、銘仙の一反ぐらいは買える
と云うのである。宗助はそれもそうだと思つた。けれども親から伝わつた抱一の屏風を
一方に置いて、片方に新らしい靴及び新らしい銘仙を並べて考えて見ると、この二つを
交換する事がいかにも突飛でかつ滑稽であつた。

「売るなら売つていいがね。どうせ家に在つたつて邪魔になるばかりだから。けれどもお
れはまだ靴は買わないでも済むよ。この間中みたように、降り続けに降られると困るが、

もう天気も好くなつたから」

「だってまた降ると困るわ」

宗助は御米に対して永久に天気を保証する訳にも行かなかつた。御米も降らない前には是非屏風を売れとも云いかねた。二人は顔を見合して笑っていた。やがて、

「安過ぎるでしようか」と御米が聞いた。

「そうさな」と宗助が答えた。

彼は安いと云われれば、安いような気がした。もし買手があれば、買手の出すだけの金はいくらでも取りたかつた。彼は新聞で、近来古書画の入札が非常に高価になつた事を見たような心持がした。せめてそんなものが一幅でもあつたらと思つた。けれどもそれは自分の呼吸する空気の届くうちには、落ちていないものと諦めていた。

「買手にも困るだろうが、売手にも困るんだよ。いくら名画だって、おれが持っていた分にはどうていそう高く売れっこはないさ。しかし七円や八円でえな、余り安いようだね」

宗助は抱一の屏風を弁護すると共に、道具屋をも弁護するような語気を洩らした。もうしてただ自分だけが弁護に値しないもののように感じた。御米も少し気を腐らした気味で、屏風の話はそれなりにした。

翌日あくるひ宗助は役所へ出て、同僚の誰彼にこの話をした。すると皆申し合せたように、それは価値ねじゃないと云った。けれども誰も自分が周旋して、相当の価値に売払ってやろうと云うものはなかった。またどう云う筋を通れば、馬鹿な目に逢わないで済むという手続を教えてくださいるものもなかった。宗助はやっぱり横町の道具屋に屏風を売るよりほかに仕方がなかった。それでなければ元の通り、邪魔でも何でも座敷へ立てておくよりほかに仕方がなかった。彼は元の通りそれを座敷へ立てておいた。すると道具屋が来て、あの屏風を十五円に売ってくれと云い出した。夫婦は顔を見合して微笑ほほえんだ。もう少し売らずに置いてみようじゃないかと云って、売らずにおいた。すると道具屋がまた来た。また売らなかつた。御米は断るのが面白くなつて来た。四度目よたびめには知らない男を一人連れて来たが、その男とこそこそ相談して、とうとう三十五円に価値を付けた。その時夫婦も立ちながら相談した。そうしてついに思い切つて屏風を売り払つた。

七

円明寺の杉が焦こげたように赭あかぐろ黒くなつた。天気の良い日には、風に洗われた空の端はず

れに、白い筋の嶮しく見える山が出た。年は宗助夫婦を駆つて日ごとに寒い方へ吹き寄せた。朝になると欠かさず通る納豆売の音が、瓦を鎖す霜の色を連想せしめた。宗助は床の中でその声を聞きながら、また冬が来たと思ひ出した。御米は台所で、今年も去年のように水道の栓が氷つてくれなければ助かるかと、暮から春へ掛けての取越苦勞をした。夜になると夫婦とも炬燵にばかり親しんだ。そうして広島や福岡の暖かい冬を羨やんだ。

「まるで前の本多さんみたようね」と御米が笑つた。前の本多さんと云うのは、やはり同じ構内に住んで、同じ坂井の貸家を借りている隠居夫婦であつた。小女を一人使つて、朝から晩までことりと音もしないように静かな生計を立てていた。御米が茶の間で、たつた一人裁縫をしてしていると、時々御爺さんと云う声が出た。それはこの本多の御婆さんが夫を呼ぶ声であつた。門口などで行き逢うと、丁寧に時候の挨拶をして、ちと御話にいらつしやいと云うが、ついぞ行つた事もなければ、向うからも来た試がない。したがつて夫婦の本多さんに関する知識は極めて乏しかった。ただ息子が一人あつて、それが朝鮮の統監府とかで、立派な役人になつてゐるから、月々その方の仕送で、氣樂に暮らして行かれるのだと云う事だけを、出入の商人のあるものから耳にした。

「御爺さんはやつぱり植木を弄つてゐるかい」

「だんだん寒くなつたから、もうやめたんでしよう。縁の下に植木鉢がたくさん並んでるわ」

話はそれから前の家を離れて、家主の方へ移つた。これは、本多とはまるで反対で、夫婦から見ると、この上もない賑やかそうな家庭に思われた。この頃は庭が荒れているので、大勢の小供が崖の上へ出て騒ぐ事はなくなつたが、ピアノの音は毎晩のようにする。折々は下女か何ぞの、台所の方で高笑をする声さえ、宗助の茶の間まで響いて来た。

「ありやいつたい何をする男なんだい」と宗助が聞いた。この問は今までも幾度か御米に向つて繰り返されたものであつた。

「何にもしないで遊んでるんでしよう。地面や家作を持つて」と御米が答えた。この答も今までももう何遍か宗助に向つて繰り返されたものであつた。

宗助はこれより以上立ち入つて、坂井の事を聞いた事がなかつた。学校をやめた当座は、順境にいて得意な振舞をするものに逢うと、今に見ると云う氣も起つた。それがしばらくすると、単なる憎悪の念に変化した。ところが一二年このかたは全く自他の差違に無頓着になつて、自分は自分のように生れついたもの、先は先のような運を持つて世の中へ出て来たもの、両方共始から別種類の人間だから、ただ人間として生息する以外に、何の

交渉も利害もないのだと考えるようになってきた。たまに世間話のついでとして、ありやといった何をしている人だぐらいは聞きもするが、それより先は、教えて貰う努力さえ出すのが面倒だった。御米にもこれと同じ傾きがあった。けれどもその夜は珍らしく、坂井の主人は四十恰好の髯のない人であると云う事やら、ピアノを弾くのは惣領の娘で十二三になると云う事やら、またほかの家の小供が遊びに来て、ブランコへ乗せてやらなると云う事やらを話した。

「なぜほかの家の子供はブランコへ乗せないんだい」

「つまり吝なんでしょう。早く悪くなるから」

宗助は笑い出した。彼はそのくらい吝嗇な家主が、屋根が漏ると云えば、すぐ瓦師を寄こしてくれる、垣が腐つたと訴えればすぐ植木屋に手を入れさしてくれるのは矛盾だと思つたのである。

その晩宗助の夢には本多の植木鉢も坂井のブランコもなかった。彼は十時半頃床に入つて、万象に疲れた人のように軒をかいた。この間から頭の具合がよくないため、寝付の悪いのを苦にしていた御米は、時々眼を開けて薄暗い部屋を眺めた。細い灯が床の上に乗せてあつた。夫婦は夜中灯火を点けておく習慣がついているので、寝る時はいつでも

心を細目にして洋灯をここへ上げた。

御米は気にするように枕の位置を動かした。そうしてそのたびに、下になっている方の肩の骨を、蒲団の上で滑らした。しまいには腹這になつたまま、両脇を突いて、しばらく夫の方を眺めていた。それから起き上つて、夜具の裾に掛けてあつた不断着を、寝巻の上へ羽織つたなり、床の間の洋灯を取り上げた。

「あなたあなた」と宗助の枕元へ来て曲みながら呼んだ。その時夫はもう鼾をかいていなかった。けれども、元の通り深い眠から来る呼吸を続けていた。御米はまた立ち上つて、洋灯を手にしたまま、間の襖を開けて茶の間へ出た。暗い部屋が茫漠手元の灯に照らされた時、御米は鈍く光る筆筒の環を認めた。それを通り過ぎると黒く燻ぶつた台所に、腰障子の紙だけが白く見えた。御米は火の気のない真中に、しばらく佇ずんでいたが、やがて右手に当る下女部屋の戸を、音のしないようにそと引いて、中へ洋灯の灯を翳した。下女は縞も色も判然映らない夜具の中に、土竜のごとく塊まって寝ていた。今度は左側の六畳を覗いた。がらんとして淋しい中に、例の鏡台が置いてあつて、鏡の表が夜中だけに凄く眼に応えた。

御米は家中を一回回つた後、すべてに異状のない事を確かめた上、また床の中へ戻

った。そうしてようやく眼を眠った。今度は好い具合に、眼蓋まぶたのあたりに気を遣つかわないで済むように覚えて、しばらくするうちに、うとうととした。

するとまたふと眼が開あいた。何だかずしんと枕元で響いたような心持がする。耳を枕から離して考えると、それはある大きな重いものが、裏の崖から自分達の寝ている座敷の縁の外へ転がり落ちたとしか思われなかった。しかし今眼が覚さめるすぐ前に起った出来事で、けつして夢の続じやないと考えた時、御米は急に気味を悪くした。そうして傍に寝ている夫の夜具の袖そでを引いて、今度は真面目まじめに宗助を起し始めた。

宗助はそれまで全くよく寝ていたが、急に眼が覚さめると、御米が、

「あなたちよつと起きて下さい」と揺ゆつていたので、半分は夢中に、

「おい、好し」とすぐ蒲団ふとんの上へ起き直った。御米は小声で先刻さつきからの様子を話した。

「音は一遍ぎりした限なのかい」

「だつて今したばかりなのよ」

二人はそれで黙った。ただじつと外の様子を伺っていた。けれども世間は森しんと静であつた。いつまで耳を峙そばだてていても、再び物の落ちて来る気色はなかった。宗助は寒いと云いながら、単衣ひしえの寝巻の上へ羽織かぶを被かつて、縁側えんがわへ出て、雨戸を一枚繰のぞった。外を覗くと

何にも見えない。ただ暗い中から寒い空気がにわかにも肌に逼つて来た。宗助はすぐ戸を閉めた。

かきがね

をおろして座敷へ戻るや否や、また蒲団の中へ潜り込んだが、

「何にも変つた事はありません。多分御前の夢だろう」と云つて、宗助は横になつた。

御米はけつして夢でないと主張した。たしかに頭の上で大きな音がしたのだと固執した。

宗助は夜具から半分出した顔を、御米の方へ振り向けて、

「御米、お前は神経が過敏になつて、近頃どうかしているよ。もう少し頭を休めてよく寝る工夫でもしなくっちゃいけない」と云つた。

その時次の間の柱時計が二時を打つた。その音で二人ともちよつと言葉を途切らして、黙つて見ると、夜はさらに静まり返つたように思われた。二人は眼が冴えて、すぐ寝つかれそうにもなかつた。御米が、

「でもあなたは気楽ね。横になると十分経たないうちに、もう寝ていらつしやるんだから」と云つた。

「寝る事は寝るが、気が楽で寝られるんじゃない。つまり疲れるからよく寝るんだらう」と宗助が答えた。

こんな話をしていられるうちに、宗助はまた寝入ってしまった。御米は依然として、のつそつ床の中で動いていた。すると表をがらがらと烈しい音を立てて車が一台通った。近頃御米は時々夜明前の車の音を聞いて驚ろかされる事があった。そうしてそれを思い合わせる、いつも似寄った刻限なので、必^{ひつきょう}竟は毎朝同じ車が同じ所を通るのだらうと推測した。多分牛乳を配達するためかなどで、ああ急ぐに違ないときめていたから、この音を聞くと等しく、もう夜が明けて、隣人の活動が始ったごとくに、心丈夫になった。そうこうしている、どこかで鶏^{とり}の音が聞えた。またしばらくすると、下駄^{げた}の音を高く立てて往來を通るものがあつた。そのうち清^{きよ}が下女部屋の戸を開けて厠^{かわや}へ起きた模様だったが、やがて茶の間へ来て時計を見ているらしかった。この時床の間に置いた洋灯^{ランプ}の油が減つて、短かい心に届かなくなつたので、御米の寝ている所は真暗になっていた。そこへ清の手にした灯火^{あかり}の影が、襖^{ふすま}の間から射し込んだ。

「清かい」と御米が声を掛けた。

清はそれからすぐ起きた。三十分ほど経^たつて御米も起きた。また三十分ほど経^たつて宗助もついに起きた。平常^{いづつも}は好い時分に御米がやって来て、

「もう起きてもよくつてよ」と云うのが例であつた。日曜とたまの旗日^{はたび}には、それが、

「さあもう起きてちようだい」に変わるだけであつた。しかし今日は昨夕の事が何となく気にかかるので、御米の迎に來ないうち宗助は床を離れた。そうして直崖下の雨戸を繰つた。下から覗くと、寒い竹が朝の空気に鎖されてじつとして居る後から、霜を破る日の色が射して、幾分か頂を染めていた。その二尺ほど下の勾配の一番急な所に生えている枯草が、妙に摺り剥けて、赤土の肌を生々しく露出した様子に、宗助はちよつと驚ろかされた。それから一直線に降りて、ちようど自分の立つている縁鼻の土が、霜柱を摧いたように荒れていた。宗助は大きな犬でも上から転がり落ちたのじやなからうかと思つた。しかし犬にはいくら大きいにしても、余り勢が烈し過ぎると思つた。

宗助は玄関から下駄を提げて来て、すぐ庭へ下りた。縁の先へ便所が折れ曲つて突き出しているの、いとど狭い崖下が、裏へ抜ける半間ほどの所はなおさら狭苦しくなつていた。御米は掃除屋が來るたびに、この曲り角を氣にしては、

「あすこがもう少し広いといいけれども」と危険があるので、よく宗助から笑われた事があつた。

そこを通り抜けると、真直に台所まで細い路が付いている。元は枯枝の交つた杉垣があつて、隣の庭の仕切りになつていたが、この間家主が手を入れた時、穴だらけの杉葉を奇

麗れいに取り払はらつて、今では節ふしの多い板いた塀べいが片側を勝手口まで塞ふさいでしまった。日当りの悪い上に、樋といから雨あまだれ滴たばかり落ちるので、夏になると秋海棠しゅうかいとうがいつぱい生える。その盛りな頃は青い葉が重なり合あつて、ほとんど通り路がなくなるくらい茂さつて来る。始めて越した年は、宗助も御米もこの景色けしきを見て驚ろかされたくらいである。この秋海棠は杉垣のまだ引き抜かれない前から、何年となく地下はびこに蔓はつていたもので、古家ふるやの取り毀こぼれた今でも、時節が来ると昔の通り芽を吹くものと解とつた時、御米は、
「でも可愛いわね」と喜んだ。

宗助が霜を踏んで、この記念の多い横手へ出た時、彼の眼は細長い路次ろじの一点に落ちた。そうして彼は日の通わない寒さの中にはたと留とまつた。

彼の足元には黒塗まきえの蒔絵まきえの文庫が放り出してあつた。中味はわざわざそこへ持つて来て置いて行つたように、霜の上にちやんと据すわつているが、蓋ふたは二三尺離れて、塀へいの根に打ちつけられたごとくに引つ繰り返つて、中を張つた千代紙ちよがみの模様はづきりが判然はつきり見えた。文庫の中から洩もれた、手紙や書付類が、そこいらに遠慮なく散らばっている中に、比較的長い一通がわざわざ二尺ばかり広げられて、その先が紙屑のごとく丸めてあつた。宗助は近づいて、この揉も苦茶もくちやになつた紙の下を覗のぞいて覚えぞえず苦笑した。下には大便が垂れてあつた。

土の上に散らばっている書類を一纏ひとまとめにして、文庫の中へ入れて、霜と泥に汚れたまま宗助は勝手口まで持つて来た。腰障子こししようじを開けて、清に

「おいこれをちよつとそこへ置いてくれ」と渡すと、清は妙な顔をして、不思議そうにそれを受取つた。御米は奥で座敷へ払塵はたきを掛けていた。宗助はそれから懐手ふところてをして、玄関だの門の辺あたりをよく見廻つたが、どこにも平常と異なる点は認められなかつた。

宗助はようやく家へ入つた。茶の間へ来て例の通り火鉢ひばちの前へ坐つたが、すぐ大きな声を出して御米を呼んだ。御米は、

「起き抜けにどこへ行つていらしたの」と云いながら奥から出て来た。

「おい昨夜枕元ゆうべで大きな音がしたのは、やつぱり夢じゃなかつたんだ。泥棒だよ。泥棒が坂井さんの崖がけの上から宅の庭へ飛び下りた音だ。今裏へ回つて見たら、この文庫が落ちていて、中にはいつていた手紙なんぞが、むちやくちやに放り出してあつた。おまけに御馳走ごちそうまで置いて行つた」

宗助は文庫の中から、二三通の手紙を出して御米に見せた。それには皆坂井の名宛みなあてが書いてあつた。御米は吃驚びっくりして立膝のまま、

「坂井さんじゃほかに何か取られたでしょうか」と聞いた。宗助は腕組をして、

「ことに因ると、まだ何かやられたね」と答えた。

夫婦はともかくもと云うので、文庫をそこへ置いたなり朝飯の膳に着いた。しかし箸を動かす間も泥棒の話は忘れなかった。御米は自分の耳と頭のたしかな事を夫に誇った。宗助は耳と頭のたしかでない事を幸福とした。

「そうおっしやるけれど、これが坂井さんでなくって、宅で御覧なさい。あなたみたように、ぐうぐう寝ていらしつたら困るじやないの」と御米が宗助をやり込めた。

「なに、宅なんぞへ這入る氣遣はないから大丈夫だ」と宗助も口の減らない返事をした。そこへ清が突然台所から顔を出して、

「この間拵えた旦那様の外套でも取られようものなら、それこそ騒ぎでございましたね。御宅でなくって坂井さんだったから、本当に結構でございます」と真面目に悦の言葉を述べたので、宗助も御米も少し挨拶に窮した。

食事を済まして、出勤の時刻にはまだだいぶ間があった。坂井では定めて騒いでるだらうと云うので、文庫は宗助が自分で持つて行ってやる事にした。蔣絵ではあるが、ただ黒地に亀甲形を金で置いただけの事で、別に大して金目の物とも思えなかった。御米は唐棧の風呂敷を出してそれを包んだ。風呂敷が少し小さいので、四隅を対う同志繫いで、

真中にこま結びを二つ拵こしらえた。宗助がそれを提さげたところは、まるで進物の菓子折のようであった。

座敷で見ればすぐ崖の上だが、表から廻ると、通りを半町ばかり来て、坂を上のぼつて、また半町ほど逆に戻らなければ、坂井の門前へは出られなかった。宗助は石の上へ芝を盛かなめて扇骨あふ木なめを奇麗きれに植きえつけた垣に沿かうて門内に入った。

家いえの内はむしろ静か過ぎるくらいしんとしていた。摺すり硝ガラス子の戸かどが閉たててある玄関へ来て、ベルを二三度押し見てが、ベルが利きかないと見えて誰も出て来なかつた。宗助は仕方なしに勝手口へ廻まつた。そこにも摺すり硝ガラス子の嵌はまつた腰障こししょうじ子が二枚閉しめてあつた。中では器物を取り扱あう音がした。宗助は戸を開けて、瓦カス斯し七輪ちりんを置おいた板いた間に蹲しゃがんでいる下女あいさつに挨拶あいさつをした。

「これはこちらなのでしょう。今朝わたくし私うちの家の裏うらに落ちていましたから持つて来ました」と云いながら、文庫を出した。

下女は「そうでございましたか、どうも」と簡単に礼を述べて、文庫を持つたまま、板の間の仕切まで行つて、仲なか働ばらしい女たらきを呼び出した。そこで小声に説明をして、品物を渡すと、仲働はそれを受取つたなり、ちよつと宗助の方を見たがすぐ奥へ入いつた。入れ

違ちがに、十二三になる丸顔の眼の大きな女の子と、その妹らしい揃そろいのリボンを懸かけた子がいつしよに馳かけて来て、小さい首を二つ並べて台所へ出した。そうして宗助の顔を眺ながめながら、泥棒よと耳語みみごをやった。宗助は文庫を渡してしまえば、もう用が済んだのだから、奥の挨拶はどうでもいいとして、すぐ帰ろうかと考えた。

「文庫は御宅のでしょうね。いいんでしょうね」と念を押して、何なにも知らない下女を気の毒がらしているとところへ、最前の仲働が出て来て、

「どうぞ御通り下さい」と丁寧ていねいに頭を下げたので、今度は宗助の方が少し痛み入るようになった。下女はいよいよしとやかに同じ請求を繰り返した。宗助は痛み入る境を通り越して、ついに迷惑を感じ出した。ところへ主人が自分で出て来た。

主人は予想通り血色の好こい下膨しもぶくれの福相ふくそうを具そなえていたが、御米の云ったように髭ひげのない男ではなかった。鼻の下に短かく刈り込んだのを生やして、ただ頬ほおから腮あごを奇麗きれいに蒼あおくしていた。

「いやどうもとんだ御手数ごてかずで」と主人は眼尻めじりに皺しわを寄せながら礼を述べた。米沢よねざわの紺かすりを着た膝ひざを板の間に突ひいて、宗助からいろいろ様子を聞いている態度が、いかにも緩ゆるくりしていた。宗助は昨夕ゆうべから今朝けさへかけての出来事を一通り掻かい撮つまんで話した上、文庫のほか

に何か取られたものがあるかないかを尋ねて見た。主人は机の上に置いた金時計を一つ取られた由を答えた。けれどもまるで他のものでも失くした時のように、いっこう困つたと云う気色はなかつた。時計よりはむしろ宗助の叙述の方に多くの興味を有つて、泥棒が果して崖を伝つて裏から逃げるつもりだつたらうか、または逃げる拍子に、崖から落ちたものだらうかと云うような質問を掛けた。宗助は固より返答ができなかつた。

そこへ最前の仲働が、奥から茶や苳を運んで来たので、宗助はまた帰りはぐれた。主人はわざわざ座蒲団まで取り寄せて、とうとうその上へ宗助の尻を据えさした。そうして今朝早く来た刑事の話をし始めた。刑事の判定によると、賊は宵から邸内に忍び込んで、何でも物置かなぞに隠れていたに違ない。這入口はやはり勝手である。燐寸を擦つて蠟燭を点して、それを台所にあつた小桶の中へ立てて、茶の間へ出たが、次の部屋には細君と子供が寝ているので、廊下伝いに主人の書齋へ来て、そこで仕事をしていると、この間生れた末の男の子が、乳を呑む時刻が来たものか、眼を覚まして泣き出したため、賊は書齋の戸を開けて庭へ逃げたらしい。

「平常のように犬がいると好かつたんですがね。あいにく病氣なので、四五日前病院へ入られてしまつたもんですから」と主人は残念がった。宗助も、

「それは惜しい事でした」と答えた。すると主人はその犬の種ブリードやら血統やら、時々かり獵リョウに連れて行く事や、いろいろな事を話し始めた。

「獵リョウは好ですから。もつとも近來は神経痛で少し休んでいます。何しろ秋口から冬へ掛けてしぎ嶋シマなぞを打ちに行くと、どうしても腰から下は田の中へ浸つかつて、二時間も三時間も暮らさなければならぬんですから、全く身体からだには好くないようです」

主人は時間に制限のない人と見えて、宗助が、なるほどとか、そうですか、とか云つていると、いつまでも話しているので、宗助はやむを得ず途中で立ち上がった。

「これからまた例の通り出かけなければなりませんから」と切り上げると、主人は始めて気がついたように、忙がしいところを引き留めた失礼を謝した。そうしていざまた刑事が現状を見に行くかも知れないから、その時はよろしく願うと云うような事を述べた。最後に、

「どうかちと御話に。私も近頃はむしろ閑ひまな方ですから、また御邪魔に出ますから」と丁て寧いねいに挨拶をした。門を出て急ぎ足に宅うちへ帰ると、毎朝出る時刻よりも、もう三十分ほど後のちれていた。

「あなたどうなすつたの」と御米が氣を揉もんで玄關へ出た。宗助はすぐ着物を脱いで洋服

に着換えながら、

「あの坂井と云う人はよっぽど気楽な人だね。金があるとああ緩くりできるもんかな」と云った。

八

「小六さん、茶の間から始めて。それとも座敷の方を先にして」と御米が聞いた。

小六は四五日前とうとう兄の所へ引き移った結果として、今日の障子の張替を手伝わなければならぬ事となった。彼は昔し叔父の家に行った時、安之助といっしょになつて、自分の部屋の唐紙を張り替えた経験がある。その時は糊を盆に溶いたり、篋を使つて見たり、だいぶ本式にやり出したが、首尾好く乾かして、いぎ元の所へ建てるという段になると、二枚とも反つ繰り返つて敷居の溝へ嵌まらなかつた。それからこれも安之助と共同して失敗した仕事であるが、叔母の云いつけで、障子を張らせられたときには、水道でぎぶぎぶ棗を洗つたため、やっぱり乾いた後で、惣体に歪ができて非常に困難した。「姉さん、障子を張るときは、よほど慎重にしないと失策です。洗つちや駄目ですぜ」

と云いながら、小六は茶の間の縁側からびりびり破き始めた。

縁先は右の方に小六のいる六畳が折れ曲つて、左には玄関が突き出している。その向うを塀が縁と平行に塞いでいるから、まあ四角な囲内と云つていい。夏になるとコスモスを一面に茂らして、夫婦とも毎朝露の深い景色を喜んだ事もあるし、また塀の下へ細い竹を立てて、それへ朝顔を絡ませた事もある。その時は起き抜けに、今朝咲いた花の数を勘定し合つて二人が楽にした。けれども秋から冬へかけては、花も草もまるで枯れてしまふので、小さな砂漠みたように、眺めるのも気の毒なくらい淋しくなる。小六はこの霜ばかり降りた四角な地面を背にして、しきりに障子の紙を剥がしていた。

時々寒い風が来て、後から小六の坊主頭と襟の辺を襲つた。そのたびに彼は吹き曝しの縁から六畳の中へ引つ込みたくなつた。彼は赤い手を無言のまま働らかしながら、馬尻の中で雑巾を絞つて障子の棧を拭き出した。

「寒いでしょう、御氣の毒さまね。あいにく御天氣が時雨れたもんだから」と御米が愛想を云つて、鉄瓶の湯を注ぎ注ぎ、昨日煮た糊を溶いた。

小六は実際こんな用をするのを、内心では大いに軽蔑していた。ことに昨今自分がやむなく置かれた境遇からして、この際多少自己を侮辱しているかの観を抱いて雑巾を手に

していた。昔し叔父の家で、これと同じ事をやらせられた時は、暇潰しの慰みとして、不愉快どころかかえって面白かった記憶さえあるのに、今じゃこのくらいな仕事よりほかにする能力のないものと、強いて周囲から諦めさせられたような気がして、縁側の寒いのがなおのこと癢に触った。

それで嫂には快よい返事さえ碌にしなかった。そうして頭の中で、自分の下宿にいた法科大学生が、ちよつと散歩に出るついでに、資生堂へ寄つて、三つ入りの石鹸と齒磨をかうのにさえ、五円近くの金を払う華奢を思い浮べた。するとどうしても自分一人が、こんな窮境に陥るべき理由がないように感ぜられた。それから、こんな生活状態に甘んじて一生を送る兄夫婦がいかにも惘然に見えた。彼らは障子を張る美濃紙をかうのにさえ気兼をしやしまいかと思われるほど、小六から見ると、消極的な暮し方をしていた。

「こんな紙じや、またすぐ破けますね」と云いながら、小六は巻いた小口を一尺ほど日に透かして、二三度力任せに鳴らした。

「そう？　でも宅じや小供がないから、それほどでもなくつてよ」と答えた御米は糊を含ました刷毛を取つてとんとんとと棧の上を渡した。

二人は長く継いだ紙を双方から引き合つて、なるべく垂るみのできないように力めたが、

小六が時々面倒臭そうな顔を見ると、御米はつい遠慮が出て、好加減いいかげんに髮剃かみそりで小口を切り落してしまふ事もあつた。したがつてでき上つたものには、所々のぶくぶくがだいたい目についた。御米は情なさなさけそうに、戸袋に立て懸けた張り立ての障子を眺めたなが。そうして心の中で、相手が小六でなくつて、夫であつたならと思つた。

「皺しわが少しできたのね」

「どうせ僕の御手際おてぎわじや旨うまく行かない」

「なに兄さんだつて、そう御上手じやなくつてよ。それに兄さんはあなたよりよつぽど無精しよね」

小六は何にも答えなかつた。台所から清きよが持つて来た含嗽うがい茶碗ちやわんを受け取つて、戸袋の前へ立つて、紙が一面に濡れるぬほど霧を吹いた。二枚目を張つたときは、先に霧を吹いた分がほぼ乾いて皺しわがおおかた平らになつていた。三枚目を張つたとき、小六は腰が痛くなつたと云い出した。実を云うと御米の方は今朝けさから頭が痛かつたのである。

「もう一枚張つて、茶の間だけ済ましてから休みましょう」と云つた。

茶の間を済ましているうちに午ひるになつたので、二人は食事を始めた。小六が引き移つてからこの四五日しごんち、御米は宗助そうすけのいない午飯ひるはんを、いつも小六と差さしむかい向むかひで食べる事にな

った。宗助といつしよになつて以来、御米の毎日膳ぜんを共にしたものは、夫よりほかになかつた。夫の留守の時は、ただ独り箸はしを執とるのが多年の習慣ならわしであつた。だから突然この小こ舅じゆうとと自分の間に御櫃おほちを置いて、互に顔を見合せながら、口を動かすのが、御米に取つては一種異いな経験であつた。それも下女が台所で働らいているときは、まだしもだが、清の影も音もしないとなると、なおのこと変に窮屈な感じが起つた。無論小六よりも御米の方が年上であるし、また従来なんそくてきの關係から云つても、両性を絡からみつける艶つやっぽい空気は、箱け束たば的な初期なんそくてきにおいてすら、二人の間に起り得べきはずのものではなかつた。御米は小六と差さしむかい向むかいに膳ぜんに着くときのこの氣ぶつせいな心持が、いつになつたら消えるだろうと、心うちの中で私ひそかに疑うたがへた。小六が引き移るまでは、こんな結果が出ようとは、まるで氣がつかなかつたのだからなおさら当惑した。仕方がないからなるべく食事中に話をして、せめて手持無沙汰てもちぶさたな隙間すきまだけでも補おうと力つとめた。不幸にして今の小六は、この嫂あによめの態度に対してほどの好い調子を出すだけの余裕と分別ぶんべつを頭の中に発見し得なかつたのである。

「小六さん、下宿は御馳走ごちそうがあつて」

こんな質問に逢うと、小六は下宿から遊びに来た時分のように、淡泊たんぱくな遠慮のない答をする訳に行かなくなつた。やむを得ず、

「なにそうでもありません」ぐらいにしておく、その語気がからりと澄んでいないので、御米の方では、自分の待遇が悪いせいかと解釈する事もあった。それがまた無言の間に、小六の頭に映る事もあった。

ことに今日は頭の具合が好くないので、膳に向つても、御米はいつものように力めるのが退儀であつた。力めて失敗するのはなお厭であつた。それで二人とも障子を張るときよりも言葉少なに食事を済ました。

午後は手が慣れたせい、朝に比べると仕事は少し果取つた。しかし二人の気分は飯前よりもかえつて縁遠くなつた。ことに寒い天氣が二人の頭にこたへた。起きた時は、日載せた空がしだいに遠退いて行くかと思われるほどに、好く晴れていたが、それが真蒼に色づく頃から急に雲が出て、暗い中で粉雪でも醸しているように、日の目を密封した。二人は交る交る火鉢に手を翳した。

「兄さんは来年になると月給が上がるんでしよう」

ふと小六がこんな問を御米にかけた。御米はその時畳の上の紙片を取つて、糊に汚れた手を拭いていたが、全く思も寄らないという顔をした。

「どうして」

「でも新聞で見ると、来年から一般に官吏の増俸があると云う話じやありませんか」

御米はそんな消息を全く知らなかった。小六から詳しい説明を聞いて、始めてなるほどと首肯うなずいた。

「全くね。これじや誰だつて、やつて行けないわ。御肴おさかなの切身なんか、私わたしが東京へ来てからでも、もう倍になつてゐるんですもの」と云つた。肴の切身の値段になると小六の方が全く無識であつた。御米に注意されて始めてそれほどむやみに高くなるものかと思つた。

小六にちよつとした好奇心の出たため、二人の会話は存外素直に流れて行つた。御米は裏の家主の十八九時代に物価の大変安かつた話を、この間宗助から聞いた通り繰り返した。その時分は蕎麦そばを食うにしても、盛もりかけが八厘、種たねものが二銭五厘であつた。牛肉は普通なみが一人前四銭で、ロースは六銭であつた。寄席よせは三銭か四銭であつた。学生は月に七円ぐらい国から貰もらえば中の部であつた。十円も取るとすでに贅ぜい沢たくと思われた。

「小六さんも、その時分だと訳なく大学が卒業できたのにね」と御米が云つた。

「兄さんもその時分だと大変暮しやすい訳ですね」と小六が答えた。

座敷の張易はりかえが済んだときにはもう三時過したくになつた。そうこうしているうちには、宗助も帰つて来るし、晩の支度したくも始めなくつてはならないので、二人はこれを一段落として、

糊かみそりや髪かみそり剃そを片づけた。小六は大きな伸のびを一つして、握にぎり拳こぶしで自分の頭あたまをこんこんと叩たたいた。

「どうも御苦労さま。疲れたでしよう」と御米は小六をいた勞らわつた。小六はそれよりも口くちさ淋むしい思おもがした。この間文庫を届けてやった札はに、坂井からくれたと云う菓子とを、戸と棚だなから出して貰もらつて食くべた。御米は御茶を入れた。

「坂井と云う人は大学出なんですか」

「ええ、やつぱりそうなんですつて」

小六は茶を飲んで煙たばこ草くさを吹ふいた。やがて、

「兄あにさんは増俸ぞうりやうの事をまだあなたに話はなさないんですか」と聞いた。

「いいえ、ちつとも」と御米が答こたえた。

「兄あにさんみたようになれたら好よいだろうな。不平ふへいも何なにもなくつて」

御米は特別とくべつの挨拶あいさつもしなかつた。小六はそのまま起たつて六畳むつじやうへ這はい入いつたが、やがて火ひが消けえたと云つて、火鉢かかを抱かかえてまた出て来た。彼は兄あにの家いえに厄やく介かいになりながら、もう少し立てば都合ごうごがつくだらうと慰なぐさめた安やす之し助すけの言葉ことばを信まをじて、学校がくは表おもて向むき休やす学まなの体ていにして一時ひとときの始末はじまつをつけたのである。

九

裏の坂井と宗助そうすけとは文庫が縁になつて思わぬ関係がついた。それまでは月に一度こちらから清きよに家賃を持たしてやると、向むこうからその受取を寄こすだけの交渉に過ぎなかつた。だから、崖がけの上に西洋人が住んでいると同様で、隣人としての親みは、まるで存在していなかつたのである。

宗助が文庫を届けた日の午後、坂井の云つた通り、刑事が宗助の家の裏手から崖下をしら検べに来たが、その時坂井もいっしょだったので、御米およねは始めて噂うわさに聞いた家主の顔を見た。髭ひげのないと思つたのに、髭を生やしているのと、自分なぞに対しても、存外ていねい丁寧な言葉を使うのが、御米には少し案外であつた。

「あなた、坂井さんはやっぱり髭を生やしていてよ」と宗助が帰つたとき、御米はわざわざ注意した。

それから二日ばかりして、坂井の名刺を添えた立派な菓子折を持って、下女が礼に来たが、せんだつてはいろいろ御世話になりました、ありがどう存じます、いずれ主人が自身

に伺うはずでございませうと云いおいて、帰って行つた。

その晩宗助は到来の菓子折の蓋ふたを開けて、唐饅頭とうまんじゅうを頬張りながら、

「こんなものをくれるところをもつて見ると、それほど吝けちでもないようだね。他の家の子をブランコへ乗せてやらないって云うのは嘘うそだろう」と云つた。御米も、

「きつと嘘よ」と坂井を弁護した。

夫婦と坂井とは泥棒の這入はいらない前より、これだけ親しみの度が増したようなものの、それ以上に接近しようと云う念は、宗助の頭にも、御米の胸にも宿らなかつた。利害の打算から云えば無論の事、単に隣人の交際じやうぎとか情誼じやうぎとか云う点から見ても、夫婦はこれよりも前進する勇気を有もたなかつたのである。もし自然がこのままに無為むゐの月日を駆かつたなら、久しからぬうちに、坂井は昔の坂井になり、宗助は元の宗助になつて、崖の上と崖の下に互の家が懸かけ隔へだたるごとく、互の心も離れ離れになつたに違なかつた。

ところがそれからまた二日置いて、三日目の暮れ方に、獺かわうその襟かむらひの着いた暖かそうな外套マントを着て、突然坂井が宗助の所へやつて来た。夜間客おそに襲おそわれつけない夫婦は、軽微ろうばの狼おを感いじたくらい驚ろかされたが、座敷へ上げて話して見ると、坂井は丁寧ていねいに先日さきの礼れいを述べた後のち、

「御蔭で取られた品物がまた戻りましたよ」と云いながら、白縮緬しろちりめんの兵児帯へこおびに巻き付けた金鎖はづすを外して、両蓋りょうふたの金時計を出して見せた。

規則だから警察へ届ける事は届けたが、実はだいたい古い時計なので、取られてもそれほど惜しくもないぐらいに諦あきらめていたら、昨日きのうになって、突然差出人の不明な小包が着いて、その中にちゃんと自分の失なくしたのが包くるんであったんだと云う。

「泥棒も持ち扱あかつたんでしよう。それとも余り金にならないんで、やむを得ず返してくれる気になつたんですかね。何しろ珍らしい事で」と坂井は笑つていた。それから、

「何私から云うと、実はあの文庫の方がむしろ大切な品でしてね。祖母ばばが昔し御殿へ勤めていた時分、戴いたいたんだとか云つて、まあ記念かたみのようなものですから」と云うような事も説明して聞かした。

その晩坂井はそんな話を約二時間もして帰つて行つたが、相手になつた宗助も、茶の間で聞いていた御米も、大変談話の材料に富んだ人だと思わぬ訳に行かなかつた。後あとで、

「世間の広い方かたね」と御米が評した。

「閑ひまだからさ」と宗助が解釈した。

次の日宗助が役所の帰りがけに、電車を降りて横町の道具屋の前まで来ると、例かの瀬わうの

襟えりを着けた坂井の外マント套がちよつと眼に着いた。横顔を往來の方へ向けて、主人を相手に何か云っている。主人は大きな眼鏡を掛けたまま、下から坂井の顔を見上げている。宗助は挨拶あいさつをすべき折でもないと思つたから、そのまま行き過ぎようとして、店の正面まで来ると、坂井の眼が往來へ向いた。

「やあ昨夜は。今御帰りですか」と気軽に声をかけられたので、宗助も愛想あいそなく通り過ぎる訳にも行かなくなつて、ちよつと歩調を緩ゆるめながら、帽子を取つた。すると坂井は、用はもう済んだと云う風をして、店から出て来た。

「何か御求めですか」と宗助が聞くと、

「いえ、何」と答えたまま、宗助と並んで家うちの方へ歩き出した。六七間来たとき、

「あの爺じいい、なかなか猾ずるい奴です。華山かざんの偽物にせものを持って来て押付おっつけようとしやがるから、今叱りつけてやつたんです」と云い出した。宗助は始めて、この坂井も余裕よゆうある人に共通な好事こうずを道楽どうらくにしているのだと心づいた。そうしてこの間売り払つた抱ほう一いつの屏風びょうぶも、最初からこう云う人に見せたら、好かつたろうにと、腹の中で考えた。

「あれは書画には明るい男なんですか」

「なに書画どころか、まるで何も分らない奴です。あの店の様子を見ても分るじやありません」

せんか。骨董らしいものは一つも並んでいやしない。もとが紙屑屋から出世してあれだけになったんですからね」

坂井は道具屋の素性をよく知っていた。出入の八百屋の阿爺の話によると、坂井の家は旧幕の頃何とかの守と名乗ったもので、この界限では一番古い門閥家なのだそうである。瓦解の際、駿府へ引き上げなかつたんだとか、あるいは引き上げてまた出て来たんだとか云う事も耳にしたようであるが、それは判然宗助の頭に残っていないかつた。

「小さい内から悪戯ものでね。あいつが餓鬼大将になってよく喧嘩をしに行つた事がありませんよ」と坂井は御互の子供の時の事まで一口洩らした。それがまたどうして華山の贗物にせものを売り込もうと巧んだのかと聞くと、坂井は笑つて、こう説明した。――

「なに親父おやじの代から鼻屑ひびきにしてやつてるものですから、時々何だ蚊かだつて持つて来るんです。ところが眼も利かない癖に、ただ慾ばりたがつてね、まことに取扱にい悪い代物しろものです。それについてこの間抱一の屏風を買つて貰つて、味を占めたんでね」

宗助は驚ろいた。けれども話の途中を遮さえぐる訳に行かなかつたので、黙つていた。坂井は道具屋がそれ以来乗氣になつて、自身に分りもしない書画類をしきりに持ち込んで来る事やら、大坂出来の高麗焼こうらいやきを本物だと思つて、大事に飾つておいた事やら話した末、

「まあ台所で使う食卓か、たかだか新の鉄瓶ぐらいしか、あんな所じゃ買えたもんじゃありません」と云つた。

そのうち二人は坂の上へ出た。坂井はそこを右へ曲る、宗助はそこを下へ下りなければならなかつた。宗助はもう少ししよに歩いて、屏風の事を聞きたかつたが、わざわざ回り路をするのも変だと心づいて、それなり分れた。分れる時、

「近い中御邪魔に出てもようございますか」と聞くと、坂井は、
「どうぞ」と快よく答えた。

その日は風もなくひとしきり日も照つたが、家にいると底冷のする寒さに襲われるとか云つて、御米はわざわざ置炬燵に宗助の着物を掛けて、それを座敷の真中に据えて、夫の帰りを待ち受けていた。

この冬になつて、昼のうち炬燵を拵らえたのは、その日が始めてであつた。夜は疾うから用いていたが、いつも六畳に置くだけであつた。

「座敷の真中にそんなものを据えて、今日はどうしたんだい」

「でも、御客も何もないからいいでしょう。だつて六畳の方は小六さんがいて、塞がつて
いるんですもの」

宗助は始めて自分の家に小六のいる事に気がついた。襯衣シヤツの上から暖かい紡績織ほうせきおりを掛けて貰つて、帯をぐるぐる巻きつけたが、

「ここは寒帯だから炬燵でも置かなくつちや凌げない」と云つた。小六の部屋になつた六畳は、畳こそ奇麗きれいでないが、南と東が開あいていて、家うちじゆう中で一番暖かい部屋なのである。

宗助は御米の汲くんで来た熱い茶を湯呑ゆのみから二口ほど飲んで、

「小六はいるのかい」と聞いた。小六は固もとよりいたはずである。けれども六畳はひっそりして人のいるようにも思われなかつた。御米が呼びに立とうとするのを、用はないからいと留めたまま、宗助は炬燵蒲団ぶとんの中へ潜もぐり込んで、すぐ横になつた。一方いっぽう口に崖を控えている座敷には、もう暮方の色が萌きんぎしていた。宗助は手枕をして、何を考えともなく、ただこの暗く狭い景色けしきを眺ながめていた。すると御米と清が台所で働く音が、自分に関係のない隣の人の活動のごとくに聞えた。そのうち、障子だけがただ薄白く宗助の眼に映るように、部屋の中が暮れて来た。彼はそれでもじつとして動かずにいた。声を出して洋灯ランプの催促せうそもしなかつた。

彼が暗い所から出て、晩食ばんめしの膳ぜんに着いた時は、小六も六畳から出て来て、兄の向うに坐すわつた。御米は忙しいので、つい忘れたと云つて、座敷の戸を締しめに立つた。宗助は弟に

夕方になったら、ちと洋灯ランブを点けるとか、戸を閉たてるとかして、忙しい姉の手伝でもしたら好かろうと注意したかったが、昨今引き移ったばかりのものに、気まずい事を云うのも悪かろうと思つてやめた。

御米が座敷から歸つて来るのを待つて、兄弟は始めて茶碗に手を着けた。その時宗助はようやく今日役所の歸りがけに、道具屋の前で坂井に逢つた事と、坂井があの大めきな眼鏡めがねを掛けている道具屋から、抱ほう一いつの屏風びょうぶを買つたと云う話をした。御米は、

「まあ」と云つたなり、しばらく宗助の顔を見ていた。

「じゃきつとあれよ。きつとあれに違ちがひないわね」

小六は始めのうち何にも口を出さなかつたが、だんだん兄夫婦の話を聞いているうちに、ほぼ関係が明めい瞭りょうになつたので、

「全体いくらで売つたのです」と聞いた。御米は返事をする前にちよつと夫の顔を見た。

食事が終ると、小六はじきに六畳へ這はい入つた。宗助はまた炬燵こたつへ歸つた。しばらくして御米も足を温ぬくめに來た。そうして次の土曜か日曜には坂井へ行つて、一つ屏風を見て來たらしいだろうと云うような事を話し合つた。

次の日曜になると、宗助は例の通り一週いっぺんに返かへりの樂らく寝ねを貪らほつたため、午ひるま前半日を

とうとう空に潰くづしてしまった。御米はまた頭が重いか云つて、火鉢ひばちの縁ふちに倚よりかかつて、何をするのも懶ものうそうに見えた。こんな時に六畳むつ畳が空あいていけば、朝からでも引込む場所があるのにも思うと、宗助は小六に六畳をあてがった事が、間接に御米の避難場を取り上げたと同じ結果に陥おちるので、ことに済まないような気がした。

心持が悪ければ、座敷へ床を敷いて寝たら好かろうと注意しても、御米は遠慮して容易に応じなかつた。それではまた炬燵こしらでも拵こしらえたらどうだ、自分も当るからと云つて、とうとう櫓やぐらと掛蒲団かけぶとんを清きよに云いつけて、座敷へ運ばした。

小六は宗助が起きる少し前に、どこかへ出て行つて、今朝けさは顔さえ見せなかつた。宗助は御米に向つて別段その行先を聞き糺ただしもしなかつた。この頃では小六に關係した事を云い出して、御米にその返事をさせるのが、氣の毒になつて来た。御米の方から、進んで弟の讒訴ざんそでもするようだと、叱るにしろ、慰さめるにしろ、かえつて始末が好いと考える時ひるもあつた。

午ひるになつても御米は炬燵から出なかつた。宗助はいつそ静かに寝かしておく方が身体からだのためよかろうと思つたので、そつと台所へ出て、清にちよつと上の坂井まで行つてくるからと告げて、不断着の上へ、袂たもとの出る短いインヴァネスを纏まとつて表へ出た。

今まで陰気な室へやにいた所せ為いか、通とへ来ると急にからりと気が晴れた。肌の筋肉が寒い風に抵抗して、一時に緊縮するような冬の心持の鋭どく出るうちに、ある快感を覚えたので、宗助は御米もあ家うちにばかり置いては善よくない、氣候が好くなつたら、ちと戸外の空気を呼吸させるようにしてやらなくては毒だと思ひながら歩いた。

坂井の家の門を入つたら、玄関と勝手口の仕切になつてゐる生垣いけがきの目に、冬に似合わないいぼつとした赤いものが見えた。傍そばへ寄つてわざわざ検しらべると、それは人形に掛ける小さい夜具であつた。細い竹を袖そでに通して、落ちないように、扇骨かなめ木の枝に寄せ掛けた手際てぎわが、いかにも女の子の所作しよさらしく殊しゆしよ勝しょうに思われた。こう云う悪戯いたずらをする年頃の娘は固もとよりの事、子供と云う子供を育て上げた経験のない宗助は、この小さい赤い夜具の尋常に日に干してある有様をしばらく立つて眺ながめていた。そうして二十年も昔に父母が、死んだ妹いものために飾つた、赤い雛段ひなだんと五人囃ごにんばやしと、模様的美くしい干菓子と、それから甘いようにで辛からい白酒を思い出した。

坂井の主人は在宅ではあつたけれども、食事中だと云うので、しばらく待たせられた。宗助は座に着くや否や、隣の室へやで小さい夜具を干した人達の騒ぐ声を耳にした。下女が茶を運ぶために襖ふすまを開けると、襖の影から大きな眼が四つほどすでに宗助を覗のぞいていた。火

鉢を持つて出ると、その後からまた違った顔が見えた。始めてのせいか、襖の開閉のたびに出る顔がことごとく違つていて、子供の数が何人あるか分らないように思われた。ようやく下女が退がりきりに退がると、今度は誰だか唐紙を一寸ほど細目に開けて、黒い光る眼だけをその間から出した。宗助も面白くなつて、黙つて手招ぎをして見た。すると唐紙をぴたりと閉て、向う側で三四人が声を合して笑い出した。

やがて一人の女の子が、

「よう、御姉様またいつものように叔母さんごっこしましょうよ」と言い出した。すると姉らしいのが、

「ええ、今日は西洋の叔母さんごっこよ。東作さんは御父さまだからパパで、雪子さんは御母さまだからママつて云うのよ。よくつて」と説明した。その時また別の声で、

「おかしいわね。ママだつて」と云つて嬉しそうに笑つたものがあつた。

「私それでもいつも御祖母さまなのよ。御祖母さまの西洋の名がなくっちゃいけないわねえ。御祖母さまは何て云うの」と聞いたものもあつた。

「御祖母さまはやつぱりババでいいでしょう」と姉がまた説明した。

それから当分の間は、御免下さいましたの、どちらからいらつしやいましたのと盛に挨拶

拶いさつの言葉が交換されていた。その間にはちりんちりと云う電話の仮色こわいろも交った。すべてが宗助には陽気で珍らしく聞えた。

そこへ奥の方から足音がして、主人がこつちへ出て来たらしかつたが、次の間へ入るや否や、

「さあ、御前達はここで騒ぐんじやない。あつちへ行つておいで。御客さまだから」と制した。その時、誰だかすぐに、

「厭いやだよ。御父おとつちやんべい。大きい御馬買つてくれなくつちや、あつちへ行かないよ」と答えた。声は小さい男の子の声であった。年が行かないためか、舌がよく回らないので、抗弁のしようがいかにも億劫おっくうで手間がかかった。宗助はそこを特に面白く思った。

主人が席に着いて、長い間待たした失礼を詫わびている間に、子供は遠くへ行つてしまつた。

「大変御賑おにぎやかで結構です」と宗助が今自分の感じた通を述べると、主人はそれを愛あいぎよ嬌うと受取つたものと見えて、

「いや御覧のごとく乱雑な有様で」と言訳らしい返事をしたが、それを緒いとくちに、子供の世話うちの焼けて、夥おびただしく手のかかる事などをいろいろ宗助に話して聞かした。その中で綺麗きれいな

支那製の花籃はなかごのなかへ炭団たどんを一杯盛もつて床の間に飾かつたと云う滑稽こっけいと、主人の編上の靴くつのなかへ水を汲み込んで、金魚を放したと云う悪戯いたずらが、宗助には大變耳新みみあらたしかった。しかし、女の子が多いので服装に物が要いるとか、二週間も旅行して帰かえつてくると、急にみんなの背が一寸いっすんずつも伸びているので、何だか後うしろから追いつかれるような心持がするとか、もう少しすると、嫁入の支度で忙殺ぼうさつされるのみならず、きつと貧殺ひんさつされるだろうとか云う話になると、子供のない宗助の耳にはそれほどの同情も起し得なかつた。かえつて主人が口で子供を煩冗うるさがる割に、少しもそれを苦にする様子の、顔にも態度にも見えないのを羨うらやましく思つた。

好い加減な頃を見計みはからつて宗助は、せんだつて話のあつた屏風びやうぶをちよつと見せて貰もらえまいかと、主人に申し出た。主人はさつそく引き受けて、ぱちぱちと手を鳴らして、召使めいしを呼んだが、蔵くらの中うちにしまつてあるのを取り出して来るように命じた。そうして宗助の方を向いて、

「つい二三日前までそこへ立てておいたのですが、例の子供が面白半分おもしろ半分にわざと屏風の影へ集まつて、いろいろな悪戯いたずらをするものですから、傷でもつけられちゃ大變だと思つてしまひ込んでしまいました」と云つた。

宗助は主人のこの言葉を聞いた時、今更手数てかすをかけて、屏風を見せて貰うのが、気の毒にもなり、また面倒にもなった。実を云うと彼の好奇心は、それほど強くなかったのである。なるほどいったん他の所有ひとに帰したものは、たとい元が自分のであったにしろ、無かつたにしろ、そこを突き留めたところで、実際上には何の効果もない話に違なかつた。

けれども、屏風は宗助の申し出た通り、間もなく奥から縁伝いに運び出されて、彼の眼の前に現れた。そうしてそれが予想通りついこの間まで自分の座敷に立ててあつた物であつた。この事実を発見した時、宗助の頭には、これと云つて大した感動も起らなかつた。ただ自分が今坐っている畳の色や、天井の柱目まさめや、床の置物や、襖ふすまの模様などの中に、この屏風を立てて見て、それに、召使が二人がかりで、蔵の中から大事そうに取り出して来たと云う所作しよさを付け加えて考えると、自分が持っていた時よりは、たしかに十倍以上貴たつとい品のように眺めながられただけであつた。彼は即座に云うべき言葉を見出し得なかつたので、いたずらに、見慣れたものの上に、さらに新らしくもない眼を据すえていた。

主人は宗助をもつてある程度の鑑賞家と誤解した。立ちながら屏風の縁ふちへ手を掛けて、宗助の面おもてと屏風の面とを比較していたが、宗助が容易に批評を下さないので、

「これは素性すじょうのたしかなものです。出が出ですからね」と云つた。宗助は、ただ

「なるほど」と云つた。

主人はやがて宗助の後へ回つて来て、指でそこを指しながら、品評やら説明やうした。その中には、さすが御大名だけあつて、好い絵の具を惜気もなく使うのがこの画家の特色だから、色がいかにもみごとであると言うような、宗助には耳新らしいけれども、普通一般に知れ渡つた事もだいぶ交つていた。

宗助は好い加減な頃を見計らつて、丁寧ていねいに礼を述べて元の席に復した。主人も蒲団ふとんの上上に直つた。そうして、今度は野路のじや空云々という題句やら書体やらについて語り出した。宗助から見ると、主人は書にも俳句にも多くの興味を有つていた。いつの間にこれほどの知識を頭の中へ貯たくわえ得らるかと思ふくらい、すべてに心得のある男らしく思われた。宗助は己おのれを恥じて、なるべく物数ものかずを云わないようにして、ただ向うの話だけに耳を借す事を力つとめた。

主人は客がこの方面の興味に乏しい様子を見て、再び話を画えの方へ戻した。碌ろくなものはないけれども、望ならば所蔵の画帖がしよや幅物を見せてもいいと親切に申し出した。宗助はせつかくの好意を辞退しない訳に行かなかつた。その代りに、失礼ですがと前置をして、主人がこの屏風を手に入れるについて、どれほどの金額を払つたかを尋ねた。

「まあ掘出し物ですね。八十円で買いました」と主人はすぐ答えた。

宗助は主人の前に坐つて、この屏風に関するいっさいの事を白しようか、しまいかと思案したが、ふと打ち明けるのも一興だろうと心づいて、とうとう実はこれこれだと、今までの顛末てんまつを詳しく話し出した。主人は時々へえ、へえと驚ろいたような言葉を挟はさんで聞いていたが、しまいに、

「じゃあなたは別に書画が好きで、見にいらした訳でもないんですね」と自分の誤解を、さも面白い経験でもしたように笑い出した。同時に、そう云う訳なら、自分が直しかに宗助から相当の値で譲つて貰えばよかつたに、惜しい事をしたと云つた。最後に横町の道具屋をひどく罵ののしつて、怪けしからん奴やつだと云つた。

宗助と坂井とはこれからだいぶ親しくなつた。

十

佐伯さいえきの叔母も安之助やすのすけもその後とんと宗助そうすけの宅うちへは見えなかつた。宗助は固もとより翹こうじ町まちへ行く余暇あまを有もたなかつた。またそれだけの興味もなかつた。親類とは云いながら、

別々の日が二人の家を照らしていた。

ただ小六ころうくだけが時々話しに出かける様子であったが、これとても、そう繁しげしげ々足を運ぶ訳でもないらしかつた。それに彼は帰つて来て、叔母の家の消息をほとんど御米およねに語らないのを常としておつた。御米はこれを故意こいから出る小六の仕打かとも疑うたぐつた。しかし自分が佐伯に対して特別の利害を感じない以上、御米は叔母の動静を耳にしない方を、かえつて喜こんだ。

それでも時々は、先方さきの様子を、小六と兄の対話から聞き込む事もあつた。一週間ほど前に、小六は兄に、安之助がまた新發明の応用に苦心している話をした。それは印氣インキの助けを借らないで、鮮明な印刷物を捺こしらえるとか云う、ちよつと聞くとすこぶる重宝な器械についてであつた。話題の性質から云つても、自分とは全く利害の交渉のないむずかしい事なので、御米は例の通り黙つて口を出さずにいたが、宗助は男だけに幾分か好奇心が動いたと見えて、どうして印氣を使わずに印刷ができるかなどと問ただい糺ただしていた。

専門上の知識のない小六が、精密な返答をし得るはずは無論なかつた。彼はただ安之助から聞いたままを、覚えている限り念を入れて説明した。この印刷術は近來英国で發明になつたもので、根本的にいうとやはり電氣の利用に過ぎなかつた。電氣の一極を活字と結

びつけておいて、他の一極を紙に通じて、その紙を活字の上へ圧おしつけさえすれば、すぐできるのだと小六が云った。色は普通黒であるが、手加減しだいで赤にも青にもなるから色刷などの場合には、絵の具を乾かす時間が省はぶけるだけでも大変重宝で、これを新聞に応用すれば、印インキ気や印気ロールの費ついでを節約する上に、全体から云って、少くとも従来の四分の一の手数がなくなる点から見ても、前途は非常に有望な事業であると、小六はまた安之助の話した通りを繰り返した。そうしてその有望な前途を、安之助がすでに手の中うちに握つたかのごとき口こうき気であった。かつその多望な安之助の未来のなかには、同じく多望な自分の影が、含まれているように、眼を輝やかした。その時宗助はいつもの調子で、むしろ穏やかに、弟の云う事を聞いていたが、聞いてしまった後あとでも、別にこれという眼立つた批評は加えなかった。実際こんな発明は、宗助から見ると、本当のようでもあり、また嘘のようでもあり、いよいよそれが世間に行われるまでは、賛成も反対もできかねたのである。「じゃ鯉かつおぶね船ねの方はもう止したの」と、今まで黙っていた御米が、この時始めて口を出した。

「止したんじゃないんですが、あの方は費用が随分かかるので、いくら便利でも、そう誰も彼こしらも抱こえる訳に行かないんだそうです」と小六が答えた。小六は幾分か安之助の利害を

代表しているような口振であつた。それから三人の間に、しばらく談話が交換されたが、しまいに、

「やっぱり何をしたつて、そう旨く行くもんじやあるまいよ」と云つた宗助の言葉と、

「坂井さんみたように、御金があつて遊んでいるのが一番いいわね」と云つた御米の言葉を聞いて、小六はまた自分の部屋へ歸つて行つた。

こう云う機会に、佐伯の消息は折々夫婦の耳へ洩れる事はあるが、そのほかには、全く何をして暮らしているか、互に知らないで過す月日が多かつた。

ある時御米は宗助にこんな問を掛けた。

「小六さんは、安さんの所へ行くたんびに、小遣でも貰つて来るんでしうか」

今まで小六について、それほどの注意を払つていなかった宗助は、突然この問に逢つて、すぐ、「なぜ」と聞き返した。御米はしばらく逡巡つた末、

「だって、この頃よく御酒を呑んで歸つて来る事があるのよ」と注意した。

「安さんが例の発明や、金儲けの話をするとき、その聞き賃に奢るのかも知れない」と云つて宗助は笑つていた。会話はそれなりでつい発展せずになつた。

越えて三日目の夕方に、小六はまた飯時を外して歸つて来なかつた。しばらく待ち合

せていたが、宗助はついに空腹だとか云い出して、ちよつと湯にでも行つて時間を延ばしたらという御米の小六に対する気兼きがねに頓とんじやく着くなく、食事を始めた。その時御米は夫に、

「小六さんに御酒を止やめるように、あなたから云つちやいけなくつて」と切り出した。

「そんなに意見しなければならぬほど飲むのか」と宗助は少し案外な顔をした。

御米はそれほどでもない、弁護しなければならなかつた。けれども実際は誰もいない昼間のうちなどに、あまり顔を赤くして歸つて来られるのが、不安だつたのである。宗助はそれなり放つておいた。しかし腹の中では、はたして御米の云うごとく、どこかで金を借りるか、貰うかして、それほど好きもしないものを、わざと飲むのではなからうかと疑ぐつた。

そのうち年がだんだん片寄つて、夜が世界の三分の二を領りやうするよう押しつまつて来た。風が毎日吹いた。その音を聞いているだけでも生活ライフに陰気な響を与えた。小六はどうしても、六畳に籠こもつて、一日を送るに堪たえなかつた。落ちついて考えれば考えるほど、頭あたまが淋さびしくつて、いたたまれなくなるばかりであつた。茶の間へ出て嫂あによめと話すのはなお厭いやであつた。やむを得ず外へ出た。そうして友達の宅うちをぐるぐる回つて歩いた。友達も始のうちは、平生いづもの小六に対するように、若い学生せいがくのしたがる面白い話をいくらでもした。けれども小

六はそう云う話が尽きても、まだやつて来た。それでしまいには、友達が、小六は、退屈の余りに訪問をして、談話の復習に耽ふけるものだと評した。たまには学校の下した読よみやら研究やりに追われている多忙の身だと云う風もして見せた。小六は友達からそう呑のん気きな怠たけもののように取り扱われるのを、大変不愉快に感じた。けれども宅に落ちついては、読書も思索も、まるでできなかつた。要するに彼ぐらいの年輩の青年が、一人前の人間になる階か梯いとして、修おそむべき事、力つとむべき事には、内部の動揺やら、外部の束縛やらで、いつさい手が着かなかつたのである。

それでも冷たい雨が横に降つたり、雪ゆき融とけの道がはげしく泥ぬかつたりする時は、着物を濡ぬらさなければならず、足袋たびの泥を乾かさなければならぬ面倒があるので、いかな小六も時によると、外出を見合せる事があつた。そう云う日には、實際困却すると見えて、時々六畳から出て来て、のそりと火鉢そばの傍へ坐つて、茶などを注ついで飲んだ。そうしてそこに御米でもいると、世間話の一つや二つはしらないとも限らなかつた。

「小六さん御酒好き」と御米が聞いた事があつた。

「もう直御正月しきね。あなた御雑煮おぞうにいくつ上がつて」と聞いた事もあつた。

そう云う場合が度たび重かさなるに連つれて、二人の間は少しずつ近寄る事ができた。しまいに

は、姉さんちよつとここを縫つて下さいと、小六の方から進んで、御米に物を頼むようになつた。そうして御米が緋の羽織を受取つて、袖口の綻を繕つている間、小六は何にもせずにそこへ坐つて、御米の手先を見つめていた。これが夫だと、いつまでも黙つて針を動かすが、御米の例であつたが、相手が小六の時には、そう投遣にできないのが、また御米の性質であつた。だからそんな時には力めても話をした。話の題目で、ややともすると小六の口に宿りたがるものは、彼の未来をどうしたら好かろうと云う心配であつた。「だつて小六さんなんか、まだ若いじゃありませんか。何をしたつてこれからだわ。そりや兄さんの事よ。そう悲観してもいいのは」

御米は二度ばかりこういう慰め方をした。三度目には、

「来年になれば、安さんの方でどうか都合して上げるつて受合つて下すつたんじゃなくつて」と聞いた。小六はその時不慥な表情をして、

「そりや安さんの計画が、口でいう通り旨く行けば訳はないんでしようが、だんだん考えると、何だか少し当にならないような気がし出してね。鯉船もあんまり儲からないようだから」と云つた。御米は小六の懨然としてゐる姿を見て、それを時々酒気を帯びて帰つて来る、どこかに殺気を含んだ、しかも何が癩に障るんだか訳が分らないでいてはなは

だ不平らしい小六と比較すると、心の中で気の毒にもあり、またおかしくもあつた。その時は、

「本当にね。兄さんにさえ御金があると、どうでもして上げる事ができるんだけれども」と、御世辞でも何でもない、同情の意を表した。

その夕暮であつたか、小六はまた寒い身体を外套に包んで出て行つたが、八時過に帰つて来て、兄夫婦の前で、袂から白い細長い袋を出して、寒いから蕎麦搔を拵らえて食おうと思つて、佐伯へ行つた帰りに買つて来たと思つた。そうして御米が湯を沸かしているうちに、煮出しを拵えるとか云つて、しきりに鰹節を搔いた。

その時宗助夫婦は、最近の消息として、安之助の結婚がとうとう春まで延びた事を聞いた。この縁談は安之助が学校を卒業すると間もなく起つたもので、小六が房州から帰つて、叔母に学資の供給を断られる時分には、もうだいたい話が進んでいたのである。正式の通知が来ないので、いつ纏つたか、宗助はまるで知らなかつたが、ただ折々佐伯へ行つては、何か聞いて来る小六を通じてのみ、彼は年内に式を挙げるはずの新夫婦を予想した。その他には、嫁の里がある会社員で、有福な生計をしている事と、その学校が女学館であるという事と、兄弟がたくさんあると云う事だけを、同じく小六を通じて耳にした。写真にせ

よ顔を知ってるのは小六ばかりであった。

「好い器量？」と御米が聞いた事がある。

「まあ好い方でしよう」と小六が答えた事がある。

その晩はなぜ暮のうちに式を済まさないかと云うのが、蕎麦搔のでき上る間、三人の話題になった。御米は方位でも悪いのだろうと臆測した。宗助は押しつまって日がないからだろうと考えた。独り小六だけが、

「やっぱり物質的の必要かららしいです。先が何でもよほど派出な家なんで、叔母さんの方でもそう単簡に済まされないんでしよう」といつにない世帯染みた事を云った。

十一

御米のぶらぶらし出したのは、秋も半ば過ぎて、紅葉の赤黒く縮れる頃であった。京都にいた時分は別として、広島でも福岡でも、あまり健康な月日を送った経験のない御米は、この点に掛けると、東京へ帰ってからも、やはり仕合せとは云えなかった。この女には生れ故郷の水が、性に合わないのだろうと、疑ぐれば疑ぐられるくらい、御米は一時悩んだ

事もあつた。

近頃はそれがだんだん落ちついて来て、宗助そうすけの気を揉む機会ばあいも、年に幾度と勘定かんじようができるくらい少なくなつたから、宗助は役所の出入でいりに、御米はまた夫の留守の立居たちいに、等しく安心して時間を過す事ができたのである。だからことしの秋が暮れて、薄霜しもを渡る風が、つらく肌を吹く時分になつて、また少し心持が悪くなり出しても、御米はそれほど苦にもならなかつた。始のうちは宗助にさえ知らせなかつた。宗助が見つけて、医者に掛かれと勧めても、容易に掛からなかつた。

そこへ小六ころうくが引越して来た。宗助はその頃の御米を観察して、体質の状態やら、精神の模様やら、夫おつとだけによく知つていたから、なるべくは、人数ひとかずを殖ふやして宅うちの中を混雑ごたつさせたくないとは思つたが、事情やむを得ないので、成るがままにしておくよりほかに、手段の講じようもなかつた。ただ口の先で、なるべく安静にしていなくてはいけないと云う矛盾した助言は与えた。御米は微笑して、

「大丈夫よ」と云つた。この答を得た時、宗助はなおの事安心ができなくなつた。ところが不思議にも、御米の気分は、小六が引越して来てから、ずっと引立つた。自分に責任の少しでも加わつたため、心が緊張したものと見えて、かえつて平生よりは、かいがいしく

夫や小六の世話をした。小六にはそれがまるで通じなかつたが、宗助から見ると、御米が在来よりどれほど力めていたかがよく解つた。宗助は心のうちで、このまめやかな細君に新しい感謝の念を抱くと同時に、こう気を張り過ぎる結果が、一度に身体に障るような騒ぎでも引き起してくれなければいいかと心配した。

不幸にも、この心配が暮の二十日過になつて、突然事実になりかけたので、宗助は予期の恐怖に火が点いたように、いたく狼狽した。その日は判然土に映らない空が、朝から重なり合つて、重い寒さが終日人の頭を抑えていた。御米は前の晩にまた寝られないで、休ませ損なつた頭を抱えながら、辛抱して働らき出したが、起つたり動いたりするたびに、多少脳に應える苦痛はあつても、比較的明るい外界の刺戟に紛れたためか、じつと寝ていながら、頭だけが冴えて痛むよりは、かえつて凌ぎやすかつた。とかくして夫を送り出すまでは、しばらくしたらまたいつものように折り合つて来る事と思つて我慢していた。ところが宗助がいなくなつて、自分の義務に一段落が着いたという氣の弛みが出ると等しく、濁つた天氣がそろそろ御米の頭を攻め始めた。空を見ると凍っているようであるし、家の中にいると、陰気な障子の紙を透して、寒さが浸み込んで来るかと思われくらしいだのに、御米の頭はしきりに熱つて来た。仕方がないから、今朝あげた蒲団をまた出

して来て、座敷へ延べたまま横になった。それでも堪えられないので、清に濡手拭を絞らして頭へ乗せた。それが直生温くなるので、枕元に金盥を取り寄せて時々絞りを易えた。

午までこんな姑息手段で断えず額を冷やして見たが、いつこうはかばかしい験もないので、御米は小六のために、わざわざ起きて、いっしょに食事をする根気もなかった。清にいいつけて膳立をさせて、それを小六に薦めさせたまま、自分はやはり床を離れずにいた。そうして、平生夫のする柔かい括枕を持って来て貰って、堅いのと取り替えた。御米は髪の毛の損れるのを、女らしく苦にする勇氣にさえ乏しかったのである。

小六は六畳から出て来て、ちよつと襖を開けて、御米の姿を覗き込んだが、御米が半ば床の間の方を向いて、眼を塞いでいたので、寝ついたとも思つたものか、一言の口も利かずに、またそつと襖を閉めた。そうして、たった一人大きな食卓を専領して、始めからさらさらと茶漬を掻き込む音をさせた。

二時頃になつて、御米はやつとの事、とろとろと眠つたが、眼が覚めたら額を捲いた濡れ手拭がほとんど乾くくらい暖かになつていた。その代り頭の方は少し楽になつた。ただ肩から背筋へ掛けて、全体に重苦しいような感じが新らしく加わつた。御米は何でも精を

つけなくては毒だという考から、一人で起きて遅い午飯ひるはんを軽く食べた。

「御気分はいかがでございます」と清が御給仕をしながら、しきりに聞いた。御米はだいぶいいようだったので、床を上げて貰って、火鉢に倚よつたなり、宗助の帰りを待ち受けた。

宗助は例刻に帰って来た。神田の通りで、門かどなみ並旗を立てて、もう暮の売出しを始めた

事だの、勸工場かんこうばで紅白の幕を張って楽隊に景気をつけさしている事だのを話した末、

「賑にぎやかだよ。ちよつと行って御覧。なに電車に乗って行けば訳はない」と勧めた。そうして自分は寒さに腐蝕ふしょくされたように赤い顔をしていた。

御米はこう宗助から労いたわられた時、何だか自分の身体の悪い事を訴たえるに忍びない心持がした。実際またそれほど苦しくもなかった。それでいつもの通り何気なにげない顔をして、夫に着物を着換えさしたり、洋服を畳んだりして夜よに入った。

ところが九時近くになって、突然宗助に向って、少し加減が悪いから先へ寝たいと云い出した。今まで平生の通り機嫌よく話していただけに、宗助はこの言葉を聞いてちよつと驚ろいたが、大した事でもないと言ふ御米の保証に、ようやく安心してすぐ休む支度をさせた。

御米が床とこへ這入はいつてから、約二十分ばかりの間、宗助は耳の傍はたに鉄瓶てつびんの音を聞きなが

ら、静な夜を丸心の洋灯に照らしていた。彼は来年度に一般官吏に増俸の沙汰があるという評判を思い浮べた。またその前に改革か淘汰が行われるに違ないという噂に思い及んだ。そうして自分はどっちの方へ編入されるのだろうかと疑った。彼は自分を東京へ呼んでくれた杉原が、今もなお課長として本省にいないのを遺憾とした。彼は東京へ移つてから不思議とまだ病気をした事がなかった。したがってまだ欠勤届を出した事がなかった。学校を途中でやめたなり、本はほとんど読まないのだから、学問は人並にできないが、役所でやる仕事に差支えるほどの頭脳ではなかった。

彼はいろいろな事情を綜合して考えた上、まあ大丈夫だろうと腹の中できめた。そうして爪の先で軽く鉄瓶の縁を敲いた。その時座敷で、

「あなたちよつと」と云う御米の苦しそうな声が聞えたので、我知らず立ち上がった。座敷へ来て見ると、御米は眉を寄せて、右の手で自分の肩を抑えながら、胸まで蒲団の外へ乗り出していた。宗助はほとんど器械的に、同じ所へ手を出した。そうして御米の抑えている上から、固く骨の角を攫んだ。

「もう少し後の方」と御米が訴えるように云った。宗助の手が御米の思う所へ落ちつくまでには、二度も三度もそここの位置を易えなければならなかった。指で圧してみると、

頸くびと肩の継目の少し背中へ寄った局部が、石のように凝こっていた。御米は男の力いっぱい
にそれを抑えてくれと頼んだ。宗助の額からは汗が煮染にじみ出した。それでも御米の満足す
るほどは力が出なかつた。

宗助は昔の言葉で早打はやうち肩かたというのを覚えていた。小さい時祖父じじいから聞いた話に、ある
侍さむらいが馬に乗つてどこかへ行く途中で、急にこの早打はやうち肩かたに冒おかされたので、すぐ馬から飛ん
で下りて、たちまち小柄こづかを抜くや否いなや、肩先を切つて血を出したため、危うい命を取り留
めたというのがあつたが、その話が今明らかに記憶の焼しょう点てんに浮んで出た。その時宗助
はこれはならんと思つた。けれどもはたして刃物を用いて、肩の肉を突いていいものやら、
悪いものやら、決しかねた。

御米はいつになく逆上のぼせて、耳まで赤くしていた。頭が熱いかと聞くと苦しそうに熱い
と答えた。宗助は大きな声を出して清に氷こおり囊ぶくろへ冷たい水を入れて来いと命じた。氷囊
があいにく無かつたので、清は朝の通り金かな盥だらに手てぬぐい拭ぬぐを浸ひつけて持ってきた。清が頭を
冷やしているうち、宗助はやはり精いっぱい肩を抑えていた。時々少しはいいかと聞いて
も、御米は微かすかに苦しいと答えるだけであつた。宗助は全く心細くなつた。思い切つて、
自分で馳かけ出して医者むかいを迎むかに行こうとしたが、後あとが心配で一足も表へ出る気にはなれな

った。

「清、御前急いで通りへ行つて、氷囊を買つて医者を呼んで来い。まだ早いから起きてるだろう」

清はすぐ立つて茶の間の時計を見て、

「九時十五分でございます」と云いながら、それなり勝手口へ回つて、ごそごそ下駄を探しているところへ、旨い具合に外から小六が帰つて来た。例の通り兄には挨拶もしないで、自分の部屋へ這入ろうとするのを、宗助はおい小六と烈しく呼び止めた。小六は茶の間で少し躊躇していたが、兄からまた二声ほど続けざまに大きな声を掛けられたので、やむを得ず低い返事をして、襖から顔を出した。その顔は酒気のまだ醒めない赤い色を眼の縁に帯びていた。部屋の中を覗き込んで、始めて吃驚した様子で、

「どうかなすつたんですか」と酔が一時に去つたような表情をした。

宗助は清に命じた通りを、小六に繰り返して、早くしてくれと急ぎ立てた。小六は外套も脱がずに、すぐ玄関へ取つて返した。

「兄さん、医者まで行くのは急いでも時間が掛かりますから、坂井さんの電話を借りて、すぐ来るように頼みましょう」

「ああ。そうしてくれ」と宗助は答えた。そうして小六の帰る間、清に何返となく金盥の水を易えさしては、一生懸命に御米の肩を押しついたり、揉んだりしてみた。御米の苦しむのを、何もせずただ見ているに堪えなかつたから、こうして自分の気を紛らしたのである。

この時の宗助に取つて、医者の方の来るのを今か今かと待ち受ける心ほど苛いものはなかつた。彼は御米の肩を揉みながらも、絶えず表の物音に気を配つた。

ようやく医者が来たときは、始めて夜が明けたような心持がした。医者は商売柄だけあって、少しも狼狽えた様子を見せなかつた。小さい折靴を脇に引き付けて、落ちつき払つた態度で、慢性病の患者でも取り扱うように緩くした診察をした。その逼らない顔色を傍で見ていたせいとか、わくわくした宗助の胸もようやく治まつた。

医者は芥子を局部へ貼る事と、足を湿布で温める事と、それから頭を氷で冷す事とを、応急手段として宗助に注意した。そうして自分で芥子を搔いて、御米の肩から頸の根へ貼りつけてくれた。湿布は清と小六とで受持つた。宗助は手拭の上から氷嚢を額の上に当てがった。

とかくするうち約一時間も経つた。医者はしばらく経過を見て行こうと云つて、それま

で御米の枕元に坐つていた。世間話も折々は交えたが、おおかたは無言のまま二人共に御米の容体を見守る事が多かった。夜は例のごとく静に更けた。

「だいぶ冷えますな」と医者云つた。宗助は氣の毒になつたので、あとの注意をよく聞いた上、遠慮なく引き取つてくれるようにと頼んだ。その時御米は先刻よりはだいぶ軽快になつていたからである。

「もう大丈夫でしょう。頓服を一回上げますから今夜飲んで御覽なさい。多分寝られるだろうと思います」と云つて医者は歸つた。小六はすぐその後を追つて出て行つた。

小六が薬取に行つた間に、御米は

「もう何時」と云いながら、枕元の宗助を見上げた。宵とは違つて頬から血が退いて、洋灯に照らされた所が、ことに蒼白く映つた。宗助は黒い毛の乱れたせいだろうと思つて、わざわざ鬢の毛を掻き上げてやつた。そうして、

「少しはいいだろう」と聞いた。

「ええよつぽど楽になつたわ」と御米はいつもの通り微笑を洩らした。御米は大抵苦しい場合でも、宗助に微笑を見せる事を忘れなかつた。茶の間では、清が突伏したまま黙をかいていた。

「清を寝かしてやって下さい」と御米が宗助に頼んだ。

小六が薬取りから帰って来て、医者の云いつけ通り服薬を済ましたのは、もうかれこれ十二時近くであつた。それから二十分と経たないうちに、病人はすやすや寝入つた。

「好い塩梅だ」と宗助が御米の顔を見ながら云つた。小六もしばらく嫂あによめの様子を見守つていたが、

「もう大丈夫でしょう」と答えた。二人は氷嚢を額こめからおろした。

やがて小六は自分の部屋へ這入る。宗助は御米の傍へ床を延べていつものごとく寝た。

五六時間の後冬の夜は錐きりのような霜しもを挟ささんで、からりと明け渡つた。それから一時間すると、大地を染める太陽が、遮さえぎるもののない蒼空あおぞらに憚はばりなく上つた。御米はまだすやすや寝ていた。

そのうち朝餉あさげも済んで、出勤の時刻がようやく近く近づいた。けれども御米は眠りから覚さめる気色けしきもなかつた。宗助は枕辺まくらべに曲こんで、深い寝息を聞きながら、役所へ行こうか休もうかと考えた。

朝の内は役所で常のごとく事務を執つていたが、折々昨夕の光景が眼に浮ぶに連れて、自然御米の病気が氣に罹るので、仕事は思うように運ばなかつた。時には変な間違をさえた。宗助は午になるのを待つて、思い切つて宅へ歸つて来た。

電車の中では、御米の眼がいつ頃覚めたるう、覚めた後は心持がだいぶ好くなつたらう、発作ももう起る氣遣なかうと、すべて悪くない想像ばかり思い浮べた。いつもと違つて、乗客の非常に少ない時間に乗り合わせたので、宗助は周囲の刺戟に氣を使う必要がほとんどなかつた。それで自由に頭の中へ現われる画を何枚となく眺めた。そのうちに、電車は終点に来た。

宅の門口まで来ると、家の中はひっそりして、誰もいないようであつた。格子を開けて、靴を脱いで、玄関に上がつても、出て来るものはなかつた。宗助はいつものように縁側から茶の間へ行かずに、すぐ取付の襖を開けて、御米の寝ている座敷へ這入つた。見ると、御米は依然として寝ていた。枕元の朱塗の盆に散薬の袋と洋杯が載つていて、その洋杯の水が半分残つているところも朝と同じであつた。頭を床の間の方へ向けて、左の頬と芥子を貼つた襟元が少し見えるところも朝と同じであつた。呼吸よりほかに現実

世界と交通のないように思われる深い眠も朝見た通りであつた。すべてが今朝出掛に頭の中へ収めて行つた光景と少しも變つていなかつた。宗助は外套も脱がずに、上から曲んで、すすすういう御米の寢息をしばらく聞いていた。御米は容易に覚めそうにも見えなかつた。宗助は昨夕御米が散葉を飲んでから以後の時間を指を折つて勘定した。そうしてようやく不安の色を面に表わした。昨夕までは寝られないのが心配になつたが、こう前後不覺に長く寝るところを眼のあたりに見ると、寝る方が何かの異状ではないかと考え出した。

宗助は蒲団へ手を掛けて二三度軽く御米を揺振つた。御米の髪が括枕の上で、波を打つように動いたが、御米は依然としてすすすう寝ていた。宗助は御米を置いて、茶の間から台所へ出た。流し元の小桶の中に茶碗と塗椀が洗われないまま浸けてあつた。下女部屋を覗くと、清が自分の前に小さな膳を控えたなり、御櫃に倚りかかつて突伏していた。宗助はまた六畳の戸を引いて首を差し込んだ。そこには小六が掛蒲団を一枚頭から引被つて寝ていた。

宗助は一人で着物を着換えたが、脱ぎ捨てた洋服も、人手を借りずに自分で畳んで、押入にしまった。それから火鉢へ火を継いで、湯を沸かす用意をした。二三分は火鉢に持たれて考えていたが、やがて立ち上がつて、まず小六から起しにかかつた。次に清を起した。

二人とも驚ろいて飛び起きた。小六に御米の今朝から今までの様子を聞くと、実は余り眠いので、十一時半頃飯を食つて寝たのだが、それまでは御米もよく熟睡していたのだと云う。

「医者へ行つてね。昨夜の薬を戴いたいてから寝出して、今になつても眼が覚めませんが、差さしつかえないでしようかつて聞いて来てくれ」

「はあ」

小六は簡単な返事をして出て行つた。宗助はまた座敷へ来て御米の顔を熟視した。起してやらなくつては悪いような、また起しては身体からだへ障さわるような、分別ぶんべつのつかない感まどいを抱いだいて腕組をした。

間もなく小六が帰つて来て、医者はちようど往診に出かけるところであつた、訳を話したら、では今から一二軒寄つてすぐ行こうと答えた、と告げた。宗助は医者が見えるまで、こうして放つておいて構わないのかと小六に問い返したが、小六は医者が以上よりほかに何にも語らなかつたと云うだけなので、やむを得ず元のごとく枕まくら辺べにじつと坐つていた。そうして心うちの中で、医者も小六も不親切過ぎるように感じた。彼はその上昨夕ゆうべ御米を介抱のしている時に帰つて来た小六の顔を思い出して、なお不愉快になつた。小六が酒を呑む事

は、御米の注意で始めて知ったのであるが、その後気をつけて弟の様子をよく見ていると、なるほど何だか真面目でないとこころもあるようなので、いつかみっちり異見でもしなければなるまいくらいに考えてはいたが、面白くもない二人の顔を御米に見せるのが、気の毒なので、今日までわざと遠慮していたのである。

「云い出すなら御米の寝ている今である。今ならどんな気不味いことを双方で言い募つたつて、御米の神経に障る気遣はない」

ここまで考えついたけれども、知覚のない御米の顔を見ると、またその方が気がかりになつて、すぐにでも起したい心持がするので、つい決し兼てぐずぐずしていた。そこへようやく医者が来てくれた。

昨夕の折、靴をまた丁寧ていねいに傍へ引きつけて、緩ゆるくり巻煙草まきたばこを吹かしながら、宗助の云うことを、はあはあと聞いていたが、どれ拝見致しましょうと御米の方へ向き直つた。彼は普通の場合のように病人の脈を取つて、長い間自分の時計を見つめていた。それから黒い聴診器を心臓の上に当てた。それを丁寧にあちらこちらと動かした。最後に丸い穴の開いた反射鏡を出して、宗助に蠟燭ろうそくを点けてくれと云つた。宗助は蠟燭を持たないので、清らんぷに洋灯を点けさせた。医者は眠つている御米の眼を押し開けて、仔細しさいに反射鏡の光を覗まっげ

の奥に集めた。診察はそれで終った。

「少し薬が利き過ぎましたね」と云つて宗助の方へ向き直つたが、宗助の眼の色を見るや否や、すぐ、

「しかし御心配になる事はありません。こう云う場合に、もし悪い結果が起るとすると、きつと心臓か脳を冒すものですが、今拝見したところでは双方共異状は認められませんから」と説明してくれた。宗助はそれでようやく安心した。医者はまた自分の用いた眠り薬が比較的新しいもので、学理上、他の睡眠剤のように有害でない事や、またその効目が患者の体質に因つて、程度に大變な相違のある事などを語つて歸つた。歸るとき宗助は、「では寝られるだけ寝かしておいても差支ありませんか」と聞いたら、医者は用さえなければ別に起す必要もあるまいと答えた。

医者が歸つたあとで、宗助は急に空腹になつた。茶の間へ出ると、先刻掛けておいた鉄瓶がちんちん沸つていた。清を呼んで、膳を出せと命ずると、清は困つた顔つきをして、まだ何の用意もできていないと答えた。なるほど晩食には少し間があつた。宗助は楽々と火鉢の傍に胡坐を掻いて、大根の香の物を噛みながら湯漬を四杯ほどつづけざまに掻き込んだ。それから約三十分ほどしたら御米の眼がひとりでに覺めた。

十三

新年の頭を拵こしらえようという気になって、宗助そうすけは久し振に髪結床かみゆいどこの敷居まを跨またいだ。暮くのせい客きやくがだいぶ立て込んでるので、鋏はさみの音が二三カ所で、同時にちよきちよき鳴なった。この寒さを無理に乗り越して、一日も早く春に入ろうと焦慮あせるような表通の活動を、宗助は今見て来たばかりなので、その鋏の音が、いかにも忙せわしない響こゑとなつて彼の鼓膜こもを打うつた。

しばらく煖ストーブ炉はたの傍たはこで煙草たばこを吹かして待つている間に、宗助は自分と関係のない大きな世間の活動に否応なしに捲まき込まれて、やむを得ず年を越さなければならぬ人のごとくに感じた。正月を眼の前へ控えた彼は、實際これという新らしい希望もないのに、いたずらに周囲から誘いざなわれて、何だかざわざわした心持こころもちを抱いだいていたのである。

御米およねの発作ほつさはようやく落ちついた。今では平日いっものごとく外へ出ても、家うちの事がそれほど気にかからないぐらいになった。余所よそに比べると閑静な春の支度も、御米から云えば、年に一度の忙いそがしきには違ちがなかつたので、あるいはいつも通りの準備じゅんびさえ抜ぬいて、常とこよりも

簡単に年を越す覚悟をした宗助は、蘇生よみがえつたようにはつきりした妻さいの姿を見て、恐ろしい悲劇が一步遠退とほのいた時のごとくに、胸を撫なでおろした。しかしその悲劇がまたいついかなる形で、自分の家族を捕とらえに来るか分らないと云う、ぼんやりした掛念けねんが、折々彼の頭のなかに霧きりとなつてかかった。

年の暮に、事を好むとしか思われない世間の人が、故意わざと短い日を前へ押し出したがつて齷齪あくせくする様子を見ると、宗助はなおの事この茫漠ぼうぼくたる恐怖の念に襲おそわれた。成ろうことなら、自分だけは陰気な暗い師走しわすの中に一人残うちっていたい思さえ起つた。ようやく自分の番が来て、彼は冷たい鏡のうちに、自分の影を見出した時、ふとこの影は本来何者だろうと眺ながめた。首から下は真白な布に包まれて、自分の着ている着物の色も縞しまも全く見えなかつた。その時彼はまた床屋の亭主が飼かっている小鳥の籠かごが、鏡の奥に映うつっている事に気がついた。鳥が止とまり木の上ぎをちらりちらりと動いた。

頭にへ香においのする油を塗ぬられて、景氣のいい声を後うしろから掛かけられて、表へ出たときは、それでも清々せいせいした心持であつた。御米の勧め通り髪を刈きつた方が、結局つまり氣を新たにする効果があつたのを、冷たい空氣の中で、宗助は自覚した。

水道税の事でちよつと聞き合せる必要が生じたので、宗助は帰り路に坂井へ寄つた。下

女が出て来て、こちらへと云うから、いつもの座敷へ案内するかと思うと、そこを通り越して、茶の間へ導びいていった。すると茶の間の襖が二尺ばかり開いていて、中から三四人の笑い声が聞えた。坂井の家庭は相変らず陽気であった。

主人は光沢の好い長火鉢の向側に坐っていた。細君は火鉢を離れて、少し縁側の障子の方へ寄つて、やはりこちらを向いていた。主人の後に細長い黒い棹に嵌めた柱時計がかかつていた。時計の右が壁で、左が袋戸棚になつていた。その張交に石摺だの、俳画だの、扇の骨を抜いたものなどが見えた。

主人と細君のほかに、筒袖の揃いの模様の被布を着た女の子が二人肩を擦りつけ合つて坐っていた。片方は十二三で、片方は十ぐらに見えた。大きな眼を揃えて、襖の陰から入つて来た宗助の方を向いたが、二人の眼元にも口元にも、今笑つたばかりの影が、まだゆたかに残っていた。宗助は一応室の内を見回して、この親子のほかに、まだ一人妙な男が、一番入口に近い所に畏まっているのを見出した。

宗助は坐つて五分と立たないうちに、先刻の笑声は、この変な男と坂井の家族との間に取り換わされた問答から出る事を知つた。男は砂埃でざらつきそうな赤い毛と、日に焼けて生涯褪めつこない強い色を有つていた。瀬戸物の釦の着いた白木綿の襯衣を

着て、手織の硬い布子の襟から財布の紐みたような長い丸打をかけた様子は、滅多に東京などへ出る機会のない遠い山の国のものとしか受け取れなかつた。その上男はこの寒いのに膝小僧を少し出して、紺の落ちた小倉の帯の尻に差した手拭を抜いては鼻の下を擦つた。

「これは甲斐の国から反物を背負つてわざわざ東京まで出て来る男なんです」と坂井の主人が紹介すると、男は宗助の方を向いて、

「どうか旦那、一つ買つておくれ」と挨拶をした。

なるほど銘仙だの御召だの、白紬だのがそこら一面に取り散らしてあつた。宗助はこの男の形装や言葉遣のおかしい割に、立派な品物を背中へ乗せて歩行くのをむしろ不思議に思つた。主人の細君の説明によると、この織屋の住んでいる村は焼石ばかりで、米も粟も取れないから、やむを得ず桑を植えて蚕を飼うんだそうであるが、よほど貧しい所と見えて、柱時計を持っている家が一軒だけで、高等小学へ通う小供が三人しかないと話であつた。

「字の書けるものは、この人ぎりなんだそうですよ」と云つて細君は笑つた。すると織屋も、

「本当のこんだよ、奥さん。読み書き算筆さんびつのできるものは、おれよりほかにねえんだからね。全く非道ひどい所にや違ちがない」と真面目に細君の云う事を首肯うけがった。

織屋はいろいろの反物を主人や細君の前へ突きつけては、「買っておくれ」という言葉をしきりに繰り返した。そりや高いよいくらいくらに御負けなどと云われると、「値じやねえね」とか、「拝むからそれで買っておくれ」とか、「まあ目方を見ておくれ」とかすべて異様な田舎いなかびた答をした。そのたびに皆みんなが笑った。主人夫婦はまた閑ひまだと思えて、面白半分にいつまでも織屋を相手にした。

「織屋、御前ごぜんそうして荷を背負しよつて、外へ出て、時分どきになったら、やつぱり御膳ごぜんを食べるんだらうね」と細君が聞いた。

「飯を食わねえでいられるもんじやないよ。腹の減る事ちゆうたら」

「どんな所で食べるの」

「どんな所で食べるちゆうて、やつぱり茶屋で食うだね」

主人は笑いながら茶屋とは何だと聞いた。織屋は、飯を食わす所が茶屋だと答えた。それから東京へ出立でたてには飯が非常に旨うまいので、腹を据すえて食い出すと、大抵の宿屋は叶かなわぬい、三度三度食つちや気の毒だと云うような事を話して、また皆みんなを笑わわした。

織屋はしまいに撚糸よりいとの紬つむぎと、白紹しろろを一匹細君いっぴぎに売りつけた。宗助はこの押しつまつた暮に、夏の紹しろろを買う人を見て余裕よゆうのあるものはまた格別かくべつだと感じた。すると、主人が宗助に向つて、

「どうですあなたも、ついでに何か一つ。奥さんの不断着ふたんぎでも」と勧めた。細君もこう云う機会きかいに買つて置くと、幾割いくわりか値安ねやすに買える便宜べんぎを説いた。そうして、

「なに、御払おはらいはいつでもいいんです」と受合うけあつてくれた。宗助はどうとう御米ごまいのために銘仙めいせんを一反買いっぺんう事ことにした。主人はそれをさんざん値切ねぎりつて三円さんえんに負けさせた。

織屋は負けた後あとでまた、

「全く値じやねえね。泣きたくなるね」と云つたので、大勢おほしがまた一度いちどに笑つた。

織屋はどこへ行つてもこういう鄙ひなびた言葉ことばを使って通とほじているらしかった。毎日馴染なじみの家いへをぐるぐる回まわつて歩いているうちには、背中の荷かろがだんだん軽かろくなって、しまいに紺こんの風呂敷ふろしきと真田紐さなだひもだけが残のこる。その時分ときわにはちようど旧ふるの正月しょうげつが来るので、ひとまず国元くにもとへ帰かへつて、古い春はるを山やまの中で越こして、それからまた新あたららしい反物はんぶつを背負せおえるだけ背負せおつて出て来るのだと云つた。そうして養蚕ようさんの忙せわしい四月しがつの末すえか五月ごがつの初はつまでに、それを悉す皆金みなかねに換かえて、また富士ふじの北影きたかげの焼石やきいしばかりころがっている小村こむらへ帰かへつて行くのだそう

である。

「宅へ来出してから、もう四五年になります、いつ見ても同じ事で、少しも変らないんですよ」と細君が注意した。

「実際珍らしい男です」と主人も評語を添えた。三日も外へ出ないと、町幅がいつの間にか取り広げられていたり、一日新聞を読まない、電車の開通を知らずに過したりする今の世に、年に二度も東京へ出ながら、こう山男の特色をどこまでも維持して行くのは、実際珍らしいに違なかつた。宗助はつくづくこの織屋の容貌ようぼうやら態度やら服装やら言葉使やらを觀察して、一種気の毒な思をなした。

彼は坂井を辞して、家へ帰る途中にも、折々インヴァネスの羽根の下に抱えて来た銘仙つつみの包を持ち易かえながら、それを三円という安い価ねで売った男の、粗末な布子ぬのこの縞しまと、赤くてばさばさした髪かみの毛と、その油あぶら気けのない硬こわい髪かみの毛が、どういう訳か、頭の真中で立派に左右に分けられている様を、絶えず眼の前に浮べた。

宅では御米が、宗助に着せる春の羽織をようやく縫い上げて、圧おしの代りに坐蒲団ざぶたんの下へ入れて、自分でその上へ坐っていると云つて、御米は宗助を顧かえりみた。夫から、坂井へ来てい

「あなた今夜敷いて寝て下さい」と云つて、御米は宗助を顧かえりみた。夫から、坂井へ来てい

た甲斐の男の話聞いた時は、御米もさすがに大きな声を出して笑った。そうして宗助の持つて帰った銘仙の縞柄と地合を飽かず眺めては、安い安いと云った。銘仙は全く品の良いものであった。

「どうして、そう安く売って割に合うんでしよう」としまいに聞き出した。

「なに中へ立つ呉服屋が儲け過ぎてるのさ」と宗助はその道に明るいような事を、この一反の銘仙から推断して答えた。

夫婦の話はそれから、坂井の生活に余裕のある事と、その余裕のために、横町の道具屋などに意外な儲け方をされる代りに、時とするとこう云う織屋などから、差し向き不用のものを廉価に買っておく便宜を有している事などに移って、しまいにその家庭のいかにも陽気で、賑やかな模様に落ちて行つた。宗助はその時突然語調を更えて、

「なに金があるばかりじゃない。一つは子供が多いからさ。子供さえあれば、大抵貧乏な家でも陽気になるものだ」と御米を覚した。

その云い方が、自分達の淋しい生涯を、多少自ら窘めるような苦い調子を、御米の耳に伝えたので、御米は覚え膝の上の反物から手を放して夫の顔を見た。宗助は坂井から取つて来た品が、御米の嗜好に合つたので、久しぶりに細君を喜ばせてやった自覚があ

るばかりだったから、別段そこには気がつかなかった。御米もちよつと宗助の顔を見たなりその時は何にも云わなかった。けれども夜に入つて寝る時間が来るまで御米はそれをわざと延ばしておいたのである。

二人はいつもの通り十時過床に入ったが、夫の眼がまだ覚めてゐる頃を見計らつて、御米は宗助の方を向いて話しかけた。

「あなた先刻小供がないと淋しくつていけないとおっしゃつてね」

宗助はこれに類似の事を普遍的に云つた覚はたしかにあつた。けれどもそれは強がりに、自分達の身の上について、特に御米の注意を惹くために口にした、故意の觀察でないのだから、こう改たまつて聞き糺されると、困るよりほかはずなかつた。

「何も宅の事を云つたのじやないよ」

この返事を受けた御米は、しばらく黙つていた。やがて、

「でも宅の事を始終淋しい淋しいと思つていらつしやるから、必竟あんな事をおつしやるんでしよう」と前とほぼ似たような問を繰り返した。宗助は固よりそうだと答えなければならぬ或物を頭の中に有つていた。けれども御米を憚つて、それほど明白地な自白をあえてし得なかつた。この病氣上りの細君の心を休めるためには、かえつてそれを冗

談だんにして笑わらつてしまふ方が善よかろうと考えたので、

「淋しみしいと云えば、そりゃ淋しみしくなくてもないがね」と調子を易かえてなるべく陽氣やうきに出たが、そこで詰つまつたぎり、新あらたらしい文句も、面白い言葉も容易やすに思おもいつけなかつた。やむを得えず、

「まあいいや。心配するな」と云いつた。御米ごまいはまた何とも答えなかつた。宗助そうすけは話題わだかまを変かえようと思おもつて、

「昨ゆうべ夕ゆふも火事かじがあつたね」と世間話よこしまをし出した。すると御米ごまいは急に、

「私は実まことにあなたに御氣ごきの毒どくで」と切きなそうに言い訳わけを半はん分ぶんして、またそれなり黙もくつてしまつた。洋灯ランツはいつものように床とこの間まの上に据すえてあつた。御米ごまいは灯ひに背そむいていたから、宗助そうすけには顔かほの表情へいしやうが判は然ぜん分ぶんらなかつたけれども、その声こゑは多少涙なみだでうるんでいるように思おもわれた。今いままで仰向あおむいて天井てんじやうを見ていた彼は、すぐ妻つまの方かたへ向むき直ただつた。そうして薄暗うすぐらい影かげになつた御米ごまいの顔かほをじつと眺ながめた。御米ごまいも暗くらい中なかからじつと宗助そうすけを見ていた。そうして、「疾とつからあなたに打ち明あけて謝罪あやままろう謝罪あやままろうと思おもつていたんですが、つい言いい悪にくかつたもんだから、それなりにしておいたのです」と途切とぎれ途切とぎれに云いつた。宗助そうすけには何の意味いみかまるで解とらなかつた。多少はヒステリーヒステリーのせいかとも思おもつたが、全然ぜんぜんそうとも決きし

かねて、しばらく茫然ぼんやりしていた。すると御米が思い詰めた調子で、

「私にはとても子供のできる見込はないのよ」と云い切つて泣き出した。

宗助はこの可憐な自白をどう慰さめていいか分別に余つて当惑していたうちにも、御米に対してはなはだ気の毒だという思が非常に高まつた。

「子供なんざ、無くてもいいじゃないか。上の坂井さんみたようにたくさん生れて御覽、傍はたから見ても気の毒だよ。まるで幼稚園のようで」

「だつて一人もできないときまつちまつたら、あなただつて好よかないでしょう」

「まだできないときまりやしないじゃないか。これから生れるかも知れないやね」

御米はなおと泣き出した。宗助も途方とほうに暮れて、発作の治まるのを穏やかに待っていた。そうして、緩ゆっくり御米の説明を聞いた。

夫婦は和合同棲どうせいという点において、人並以上に成功したと同時に、子供にかけては、一般の隣人よりも不幸であつた。それも始から宿る種がなかつたのなら、まだしもだが、育つべきものを途中で取り落したのだから、さらに不幸の感が深かつた。

始めて身重みおもになつたのは、二人が京都を去つて、広島に瘠世帯やせよたいを張っている時であつた。懐妊かいにんと事がきまつたとき、御米はこの新らしい経験に対して、恐ろしい未来と、嬉うれ

しい未来を一度に夢に見るような心持を抱いて日を過ごした。宗助はそれを見えない愛の精に、一種の確証となるべき形を与えた事実と、ひとり解釈して少なからず喜んだ。そうして自分の命を吹き込んだ肉の塊が、目の前に踊る時節を指を折って楽しみに待った。ところが胎児は、夫婦の予期に反して、五カ月まで育つて突然下りてしまった。その時分の夫婦の活計は苦しい苛い月ばかり続いていた。宗助は流産した御米の蒼い顔を眺めて、これも必竟は世帯の苦勞から起るんだと判じた。そうして愛情の結果が、貧のために打ち崩されて、永く手の裡に捕える事のできなくなったのを残念がった。御米はひたすら泣いた。

福岡へ移つてから間もなく、御米はまた酸いものを嗜む人となった。一度流産すると癖になると聞いたので、御米は万に注意して、つましやかに振舞っていた。そのせいか経過は至極順当に行つたが、どうした訳か、これという原因もないのに、月足らずで生れてしまった。産婆は首を傾けて、一度医者に見せるように勧めた。医者に診て貰うと、発育が充分でないから、室内の温度を一定の高さにして、昼夜とも変らないくらい、人工的に暖めなければいけないと云つた。宗助の手際では、室内に煖炉を据えつける設備をするだけでも容易ではなかつた。夫婦はわが時間と算段の許す限りを尽して、専念に赤児の命を

護まもつた。けれどもすべては徒勞たうらうに歸した。一週間の後、二人の血を分けた情の塊なまはけたまりはついに冷たくなつた。御米は幼児の亡骸なきがらを抱だいて、

「どうしましょう」と啜すすり泣いた。宗助は再度の打撃を男らしく受けた。冷たい肉が灰になつて、その灰がまた黒い土に和かするまで、一口も愚痴ぐちらしい言葉は出さなかつた。そのうちいつとなく、二人の間に挟はさまつていた影のようなものが、しだいに遠退とおのいて、ほどなく消えてしまつた。

すると三度目の記憶が来た。宗助が東京に移つて始つて年の年に、御米はまた懐妊したのである。出京の当座は、だいぶん身体からだが衰おとろえていたので、御米はもちろん、宗助もひどくそこを氣遣きづかつたが、今度こそはという腹は両方にあつたので、張のある月を無事にだんだんと重ねて行つた。ところがちやうど五月目いつつきめになつて、御米はまた意外しんくじりの失敗をやつた。その頃はまだ水道も引いてなかつたから、朝晩下女が井戸端へ出て水を汲んだり、洗濯をしなければならなかつた。御米はある日裏にいる下女に云いつける用ができたので、井い戸流がしの傍そばに置おいた盥たらいの傍まで行つて話をしたついでに、流ながしむこうを向へ渡ろうとして、青い苔こけの生ぬえている濡ぬれた板の上へ尻持しりもちを突いた。御米はまたやり損そくなつたとは思つたが、自分の粗忽そこつを面目めんぼながつて、宗助にはわざと何事も語らずにその場を通した。けれどもこの

震動が、いつまで経つても胎児の發育にこれという影響も及ぼさず、したがって自分の身体からだにも少しの異状を引き起さなかつた事がたしかに分つた時、御米はようやく安心して、過去の失しつを改めて宗助の前に告げた。宗助は固もとより妻を咎とがめる意もなかつた。ただ、

「よく気をつけないと危ないよ」と穏やかに注意を加えて過ぎた。

とかくするうちに月が満ちた。いよいよ生れるという間際まぎわまで日が詰つたとき、宗助は役所へ出ながらも、御米の事がしきりに気にかかつた。帰りにはいつも、今日はことによると留守のうちになどと案じ続けては、自分の家の格子こうしの前に立つた。そうして半ば予期している赤児の泣声が聞えないと、かえつて何かの変でも起つたらしく感じて、急いで宅うちへ飛び込んで、自分と自分の粗忽を恥ずる事があつた。

幸さいわいに御米さんけの産氣さんけづいたのは、宗助の外に用のない夜中だったので、傍にいて世話のできると云う点から見ればはなはだ都合が好かつた。産婆も緩ゆるくり間に合うし、脱脂綿たんじゅうめんその他の準備もことごとく不足なく取り揃そろえてあつた。産も案外軽かつた。けれども肝かん心しんの小児こどもは、ただ子宮さんくうを逃のがれて広い所へ出たというまでで、浮世の空氣を一口も呼吸しなかつた。産婆は細い硝子がらすの管くだのようなものを取つて、小さい口の内なかへ強い呼吸いきをしきりに吹き込んだが、効目ききめはまるでなかつた。生れたものは肉だけであつた。夫婦はこの肉に刻みつけら

れた、眼と鼻と口とを髻髻ほうふつした。しかしその咽喉のどから出る声はついに聞く事ができなかつた。

産婆は出産のあつたついで一週間前に来て、丁寧ていねいに胎児の心臓まで聴診して、至極しごく御健全だと保証して行つたのである。よし産婆の云う事に間違があつて、腹の児この發育が今までのうちにどこかで止つていたにしたところで、それが直取り出されない以上、母体は今こ日まで平氣に持ちこたえる訳がなかつた。そこをだんだん調べて見て、宗助は自分がいまだかつて聞いた事のない事実を発見した時に、思わず恐れ驚ろいた。胎児は出る間際まで健康であつたのである。けれども臍さい帯たい纏てん絡らくと云つて、俗に云う胞えなを頸くびへ捲まきつけていた。こう云う異常の場合には、固もとより産婆の腕で切り抜けるよりほかにしようのないもので、経験のある婆さんなら、取り上げる時に、旨うまく頸に掛かつた胞を外はずして引き出すはずであつた。宗助の頼んだ産婆もかなり年を取つていただけに、このくらいのことには心得ていた。しかし胎児の頸くびを絡からんでいた臍帯は、時たまあるごとく一重ひとえではなかつた。二重ふたえに細い咽喉のどを巻いている胞を、あの細い所を通す時に外そくし損こなつたので、小児こどもはぐつと気管を絞しめられて窒息してしまつたのである。

罪は産婆にもあつた。けれどもなかば以上は御米おちぢの落度おちどに違なかつた。臍帯纏絡さいたいてんらくの変状

は、御米が井戸端で滑つて痛く尻餅しりもちを搗いた五カ月前すでに自ら醸かしたものと知れた。御米は産後の蓐じよくちゆう中にその始末を聞いて、ただ軽く首肯うなずいたぎり何にも云わなかった。そうして、疲労に少し落ち込んだ眼を濡うるませて、長い睫毛まつげをしきりに動かした。宗助は慰さめながら、手帛ハンケチで頬に流れる涙を拭ふいてやった。

これが子供に関する夫婦の過去であった。この苦にがい経験けいけんを嘗なめた彼らは、それ以後幼児について余り多くを語るを好まなかった。けれども二人の生活の裏側は、この記憶のために淋さむしく染めつけられて、容易やすに剥はげそうには見えなかった。時としては、彼ひが我的わがの笑声わらを通とほしてさえ、御互の胸に、この裏側が薄暗く映る事もあった。こういう訳だから、過去の歴史を今夫に向つて新たに繰り返そうとは、御米も思い寄らなかつたのである。宗助も今更妻からそれを聞かせられる必要は少しも認めていなかつたのである。

御米の夫に打ち明けると云つたのは、固より二人の共有していた事実についてではなかつた。彼女は三度目の胎児を失つた時、夫からその折の模様を聞いて、いかにも自分が残酷な母であるかのごとく感じた。自分が手を下くだした覚がないにせよ、考えようによっては、自分と生を与えたものの生を奪うために、暗闇くらやみと明海あかるみの途中に待ち受けて、これを絞こ殺ころしたと同じ事であつたからである。こう解釈した時、御米は恐ろしい罪を犯した悪人

と己を見倣さない訳に行かなかつた。そうして思わざる徳義上の苛責を人知れず受けた。しかもその苛責を分つて、共に苦しんでくれるものは世界中に一人もなかつた。御米は夫にさえこの苦しみを語らなかつたのである。

彼女はその時普通の産婦のように、三週間を床の中で暮らした。それは身体から云うと極めて安静の三週間に違なかつた。同時に心から云うと、恐るべき忍耐の三週間であつた。宗助は亡児のために、小さい柩を拵らえて、人の眼に立たない葬儀を営んだ。しかる後、また死んだものために小さな位牌を作つた。位牌には黒い漆で戒名が書いてあつた。位牌の主は戒名を持つていた。けれども俗名は両親といえども知らなかつた。宗助は最初それを茶の間の筆筒の上へ載せて、役所から帰ると絶えず線香を焚いた。その香が六畳に寝ている御米の鼻に時々通つた。彼女の官能は当時それほど鋭どくなつていたのである。しばらくしてから、宗助は何を考えたか、小さい位牌を筆筒の抽出の底へしまつてしまつた。そこには福岡で亡くなつた小供の位牌と、東京で死んだ父の位牌が別々に綿で包んで丁寧に入れてあつた。東京の家を畳むとき宗助は先祖の位牌を一つ残らず携えて、諸所を漂泊するの煩わしさに堪えなかつたので、新らしい父の分だけを鞆の中に収めて、その他はことごとく寺へ預けておいたのである。

御米は宗助のするすべてを寝ながら見たり聞いたりしていた。そうして布団の上に仰あおむ向むかになつたまま、この二つの小さい位牌を、眼に見えない因果いんがの糸を長く引いて互に結びつけた。それからその糸をなお遠く延ばして、これは位牌にもならず流れてしまった、始めから形のない、ぼんやりした影のような死児の上に投げかけた。御米は広島と福岡と東京に残る一つずつの記憶の底に、動かしがたい運命おごその厳かな支配を認めて、その厳かな支配しちの下もとに立つ、幾月いくつきひ日の自分を、不思議にも同じ不幸を繰り返すべく作られた母であるむとと観じた時、時ならぬ呪詛のろいの声を耳の傍はたに聞いた。彼女が三週間の安静を、蒲団ふとんの上に貪むとぼらなければならぬように、生理的に強しいられている間、彼女の鼓膜はこの呪詛の声でほとんど絶えず鳴っていた。三週間の安臥は、御米に取つて実に比類のない忍耐の三週間であつた。

御米はこの苦しい半月余りを、枕の上でじつと見つめながら過すごした。しまいには我慢して横になつているのが、いかにも苛つらかつたので、看護婦の帰つた明るあくに、こつそり起きてぶらぶらして見たが、それでも心に逼せまる不安は、容易まぎに紛まらせなかつた。退儀たいぎな身体からだを無理に動かす割に、頭の中は少しも動いてくれないので、また落胆がつかりして、ついには取り放しの夜具の下へ潜もぐり込んで、人の世を遠ざけるように、眼を堅く閉つめてしまふ事もあ

った。

そのうち定期の三週間も過ぎて、御米の身体は自からすつきりなつた。御米は奇麗に床を払つて、新らしい氣のする眉を再び鏡に照らした。それは更衣の時節であつた。御米も久しぶりに綿の入つた重いものを脱ぎ棄てて、肌にあかの触れない軽い氣持を爽やかに感じた。春と夏の境をぱつと飾る陽気な日本の風物は、淋しい御米の頭にも幾分かの反響を与えた。けれども、それはただ沈んだものを掻き立てて、賑やかな光りのうちに浮かしたまでであつた。御米の暗い過去の中にその時一種の好奇心が萌したのである。

天氣の勝れて美しいある日の午前、御米はいつもの通り宗助を送り出してから直に、表へ出た。もう女は日傘を差して外を行くべき時節であつた。急いで日向を歩くと額の辺が少し汗ばんだ。御米は歩き歩き、着物を着換える時、箆笥を開けたら、思わず一番目の抽出の底にしまつてあつた、新らしい位牌に手が触れた事を思いつづけて、とうとうある易者の門を潜つた。

彼女は多数の文明人に共通な迷信を子供の時から持つていた。けれども平生はその迷信がまた多数の文明人と同じように、遊戯的に外に現われるだけで済んでいた。それが実生活の嚴かな部分を冒すようになったのは、全く珍らしいと云わなければならなかつた。御

米はその時真面目な態度と真面目な心を有つて、易者の前に坐つて、自分が将来子を生むべき、また子を育てるべき運命を天から与えられるだろうかを確認した。易者は大道に店を出して、往來の人の身の上を一二錢で占う人、少しも違つた様子もなく、算木をいろいろに並べて見たり、筮竹を揉んだり数えたりした後で、仔細らしく腮の下あごの髯ひげを握つて何か考えたが、終りに御米の顔をつくづく眺めた末、

「あなたには子供はできません」と落ちつき払つて宣告した。御米は無言のまま、しばらく易者の言葉を頭の中で噛んだり砕いたりした。それから顔を上げて、

「なぜでしょう」と聞き返した。その時御米は易者が返事をする前に、また考えるだろうと思つた。ところが彼はまともに御米の眼の間を見詰めたまま、すぐ

「あなたは人に対してすまない事をした覚がある。その罪が崇たつてゐるから、子供はけつして育たない」と云い切つた。御米はこの一言に心臓を射抜かれる思があつた。くしやりと首を折つたなり家へ歸つて、その夜は夫の顔さえろくろく見上げなかつた。

御米の宗助に打ち明けないで、今まで過したというのは、この易者の判断であつた。宗助は床の間に乗せた細い洋灯ランプの灯ひが、夜の中に沈んで行きそうな静かな晩に、始めて御米の口からその話を聞いたとき、さすがに好い気味はしなかつた。

「神経の起つた時、わざわざそんな馬鹿な所へ出かけるからさ。銭ぜにを出して下らない事を云われてつまらないじゃないか。その後もその占うらないの宅うちへ行くのかい」

「恐ろしいから、もうけつして行かないわ」

「行かないがいい。馬鹿氣ている」

宗助はわざと鷹揚おうような答をしてまた寝てしまった。

十四

宗助そうすけと御米およねとは仲の好い夫婦に違なかつた。いつしよになつてから今こん日まで六年ほどの長い月日を、まだ半日も氣不味きまずく暮した事はなかつた。言逆いさかいに顔を赤らめ合つた試ためしはなおなかつた。二人は呉服屋の反物を買つて着た。米屋から米を取つて食つた。けれどもその他には一般の社会に待つところのきわめて少ない人間であつた。彼らは、日常の必需品を供給する以上の意味において、社会の存在をほとんど認めていなかった。彼らに取つて絶対に必要なものは御互いだだけで、その御互だけが、彼らにはまた充分であつた。彼らは山の中にいる心を抱いて、都会に住んでいた。

自然の勢として、彼らの生活は単調に流れない訳に行かなかつた。彼らは複雑な社会の煩を避け得たと共に、その社会の活動から出るさまじまの経験に直接触れる機会を、自分と塞いでしまつて、都会に住みながら、都会に住む文明人の特権を棄てたような結果に到着した。彼らも自分達の日常に変化のない事は折々自覚した。御互が御互に飽きるの、物足りなくなるのという心は微塵も起らなかつたけれども、御互の頭に受け入れる生活の内容には、刺戟に乏しい或物が潜んでいるような鈍い訴があつた。それにもかかわらず、彼らが毎日同じ判を同じ胸に押し、長の月日を倦まず渡つて来たのは、彼らが始から一般の社会に興味を失つていたためではなかつた。社会の方で彼らを二人ぎりに切りつめて、その二人に冷かな背を向けた結果にほかならなかつた。外に向つて生長する余地を見出し得なかつた二人は、内に向つて深く延び始めたのである。彼らの生活は広さを失なうと同時に、深さを増して来た。彼らは六年の間世間に散漫な交渉を求めなかつた代りに、同じ六年の歳月を挙げて、互の胸を掘り出した。彼らの命は、いつの間にか互の底にまで喰い入つた。二人は世間から見れば依然として二人であつた。けれども互から云えば、道義上切り離す事のできない一つの有機体になつた。二人の精神を組み立てる神経系は、最後の繊維に至るまで、互に抱き合つてでき上つていた。彼らは大きな水盤の表に滴つた二

点の油のようなものであった。水を弾いて二つがいつしよに集まったと云うよりも、水に弾かれた勢で、丸く寄り添った結果、離れる事ができなくなつたと評する方が適當であつた。

彼らはこの抱合の中に、尋常の夫婦に見出しがたい親和と飽満と、それに伴なう倦怠とを兼ね具えていた。そうしてその倦怠の慵い気分支配されながら、自己を幸福と評価する事だけは忘れなかつた。倦怠は彼らの意識に眠のような幕を掛けて、二人の愛をうつとり霞ます事はあつた。けれども筋で神経を洗われる不安はけつして起し得なかつた。要するに彼らは世間に疎いだけ仲の好い夫婦であつたのである。

彼らは人並以上に睦ましい月日を渝らずに今日から明日へと繋いで行きながら、常はそこに気がつかずに顔を見合わせているようなものの、時々自分達の睦まじがる心を、自分で確と認める事があつた。その場合には必ず今まで睦まじく過ごした長の歲月を溯のぼつて、自分達がいかな犠牲を払つて、結婚をあえてしたかと云う當時を憶い出さない訳には行かなかつた。彼らは自然が彼らの前にもたらした恐るべき復讐の下に戦きながら跪ずいた。同時にこの復讐を受けるために得た互の幸福に対して、愛の神に一弁の香を焚く事を忘れなかつた。彼らは鞭たれつつ死に赴くものであつた。ただその鞭の先に、すべ

てを癒やす甘い蜜の着いている事を覺つたのである。

宗助は相當に資産のある東京ものの子弟として、彼らに共通な派出な嗜好を、学生時代には遠慮なく充たした男である。彼はその時服装にも、動作にも、思想にも、ことごとく当世らしい才人の面影を漲らして、昂い首を世間に擡げつつ、行こうと思う辺りを濶歩した。彼の襟の白かったごとく、彼の洋袴の裾が奇麗に折り返されていたごとく、その下から見える彼の靴足袋が模様入のカシミヤであつたごとく、彼の頭は華奢な世間向きであつた。

彼は生れつき理解の好い男であつた。したがって大した勉強をする気にはなれなかつた。学問は社会へ出るための方便と心得ていたから、社会を一步退ぞかなくつては達する事のできない、学者という地位には、余り多くの興味を有つていなかった。彼はただ教場へ出て、普通の学生のする通り、多くのノートブックを黒くした。けれども宅へ歸つて来て、それを読み直したり、手を入れたりした事は滅多になかつた。休んで抜けた所さえ大抵はそのままにして放つて置いた。彼は下宿の机の上には、このノートブックを奇麗に積み上げて、いつ見ても整然と秩序のついた書齋を空にしては、外を出歩るいた。友達は多く彼の寛濶を羨んだ。宗助も得意であつた。彼の未来は虹のように美しく彼の眸を照らした。

その頃の宗助は今と違って多くの友達を持っていた。実を云うと、軽快な彼の眼に映ずるすべての人は、ほとんど誰彼の区別なく友達であった。彼は敵という言葉の意味を正當に解し得ない楽天家として、若い世をのびのびと渡った。

「なに不景気な顔さえしななければ、どこへ行つたつて驩迎されるもんだよ」と学友の安井によく話した事があつた。實際彼の顔は、他を不愉快にするほど深刻な表情を示し得た試がなかつた。

「君は身体が丈夫だから結構だ」とよくどこかに故障の起る安井が羨ましがつた。この安井というのは国は越前だが、長く横浜にいたので、言葉や様子は毫も東京ものと異なる点がなかつた。着物道楽で、髪の毛を長くして真中から分ける癖があつた。高等学校は違つていたけれども、講義のときよく隣合せに並んで、時々聞き損なつた所などを後から質問するので、口を利き出したのが元になつて、つい懇意になつた。それが学年の始まりだったので、京都へ来て日のまだ浅い宗助にはだいぶんの便宜であつた。彼は安井の案内で新しい土地の印象を酒のごとく吸い込んだ。二人は毎晩のように三条とか四条とかいう賑やかな町を歩いた。時によると京極も通り抜けた。橋の真中に立つて鴨川の水を眺めた。東山の上に出る静かな月を見た。そうして京都の月は東京の月よりも丸くて大きい

ように感じた。町や人に厭きたときは、土曜と日曜を利用して遠い郊外に出た。宗助は至る所の^{おおたけやぶ}大竹藪に緑の籠る^{こも}深い姿を喜んだ。松の幹の染めたように赤いのが、日を照り返して幾本となく並ぶ風情^{ふぜい}を楽しんだ。ある時は大悲閣へ登って、即非^{そくひ}の額の下に仰向きながら、谷底の流を下る^{くだ}櫓^ろの音を聞いた。その音が雁^{かり}の鳴声によく似ているのを二人とも面白がった。ある時は、平八茶屋^{へいはちぢや}まで出掛けて行って、そこに一日寝ていた。そうして不味^{まず}い河魚^{くし}の串に刺したのを、かみさんに焼かして酒を呑んだ。そのかみさんは、手拭^{てぬぐい}を被^{かぶ}つて、紺^{こん}の立^た付^つみ^けたようなものを穿^はいていた。

宗助はこんな新しい刺戟^{しげき}の下^{もと}に、しばらくは慾求の満足を得た。けれどもひととおり古い都^にの臭^{におい}を嗅^かいで歩くうちに、すべてがやがて、平板に見えだして来た。その時彼は美しくしい山の色と清い水の色が、最初ほど鮮明な影を自分の頭に宿さないのを物足らず思い始めた。彼は暖かな若い血を抱^{いだ}いて、その熱^{ほて}りを冷^さす^ま深い緑に逢えなくなった。そうかといつて、この情熱^やを焚^やき^すほどの烈^{はげ}しい活動には無論出会わなかった。彼の血は高い脈を打って、いたずらにむず^が痒^ゆく彼の身体の中を流れた。彼は腕組をして、坐^いながら四方の山を眺めた。そうして、
「もうこんな古臭い所には厭きた」と云った。

安井は笑いながら、比較のため、自分の知っている或友達の故郷の物語をして宗助に聞かした。それは浄瑠璃じょうるりの間の土山あい つちやま雨が降るとある有名な宿しゆくの事であった。朝起きてから夜寝るまで、眼に入るものは山よりほかにない所で、まるで播鉢すりばちの底に住んでいると同じ有様だと告げた上、安井はその友達の小さい時分の経験として、五月雨さみだれの降りつづく折などは、小供心に、今にも自分の住んでいる宿しゆくが、四方の山から流れて来る雨の中に浸かつてしまいそうで、心配でならなかったと云う話をした。宗助はそんな播鉢の底で一生を過す人の運命ほど情ないものはあるまいと考えた。

「そう云う所に、人間がよく生きていられるな」と不思議そうな顔をして安井に云った。安井も笑っていた。そうして土山つちやまから出た人物うちの中では、千両函せんりょうぼこを摩すり替かえて礫はりつけになつたのが一番大きいのだと云う一口話をやはり友達から聞いた通り繰り返した。狭い京都に飽きた宗助は、単調な生活を破る色彩として、そう云う出来事も百年に一度ぐらひは必要だろうとまで思った。

その時分の宗助の眼は、常に新らしい世界にばかり注そそがれていた。だから自然がひととおり四季の色を見せてしまったあとでは、再び去年の記憶を呼び戻すために、花や紅葉もみじを迎える必要がなくなつた。強く烈はげしい命に生きたと云う証券を飽あくまで握りたかつた彼に

は、活きた現在と、これから生れようとする未来が、当面の問題であつたけれども、消えかかる過去は、夢同様に価の乏しい幻影に過ぎなかつた。彼は多くの剥げかかつた社と、寂果てた寺を見尽して、色の褪めた歴史の上に、黒い頭を振り向ける勇気を失いかけた。寝巻けた昔に 徊するほど、彼の気分は枯れていなかったのである。

学年の終りに宗助と安井とは再会を約して手を分つた。安井はひとまず郷里の福井へ歸つて、それから横浜へ行くつもりだから、もしその時には手紙を出して通知をしよう、そうしてなるべくならいつしよの汽車で京都へ下ろう、もし時間が許すなら、興津あたりで泊つて、清見寺や三保の松原や、久能山でも見ながら緩くり遊んで行こうと云つた。宗助は大いによかろうと答えて、腹のなかではすでに安井の端書を手にする時の心持さえ予想した。

宗助が東京へ歸つたときは、父は固よりまだ丈夫であつた。小六は子供であつた。彼は一年ぶりに般な都の炎熱と煤煙を呼吸するのをかえつて嬉しく感じた。燬くような日の下に、渦を捲いて狂い出しそうな瓦の色が、幾里となく続く景色を、高い所から眺めて、これでこそ東京だと思ふ事さえあつた。今の宗助なら目を眩しかねない事々物々が、ことごとく壮快の二字を彼の額に焼き付けべく、その時は反射して来たのである。

彼の未来は封じられた蓄つぼみのように、開かない先は他ひとに知れないばかりでなく、自分にも確しかとは分らなかつた。宗助はただ洋々の二字が彼の前途に柵たなび引いている気がしただけであつた。彼はこの暑い休暇中にも卒業後の自分に対する謀はかりごとを忽ゆるがせにはしなかつた。彼は大を出てから、官途につこうか、または実業に従おうか、それすら、まだ判はつきり然と心にきめていなかつたにかかわらず、どちらの方面でも構わず、今のうちから、進めるだけ進んでおく方が利益だと心づいた。彼は直接父の紹介を得た。父を通して間接にその知人の紹介を得た。そうして自分の将来を影響し得るような人を物色して、二三の訪問を試みた。彼らのあるものは、避暑という名義もとの下に、すでに東京を離れていた。あるものは不在であつた。またあるものは多忙のため時を期して、勤務先で会おうと云つた。宗助は日のまだ高くならない七時頃に、昇降器エレヴエーターで煉瓦造れんがづくりの三階へ案内されて、その応接間に、もう七八人も自分と同じように、同じ人を待っている光景を見て驚ろいた事もあつた。彼はこうして新らしい所へ行つて、新らしい物に接するのが、用向の成否に関わらず、今まで眼に付かずに過ぎた活いきた世界の断片を頭へ詰め込むような気がして何となく愉快であつた。

父の云いつけで、毎年の通り虫干の手伝をさせられるのも、こんな時には、かえつて興

味の多い仕事の一部分に数えられた。彼は冷たい風の吹き通す土蔵の戸前の湿っぽい石の上に腰を掛けて、古くから家にあつた江戸名所図会と、江戸砂子という本を物珍しそうに眺めた。畳まで熱くなつた座敷の真中へ胡坐を搔いて、下女の買つて来た樟脳を、小さな紙片に取り分けては、医者でくれる散薬のような形に畳んだ。宗助は小供の時からこの樟脳の高い香と、汗の出る土用と、炮烙灸と、蒼空を緩く舞う鳶とを連想していた。

とかくするうちに節は立秋に入った。二百十日の前には、風が吹いて、雨が降つた。空には薄墨の煮染んだような雲がしきりに動いた。寒暖計が二三日下がりに下がつた。宗助はまた行李を麻縄で絡めて、京都へ向う支度をしなければならなくなつた。

彼はこの間にも安井と約束のある事は忘れなかつた。家へ帰つた当座は、まだ二カ月も先の事だからと緩くり構えていたが、だんだん時日が逼るに従つて、安井の消息が気になつてきた。安井はその後一枚の端書さえ寄こさなかつたのである。宗助は安井の郷里の福井へ向けて手紙を出して見た。けれども返事はないに來なかつた。宗助は横浜の方へ問い合わせようと思つたが、つい番地も町名も聞いて置かなかつたので、どうする事もできなかつた。

立つ前の晩に、父は宗助を呼んで、宗助の請求通り、普通の旅費以外に、途中で二三日滞在した上、京都へ着いてからの当分の小遣を渡して、

「なるたけ節儉しなくちやいけない」と諭した。

宗助はそれを、普通の子が普通の親の訓戒を聞く時のごとくに聞いた。父はまた、

「来年また帰つて来るまでは会わないから、随分気をつけて」と云つた。その帰つて来る時節には、宗助はもう帰れなくなつていたのである。そうして帰つて来た時は、父の亡骸がもう冷たくなつていたのである。宗助は今に至るまでその時の父の面影を思い浮べてはすまないような気がした。

いよいよ立つと云う間際に、宗助は安井から一通の封書を受取つた。開いて見ると、約束通りいっしょに帰るつもりでいたが、少し事情があつて先へ立たなければならぬ事になつたからと云う断を述べた末に、いづれ京都で緩くり会おうと書いてあつた。宗助はそれを洋服の内懐に押し込んで汽車に乗つた。約束の興津へ来たとき彼は一人でプラットフォームフォームへ降りて、細長い一筋町を清見寺の方へ歩いた。夏もすでに過ぎた九月の初なので、おおかたの避暑客は早く引き上げた後だから、宿屋は比較的閑静であつた。宗助は海の見える一室の中に腹這になつて、安井へ送る絵端書へ二三行の文句を書いた。そ

のなかに、君が来ないから僕一人でここへ来たという言葉を入れた。

翌日も約束通り一人で三保と竜華寺を見物して、京都へ行ってから安井に話す材料をできるだけ拵えた。しかし天氣のせいか、当にした連のないためか、海を見ても、山へ登つても、それほど面白くなかった。宿にじつとしてるのは、なお退屈であった。宗助は匆々にまた宿の浴衣を脱ぎ棄てて、絞りの三尺と共に欄干に掛けて、興津を去った。

京都へ着いた一日目は、夜汽車の疲れやら、荷物の整理やらで、往來の日影を知らずに暮らした。二日目になつてようやく学校へ出て見ると、教師はまだ出揃つていなかった。学生も平日よりは数が不足であった。不審な事には、自分より三四日前に帰っているべきはずの安井の顔さえどこにも見えなかった。宗助はそれが気にかかるので、帰りにわざわざ安井の下宿へ回つて見た。安井のいる所は樹と水の多い加茂の社の傍であった。彼は夏休み前から、少し閑静な町外れへ移つて勉強するつもりだとか云つて、わざわざこの不便な村同様な田舎へ引込んだのである。彼の見つけ出した家から寂た土塀を二方に回らして、すでに古風に片づいていた。宗助は安井から、その主人はもと加茂神社の神官の一人であつたと云う話を聞いた。非常に能弁な京都言葉を操る四十ばかりの細君がいて、安井の世話をしていた。

「世話つて、ただ不味い菜を拵らえて、三度ずつ室へ運んでくれるだけだよ」と安井は移り立てからこの細君の悪口を利いていた。宗助は安井をここに二三度訪ねた縁故で、彼のいわゆる不味い菜を拵らえる主を知っていた。細君の方でも宗助の顔を覚えていた。細君は宗助を見るや否や、例の柔かい舌で慇懃な挨拶を述べた後、こっちから聞こうと思つて来た安井の消息を、かえつて向うから尋ねた。細君の云うところによると、彼は郷里へ歸つてから当日に至るまで、一片の音信さえ下宿へは出さなかつたのである。宗助は案外な思で自分の下宿へ歸つて来た。

それから一週間ほどは、学校へ出るたんびに、今日は安井の顔が見えるか、明日は安井の声がするかと、毎日漠然とした予期を抱いては教室の戸を開けた。そうして毎日また漠然とした不足を感じては歸つて来た。もつとも最後の三四日における宗助は早く安井に会いたいと思うよりも、少し事情があるから、失敬して先へ立つとわざわざ通知しながら、いつまで待つても影も見せない彼の安否を、関係者としてむしろ気にかけていたのである。彼は学友の誰彼に万遍なく安井の動静を聞いて見た。しかし誰も知るものはなかつた。ただ一人が、昨夕四条の人込の中で、安井によく似た浴衣がけの男を見たと答えた事があった。しかし宗助にはそれが安井だろうとは信じられなかつた。ところがその話を聞いた

翌日、すなわち宗助が京都へ着いてから約一週間の後、話の通りの服装をした安井が、突然宗助の所へ尋ねて来た。

宗助は着流しのまま麦藁帽を手に持った友達の姿を久し振に眺めた時、夏休み前の彼の顔の上に、新らしい何物かがさらに付け加えられたような気がした。安井は黒い髪に油を塗って、目立つほど奇麗に頭を分けていた。そうして今床屋へ行つて来たところだと言訳らしい事を云つた。

その晩彼は宗助と一時間余りも雑談に耽つた。彼の重々しい口の利き方、自分を憚かつて、思い切れないような話の調子、「しかるに」と云う口癖、すべて平生の彼と異なる点はなかつた。ただ彼はなぜ宗助より先へ横浜を立つたかを語らなかつた。また途中どこで暇取つたため、宗助より後れて京都へ着いたかを判然告げなかつた。しかし彼は三四日前ようやく京都へ着いた事だけを明かにした。そうして、夏休み前にいた下宿へはまだ帰らずにいると云つた。

「それでどこに」と宗助が聞いたとき、彼は自分の今泊っている宿屋の名前を、宗助に教えた。それは三条辺の三流位の家であつた。宗助はその名前を知っていた。

「どうして、そんな所へ這入つたのだ。当分そこにいるつもりなのかい」と宗助は重ねて

聞いた。安井はただ少し都合があつてとばかり答えたが、

「下宿生活はもうやめて、小さい家でも借りようかと思つてゐる」と思いがけない計画を打ち明けて、宗助を驚ろかした。

それから一週間ばかりの中に、安井はどうとう宗助に話した通り、学校近くの閑静な所に一戸を構えた。それは京都に共通な暗い陰気な作りの上に、柱や格子を黒赤く塗つて、わざと古臭く見せた狭い貸家であつた。門口に誰の所有ともつかない柳が一本あつて、長い枝がほとんど軒に触りそうに風に吹かれる様を宗助は見た。庭も東京と違つて、少しは整つていた。石の自由になる所だけに、比較的大きなのが座敷の真正面に据えてあつた。その下には涼しそうな苔がいくらかでも生えた。裏には敷居の腐つた物置が空のままがらんと立つてゐる後に、隣の竹藪が便所の出入りに望まれた。

宗助のここを訪問したのは、十月に少し間のある学期の始めであつた。残暑がまだ強いので宗助は学校の往復に、蝙蝠傘を用いてゐた事を今に記憶してゐた。彼は格子の前で傘を畳んで、内を覗き込んだ時、粗い縞の浴衣を着た女の影をちらりと認めた。格子の内は三和土で、それが真直に裏まで突き抜けてゐるのだから、這入つてすぐ右手の玄関めいた上り口を上らない以上は、暗いながら一筋に奥の方まで見える訳であつた。宗助は浴衣

の後、影うしろかげが、裏口へ出る所で消えてなくなるまでそこに立っていた。それから格子を開けた。玄関へは安井自身が現れた。

座敷へ通つてしばらく話していたが、さっきの女は全く顔を出さなかった。声も立てず、音もさせなかった。広い家でないから、つい隣の部屋ぐらいいいたのだろうけれども、いないのとまるで違わなかった。この影のように静かな女が御米であつた。

安井は郷里の事、東京の事、学校の講義の事、何くれとなく話した。けれども、御米の事については一言も口にしなかった。宗助も聞く勇氣に乏しかつた。その日はそれなり別れた。

次の日二人が顔を合したとき、宗助はやはり女の事を胸の中に記憶していたが、口へ出しては一言も語らなかつた。安井も何気ない風をしていた。懇意な若い青年が、心易こころやすだ立てに話し合う遠慮のない題目は、これまで二人の間に何度となく交換されたにもかかわらず、安井はここへ来て、息詰つたごとくに見えた。宗助もそこを無理にこじ開けるほどの強い好奇心は有もたなかつた。したがつて女は二人の意識の間に挟はさまりながら、つい話頭に上らないで、また一週間ばかり過ぎた。

その日曜に彼はまた安井を訪とうた。それは二人の関係している或会について用事が起つ

たためで、女とは全く縁故のない動機から出た淡泊たんぱくな訪問であつた。けれども座敷へ上がつて、同じ所へ坐らせられて、垣根に沿うた小さな梅の木を見ると、この前来た時の事が明らかに思い出された。その日も座敷の外は、しんとして静しずかであつた。宗助はその静かなうちに忍んでゐる若い女の影を想像しない訳に行かなかつた。同時にその若い女はこの前と同じように、けつして自分の前に出て来る氣遣きづかいはあるまいと信じていた。

この予期もとの下に、宗助は突然御米に紹介されたのである。その時御米はこの間のようあらに粗い浴衣ゆかたを着てはいなかつた。これからよそへ行くか、または今外から歸つて来たと言よそおいう風な粧よそおいをして、次の間から出て来た。宗助にはそれが意外であつた。しかし大した綺羅きらを着飾つた訳でもないのに、衣服の色も、帯の光も、それほど彼を驚かすまでには至らなかつた。その上御米は若い女にありがちの嬌きよう羞しゆうというものを、初対面の宗助に向つて、あまり多く表わさなかつた。ただ普通の人間を静にして言葉寡すくなみに切りつめただけに見える。人の前へ出ても、隣の室へやに忍んでゐる時と、あまり区別のないほど落ちついた女だといふ事を見出した宗助は、それから推して、御米のひっそりしていたのは、穴勝あながち恥ちかしがつて、人の前へ出るのを避けるためばかりでもなかつたんだと思つた。

安井は御米を紹介する時、

「これは僕の妹だ」という言葉を用いた。宗助は四五分対坐して、少し談話を取り換わしているうちに、御米の口調のどこにも、国訛らしい音の交っていない事に気がついた。

「今まで御国の方に」と聞いたたら、御米が返事をする前に安井が、「いや横浜に長く」と答えた。

その日は二人して町へ買物に出ようと云うので、御米は不断着を脱ぎ更えて、暑いところをわざわざ新らしい白足袋まで穿いたものと知れた。宗助はせつかくの出がけを喰い留めて、邪魔でもしたように気の毒な思をした。

「なに宅を持ち立てだものだから、毎日毎日要るものを新らしく発見するんで、一週に一返は是非都まで買い出しに行かなければならない」と云いながら安井は笑った。

「途までいっしょに出掛けよう」と宗助はすぐ立ち上がった。ついでに家の様子を見てくれと安井の云うに任せた。宗助は次の間にある亜鉛の落しのついた四角な火鉢や、黄な安っぽい色をした真鍮の葉罐や、古びた流しの傍に置かれた新らしい過ぎる手桶を眺めて、門へ出た。安井は門口へ錠をおろして、鍵を裏の家へ預けるとか云って、走って行った。宗助と御米は待つている間、二言、三言、尋常な口を利いた。

宗助はこの三四分間に取り換わした互の言葉を、いまだに覚えていた。それはただの男がただの女に対して人間たる親みしたしを表わすために、やりとりする簡略な言葉に過ぎなかつた。形容すれば水のように浅く淡いものであつた。彼は今日こんにちまで路傍道上において、何かの折に触れて、知らない人を相手に、これほどの挨拶あいさつをどのくらい繰り返して来たか分らなかつた。

宗助は極めて短かいその時の談話を、一々思い浮べるたびに、その一々が、ほとんど無着色と云つていいほどに、平淡であつた事を認めた。そうして、かく透明な声が、二人の未来を、どうしてああ真赤まっかに、塗りつけたかを不思議に思つた。今では赤い色が日を経て昔の鮮あざやかさを失つていた。互を焚やき焦こがしたほのおは、自然と変色して黒くなつていた。二人の生活はかようにして暗い中に沈んでいた。宗助は過去を振り向いて、事の成行なりゆきを逆に眺め返しては、この淡泊たんぱくな挨拶あいさつが、いかに自分らの歴史を濃く彩いろどつたかを、胸の中であくまで味わいつつ、平凡な出来事を重大に変化させる運命の力を恐ろしがつた。

宗助は二人で門の前に佇たたずんでいる時、彼らの影が折れ曲つて、半分ばかり土塀どべいに映つたのを記憶していた。御米の影が蝙蝠傘こつもりがさで遮さえぎられて、頭の代りに不規則な傘の形が壁に落ちたのを記憶していた。少し傾むきかけた初秋はつあきの日が、じりじり二人を照り付けたの

を記憶していた。御米は傘を差したまま、それほど涼しくもない柳の下に寄った。宗助は白い筋を縁ふちに取った紫の傘の色と、まだ褪さめ切らない柳の葉の色を、一步遠退とわのいて眺め合あわした事を記憶していた。

今考えるとすべてが明らかであった。したがって何らの奇もなかった。二人は土塀の影から再び現われた安井を待ち合わせて、町の方へ歩いた。歩く時、男同志は肩を並べた。御米は草履ぞうりを引いて後あとに落ちた。話も多くは男だけで受持う持ちった。それも長くはなかった。途中まで来て宗助は一人分れて、自分の家へ帰ったからである。

けれども彼の頭にはその日の印象が長く残っていた。家へ帰って、湯に入つて、灯火ともしびの前に坐つた後のちにも、折々色の着いた平たい画えとして、安井と御米の姿が眼先にちらついた。そのみか床とこに入いつてからは、妹いもだと云つて紹介された御米が、果して本当の妹であろうかと考え始めた。安井に問いつめない限り、この疑うたがいの解決は容易でなかったけれども、臆お断くだんはすぐついた。宗助はこの臆断を許すべき余地が、安井と御米の間に充分存在し得るだろうぐらいに考えて、寝ながらおかしく思った。しかもその臆断に、腹ていかいの中で徊わする事の馬鹿馬鹿しいのに気がついて、消し忘れた洋灯ランプをようやくふつと吹き消した。

こう云う記憶の、しだいに沈んで痕あと迹かたもなくなるまで、御互の顔を見ずに過すほど、

宗助と安井とは疎遠ではなかった。二人は毎日学校で出合うばかりでなく、依然として夏休み前の通り往来を続けていた。けれども宗助が行くたびに、御米は必ず挨拶に出るとは限らなかつた。三返に一返ぐらい、顔を見せないで、始ての時のように、ひっそり隣りの室に忍んでいる事もあつた。宗助は別にそれを気にも留めなかつた。それにもかかわらず、二人はようやく接近した。幾何ならずして冗談を云うほどの親みができた。

そのうちまた秋が来た。去年と同じ事情の下に、京都の秋を繰り返す興味に乏しかつた宗助は、安井と御米に誘われて茸狩に行つた時、朗らかな空気のうちにもまた新しい香を見出した。紅葉も三人で観た。嵯峨から山を抜けて高雄へ歩く途中で、御米は着物の裾を捲くつて、長襦袢だけを足袋の上まで牽いて、細い傘を杖にした。山の上から一町も下に見える流れに日が射して、水の底が明らかに遠くから透かされた時、御米は「京都は好い所ね」と云つて二人を顧みた。それをいっしよに眺めた宗助にも、京都は全く好い所のように思われた。

こう揃つて外へ出た事も珍らしくはなかつた。家の中で顔を合わせる事はなおしばしばあつた。或時宗助が例のごとく安井を尋ねたら、安井は留守で、御米ばかり淋しい秋の中に取り残されたように一人坐つていた。宗助は淋しいでしょうと云つて、つい座敷に上り

込んで、一つ火鉢ひばちの両側に手を翳かざしながら、思ったより長話をして帰った。或時宗助がぽかんとして、下宿の机に倚よりかかったまま、珍らしく時間の使い方に困っていると、ふと御米がやって来た。そこまで買物に出たから、ついでに寄ったんだとか云って、宗助の薦すすめる通り、茶を飲んだり菓子を食べたり、緩ゆるくり寛くつろいだ話をして帰った。

こんな事が重なって行くうちに、木の葉こはがいつの間まにか落ちてしまった。そうして高い山の頂いただきが、ある朝真白に見えた。吹き曝さらしの河原かわらが白くなって、橋を渡る人の影が細く動いた。その年の京都の冬は、音を立てずに肌を透とおす陰いんにん忍にんな質たちのものであった。安井はこの悪性の寒気かんきにあてられて、苛ひどいインフルエンザに罹かかった。熱が普通の風邪かぜよりもよほど高かったので、始は御米も驚ろいたが、それは一時いちじの事で、すぐ退ひいたには退いたから、これでもう全快と思うと、いつまで立っても判然はつきりしなかった。安井は繭もちのような熱からに絡からみつかれて、毎日その差し引きに苦しんだ。

医者は少し呼吸器を冒おかされていようだからと云って、切に転地を勧めた。安井は心ならず押入の中の柳行李やなぎこりに麻繩あさなわを掛けた。御米は手提鞆てさげかばんに錠じょうをおろした。宗助は二人を七条まで見送って、汽車が出るまで室へやの中へ這入はいって、わざと陽気な話をした。プラットフォームへ下りた時、窓の内から、

「遊びに来たまえ」と安井が云った。

「どうぞ是非」と御米が言つた。

汽車は血色の好い宗助の顔をそろそろ過ぎて、たちまち神戸の方に向つて煙を吐いた。

病人は転地先で年を越した。絵端書は着いた日から毎日のように寄こした。それにいつでも遊びに來いと繰り返して書いてない事はなかつた。御米の文字も一二行ずつは必ず交つていた。宗助は安井と御米から届いた絵端書を別にして机の上に重ねて置いた。外から帰るとそれが直眼に着いた。時々はそれを一枚ずつ順に読み直したり、見直したりした。しまいにもうすっかり癒つたから帰る。しかしせつかくここまで來ながら、ここで君の顔を見ないのは遺憾だから、この手紙が着きしだい、ちよつとでいいから來いという端書が來た。無事と退屈を忌む宗助を動かすには、この十数言で充分であつた。宗助は汽車を利用してその夜のうちに安井の宿に着いた。

明るい灯火の下に三人が待設けた顔を合わせた時、宗助は何よりもまず病人の色沢の回復して來た事に気がついた。立つ前よりもかえて好いくらいに見えた。安井自身もそんな心持がすると云つて、わざわざ襯衣の袖を捲り上げて、青筋の入った腕を独で撫でていた。御米も嬉しそうに眼を輝かした。宗助にはその活潑な目遣がことに珍らしく受

取れた。今まで宗助の心に映じた御米は、色と音の撩りょうらん乱なする裏なかに立つてさえ、極めて落ちついていた。そうしてその落ちつきの大部分はやたらに動かさない眼の働らきから来た。たしかな思われなかつた。

次の日三人は表へ出て遠く濃い色を流す海を眺めた。松の幹から脂やにの出る空気を吸つた。冬の日短く空を赤裸々に横切つておとなしく西へ落ちた。落ちる時、低い雲を黄に赤に竈かまどの火の色に染めて行つた。風は夜に入つても起らなかつた。ただ時々松を鳴らして過ぎた。暖かい好い日が宗助の泊っている三日の間続いた。

宗助はもつと遊んで行きたいと云つた。御米はもつと遊んで行きましようと思つた。安井は宗助が遊びに来たから好い天気になつたんだらうと思つた。三人はまた行李こつりと鞆かばんを携たづえて京都へ歸つた。冬は何事もなく北風を寒い国へ吹きやつた。山の上を明らかにした斑まだらな雪がしだいに落ちて、後から青い色が一度に芽を吹いた。

宗助は当時を憶おもい出すたびに、自然の進行がそこではたりと留まつて、自分も御米もたちまち化石してしまつたら、かえつて苦はなかつたらうと思つた。事は冬の下から春が頭かたを擡もげる時分に始まつて、散り尽した桜の花が若葉に色を易かえる頃に終つた。すべてが生し死よの戦たたかであつた。青竹を炙あぶつて油を絞しぼるほどの苦しみであつた。大風は突然不用意の二

人を吹き倒したのである。二人が起き上がった時はどこもかしこもすでに砂だらけであったのである。彼らは砂だらけになった自分達を認めた。けれどもいつ吹き倒されたかを知らなかつた。

世間は容赦なく彼らに徳義上の罪を背負しよわした。しかし彼ら自身は徳義上の良心に責められる前に、いったん茫然ぼうぜんとして、彼らの頭が確たしかであるかを疑つた。彼らは彼らの眼に、不徳義な男女なんによとして恥はずべく映る前に、すでに不合理な男女として、不可思議に映つたのである。そこに言訳らしい言訳が何にもなかつた。だからそこに云うに忍びない苦痛があつた。彼らは残酷な運命が気紛きまぐれに罪もない二人の不意を打つて、面白半分おとしあなの突つき落したのを無念に思つた。

曝露ばくろの日がまともに彼らの眉間みけんを射たとき、彼らはすでに徳義的に痙攣けいれんの苦痛を乗り切つていた。彼らは蒼白あおしろい額を素直に前に出して、そこにほのおに似た烙印やくいんを受けた。そうして無形の鎖で繋がれたまま、手を携たずさえてどこまでも、いつしよに歩調を共にしなければならぬ事を見出した。彼らは親を棄すてた。親類を棄てた。友達を棄てた。大きく云えば一般の社会を棄てた。もしくはそれらから棄てられた。学校からは無論棄てられた。ただ表向だけはこちらから退学した事になって、形式の上に人間らしい迹あとを留とどめた。

これが宗助と御米の過去であつた。

十五

この過去を負わされた二人は、広島へ行つても苦しんだ。福岡へ行つても苦しんだ。東京へ出て来ても、依然として重い荷に抑おさえつけられていた。佐伯さえきの家とは親しい関係が結ばなくなつた。叔父は死んだ。叔母と安之助やすのすけはまだ生きているが、生きている間に打ち解けた交際つきあいはできないほど、もう冷淡の日を重ねてしまった。今年はまだ歳暮にも行かなかつた。向むこうからも来なかつた。家いえに引取つた小六ころうくさえ腹の底では兄に敬意を払つていなかった。二人が東京へ出たてには、単純な小供の頭から、正直に御米およねを悪にくんでいた。御米にも宗助そうすけにもそれがよく分つていた。夫婦は日の前に笑み、月の前に考えて、静かな年を送り迎えた。今年ももう尽きる間際まぎわまで来た。

とおりちよう
通 町では暮の内から門かどなみそら並揃しめかざりの注連飾しめかざりをした。往来の左右に何十本となく並んだ、軒より高い笹ささが、ことごとく寒い風に吹かれて、さらさらと鳴つた。宗助も二尺余りの細い松を買つて、門の柱に釘くぎ付つけにした。それから大きな赤い橙だいたいを御供おそなえの上に載のせて、

床の間に据えた。床にはいかがわしい墨画の梅が、蛤の格好をした月を吐いてかかっていた。宗助にはこの変な軸の前に、橙と御供を置く意味が解らなかつた。

「いったいこりや、どう云う了見だね」と自分で飾りつけた物を眺めながら、御米に聞いた。御米にも毎年こうする意味はとんと解らなかつた。

「知らないわ。ただそうしておけばいいのよ」と云つて台所へ去つた。宗助は、

「こうしておいて、つまり食うためか」と首を傾けて御供の位置を直した。

伸餅は夜業に俎を茶の間まで持ち出して、みんなで切つた。庖丁が足りないので、

宗助は始からしまいまで手を出さなかつた。力のあるだけに小六が一番多く切つた。その代り不同も一番多かつた。中には見かけの悪い形のものも交つた。変なのがでできるたびに清が声を出して笑つた。小六は庖丁の背に濡布巾をあてがって、硬い耳の所を断ち切りながら、

「格好はどうでも、食いさいすればいいんだ」と、うんと力を入れて耳まで赤くした。

そのほかに迎年の支度としては、小殿原を熬つて、煮染を重詰にするくらいなものであつた。大晦日の夜に入つて、宗助は挨拶かたがた屋賃を持って、坂井の家に行った。わざと遠慮して勝手口へ回ると、摺硝子へ明るい灯が映つて、中はざわざわしていた。

上り框あがまちに帳面を持って腰をかけた掛取らしい小僧が、立つて宗助に挨拶をした。茶の間には主人も細君もいた。その片隅かたすみに印しるし袷しぼんでん天てんを着た出入でいりのものらしいのが、下を向いて、小さい輪飾わかざりをいくつも拵こしらえていた。傍そばに讓ゆる葉はりと裏うら白しろと半紙はんしと鈹はさまが置いてあった。若い下女が細君の前に坐つて、釣銭らしい札さつと銀貨を疊かさに並べていた。主人は宗助を見て、「いやどうも」と云つた。「押しつまつてさぞ御お忙いそしいでしょう。この通りごたごたです。さあどうぞこちらへ。何ですな、御互ごごに正月にはもう飽あきましたな。いくら面白いものでも四十辺べん以上繰いり返やすと厭いやになりますね」

主人は年の送迎わすに煩わづらわしいような事を云つたが、その態度にはどこと指してくさくさしたところは認められなかつた。言葉遣ことばづかいは活か澆つぱつであつた。顔はつやつやしていた。晩ばん食しょくに傾いけた酒いざわいの勢いきおいが、まだ頬ほの上に差しているごとく思われた。宗助は貰たい煙たばこ草こをして二三十分ばかり話して歸つた。

家うちでは御米ごまいが清しみづを連れて湯に行くとか云つて、石鹼シヤボン入いれを手てぬぐい拭くに包くるんで、留守居くしうを頼たのむ夫かえりの歸かえりを待ち受けていた。

「どうなすつたの、随分長かつたわね」と云つて時計を眺めた。時計はもう十時近くであつた。その上清は湯の戻りに髪かみ結むすの所へ回かみゆいつて頭こしらを拵こしらえるはずださうであつた。閑静な

宗助の活計も、大晦日にはそれ相應の事件が寄せて来た。

「払はもう皆済んだのかい」と宗助は立ちながら御米に聞いた。御米はまだ薪屋が一軒残っていると答えた。

「来たら払ってちようだい」と云つて懐の中から汚れた男持の紙入と、銀貨入の蠶口を出して、宗助に渡した。

「小六はどうした」と夫はそれを受取ながら云つた。

「先刻大晦日の夜の景色を見て来るつて出て行つたのよ。随分御苦労さまね。この寒いのに」と云う御米の後に追いて、清は大きな声を出して笑つた。やがて、

「御若いから」と評しながら、勝手口へ行つて、御米の下駄を揃えた。

「どこの夜景を見る気なんだ」

「銀座から日本橋通のだから」

御米はその時もう框から下りかけていた。すぐ腰障子を開ける音がした。宗助はその音を聞き送つて、たった一人火鉢の前に坐つて、灰になる炭の色を眺めていた。彼の頭には明日の日の丸が映つた。外を乗り回す人の絹帽子の光が見えた。洋剣の音だの、馬の嘶だの、遣羽子の声が聞えた。彼は今から数時間の後また年中行事のうちで、もつとも

人の心を新にすべく仕組まれた景物に出逢わなければならなかった。

陽気そうに見えるもの、賑かそうに見えるものが、幾組となく彼の心の前を通り過ぎたが、その中で彼の臂を把つて、いっしよに引張つて行こうとするものは一つもなかった。

彼はただ饗宴に招かれない局外者として、酔う事を禁じられたごとくに、また酔う事

を免かれた人であった。彼は自分と御米の生命を、毎年平凡な波瀾のうちに送る以上に、

面 前 大した希望も持っていなかった。こうして忙がしい大晦日に、一人家を守る静か

さが、ちようど彼の平生の現実を代表していた。

御米は十時過に帰つて来た。いつもより光沢の好い頬を灯に照らして、湯の温のまだ抜けない襟を少し開けるように襦袢を重ねていた。長い襟首がよく見えた。

「どうも込んで込んで、洗う事も桶を取る事もできないくらいなの」と始めて緩くり息を吐いた。

清の帰つたのは十一時過であつた。これも綺麗な頭を障子から出して、ただ今、どうも遅くなりましたと挨拶をしたついでに、あれから二人とか三人とか待ち合したと云う話をした。

ただ小六だけは容易に帰らなかつた。十二時を打ったとき、宗助はもう寝ようと云い出

した。御米は今日に限って、先へ寝るのも変なものだと思つて、できるだけ話を繋いでいた。小六は幸にして間もなく帰つた。日本橋から銀座へ出てそれから、水天宮の方へ廻つたところが、電車が込んで何台も待ち合わせたために遅くなつたという言訳をした。

白牡丹へ這入つて、景物の金時計でも取ろうと思つたが、何も買うものがなかつたので、仕方なしに鈴の着いた御手玉を一箱買つて、そうして幾百となく器械で吹き上げられる風船を一つ攫んだら、金時計は当らないで、こんなものがあつたと云つて、袂から俱樂部洗粉を一袋出した。それを御米の前に置いて、

「姉さん上げましょう」と云つた。それから鈴を着けた、梅の花の形に縫つた御手玉を宗助の前に置いて、

「坂井の御嬢さんにでも御上げなさい」と云つた。

事に乏しい一大家族の大晦日は、それで終りを告げた。

十六

正月は二日目の雪を率て注連飾の都を白くした。降りやんだ屋根の色がもとに復る前、

夫婦はトタンばりのひざしすべの庇を滑り落ちる雪の音に幾遍か驚ろかされた。夜半にはどきと云う響がことにはなはだしかった。小路のぬかるみ泥濘は雨上りと違つて一日や二日では容易に乾かなかつた。外から靴を汚して帰つて来る宗助が、御米の顔を見るたびに、

「こりやいけない」と云いながら玄関へ上つた。その様子があたかも御米を路を悪くした責任者と見做みなしている風に受取られるので、御米はしまいに、

「どうも済みません。本当に御氣の毒さま」と云つて笑い出した。宗助は別に返すべき冗談ようだんも有もたなかつた。

「御米ここから出かけるには、どこへ行くにも足駄あしだを穿はかなくつちやならないように見えるだろう。ところが下町へ出ると大違だ。どの通もどの通もからからで、かえつて埃ほこりが立つくらいだから、足駄なんぞ穿はいちやきまりが悪くつて歩けやしない。つまりこう云う所に住んでゐる我々は一世紀がた後おくれる事になるんだね」

こんな事を口にする宗助は、別に不足らしい顔もしていなかつた。御米も夫の鼻の穴を潜くぐる煙草たばこの煙けむを眺めるくらいな気で、それを聞いていた。

「坂井さんへ行つて、そう云つていらつしやいな」と軽い返事をした。

「そうして屋賃でも負けて貰う事にしよう」と答えたまま、宗助はついに坂井へは行かな

かった。

その坂井には元日の朝早く名刺を投げ込んだだけで、わざと主人の顔を見ずに門を出たが、義理のある所を一日のうちにはほほ片づけて夕方帰って見ると、留守の間に坂井がちゃんと来ていたので恐縮した。二日は雪が降っただけで何事もなく過ぎた。三日目の日暮ひくれに下女が使に来て、御閑おひまならば、旦那様と奥さまと、それから若旦那様には是非今晚御遊ごゆうびにいらつしやるようにと云つて帰つた。

「何をするんだらう」と宗助は疑ぐつた。

「きつと歌加留多うたがるたでしょう。小供が多いから」と御米が云つた。「あなた行つていらつしやい」

「せつかくだから御前行くが好い。おれは歌留多は久しく取らないから駄目だ」

「私も久しく取らないから駄目ですわ」

二人は容易に行こうとはしなかつた。しまいに、では若旦那がみんなを代表して行くが宜よかろうという事になつた。

「若旦那行つて来い」と宗助が小六ころうくに云つた。小六は苦笑にがわらいして立つた。夫婦は若旦那と云う名を小六こむに冠かむらせる事を大変な滑稽こっけいのように感じた。若旦那と呼ばれて、苦笑い

する小六の顔を見ると、等しく声を出して笑い出した。小六は春らしい空気の中うちから出た。そうして一町ほどの寒さを横切つて、また春らしい電灯の下もとに坐つた。

その晩小六は大晦日おおみそかに買った梅の花の御手玉おてだまを袂たもとに入れて、これは兄から差上げますとわざわざ断つて、坂井の御嬢さんに贈物にした。その代り帰りには、福引に当つた小さな裸人形を同じ袂へ入れて来た。その人形の額が少し欠けて、そこだけ墨で塗つてあつた。小六は真面目まじめな顔をして、これが袖萩そではぎだそうですと云つて、それを兄夫婦の前に置いた。なぜ袖萩だか夫婦には分らなかつた。小六には無論分らなかつたのを、坂井の奥さんが町てに説明いねいしてくれたそうであるが、それでも腑ふに落ちなかつたので、主人がわざわざ半はん切きに洒落しゃれと本文ほんもんを並べて書いて、帰つたらこれを兄さんと姉さんに御見せなさいと云つて渡したとかいふ話であつた。小六は袂を探つてその書付を取り出して見せた。それに「此垣このかき一重ひとえが黒鉄くろがねの」と認めた後に括弧かっこをして、（此餓鬼額このがきたえが黒欠くろがけの）とつけ加えてあつたので、宗助と御米はまた春らしい笑を洩もらした。

「随分念の入つた趣しゆこ向むかだね。いったい誰かの考かんがえ」と兄が聞いた。

「誰たれですか」と小六はやつぱりつまらなそうな顔をして、人形をそこへ放り出したまま、自分の室へやに帰つた。

それから二三日して、たしか七日なぬかの夕方に、また例の坂井の下女が来て、もし御閑おひまならどうぞ御話にと、叮嚀ていねいに主人の命を伝えた。宗助と御米は洋灯ランプを点けてちようど晩食ばんめしを始めたところであつた。宗助はその時茶碗を持ちながら、

「春もようやく一段落が着いた」と語っていた。そこへ清が坂井からの口上を取り次いだので、御米は夫の顔を見て微笑した。宗助は茶碗を置いて、

「まだ何か催おしがあるのかい」と少し迷惑まゆそうな眉をした。坂井の下女に聞いて見ると、別に来客もなければ、何の支度もないという事であつた。その上細君は子供を連れて親類へ呼ばれて行つて留守だという話までした。

「それじゃ行こう」と云つて宗助は出掛けた。宗助は一般の社交を嫌きらつていた。やむを得なければ会合の席などへ顔を出す男でなかつた。個人としての朋友ともだちも多くは求めなかつた。訪問はする暇を有もたなかつた。ただ坂井だけは取除とりのけであつた。折々は用もないのにこつちからわざわざ出掛けて行つて、時を潰つぶして来る事さえあつた。その癖坂井は世の中でもつとも社交的人であつた。この社交的な坂井と、孤独な宗助が二人寄つて話ができるのは、御米にさえ妙に見える現象であつた。坂井は、

「あつちへ行きましょう」と云つて、茶の間を通り越して、廊下伝いに小さな書齋へ入つ

た。そこには棕櫚しゆろの筆で書いたような、大きな硬い字が五字ばかり床の間にかかっていた。棚たなの上に見事な白い牡丹ぼたんが活いけてあつた。そのほか机でも蒲団ふとんでもことごとく綺麗きれであつた。坂井は始め暗い入口に立つて、

「さあどうぞ」と云いながら、どこかぴちりと振ひつて、電気灯を点つけた。それから、

「ちよつと待ちたまえ」と云つて、燐寸マツチで瓦斯ガス暖炉だんろを焚たいた。瓦斯暖炉は室へやに比例したごく小さいものであつた。坂井はしかる後蒲団を薦すすめた。

「これが僕の洞窟どうくつで、面倒になるとここへ避難するんです」

宗助も厚い綿わたの上で、一種の静かさを感じた。瓦斯の燃える音が微かすかにしてしだいに背中からほかほか暖まつて来た。

「ここにいと、もうどことも交渉はない。全く気楽です。悠ゆうくりしていらつしやい。実際正月と云うものは予想外に煩瑣わづらいものです。私も昨日きのうまででほとんどへとへとに降参させられました。新年が停滞もたれているのは実に苦しいですよ。それで今日の午ひるから、とうとう塵世じんせいを遠ざけて、病氣になつてぐつと寝込みました。今しがた眼を覚さまして、湯に入つて、それから飯を食つて、煙草たばこを呑のんで、気がついて見ると、家内が子供を連れ親類へ行つて留守なんでしょう。なるほど静かなはずだと思ひましてね。すると今度は

急に退屈になったのです。人間も随分わがままなものですよ。しかしいくら退屈だって、この上おめでたいものを、見たり聞いたりしちや骨が折れますし、また御正月らしいものを呑んだり食つたりするのも恐れますから、それで、御正月らしくない、と云うと失礼だが、まあ世の中とあまり縁のないあなた、と云つてもまだ失敬かも知れないが、つまり一口に云うと、超然派ちようぜんはの一人いちにんと話しがして見なくなつたんで、それでわざわざ使を上げたような訳なんです」と坂井は例の調子で、ことごとくすらすらしらしたものであつた。宗助はこの楽天家の前では、よく自分の過去を忘れる事があつた。そうして時によると、自分も申し順当に発展して来たら、こんな人物になりはしなかつたらうかと考えた。

そこへ下女が三尺の狭い入口を開けて這入はいつて来たが、改ためて宗助に鄭重ていちょうな御辞儀をした上、木皿のような菓子皿のようなものを、一つ前に置いた。それから同じ物をもう一つ主人の前に置いて、一口もものを云わずに退さがった。木皿の上には護謨ゴム繻まりほどの大きな田舎饅頭いなかまんじゆうが一つ載のせてあつた。それに普通の倍以上もあると思われる楊枝ようじが添えてあつた。

「どうです暖かい内に」と主人が云つたので、宗助は始めてこの饅頭の蒸むして間もない新らしさに気がついた。珍らしそうに黄色い皮を眺ながめた。

「いやできたてじゃありません」と主人がまた云った。「実は昨夜ある所へ行つて、冗談だん半分に賞ほめたら、御土産おみやげに持つていらつしやいと云うから貰つて来たんです。その時は全く暖あつたかだつたんですがね。これは今上げようと思つて蒸むし返かへしたのです」

主人は箸はしとも楊枝ようじとも片のつかないもので、無雑作むぞうさくに饅頭まんとうを割つて、むしゃむしゃ食い始めた。宗助も饗ひんに倣ならつた。

その間に主人は昨夕ゆうべ行つた料理屋で逢つたとか云つて妙な芸者の話をした。この芸者はポケット論語が好きで、汽車へ乗つたり遊びに行つたりするときは、いつでもそれふところを懐ふところにして出るそうであつた。

「それでね孔子の門人のうちで、子路しろうが一番好すきだつて云うんですがね。そのいわれを聞くと、子路と云う男は、一つ何か教おすわつて、それをまだ行なわないうちに、また新しい事を聞くと苦にするほど正直だからだつて云うんです。実のところ私わたしも子路はあまりよく知らないから困つたが、何しろ一人好い人ができて、それと夫婦にならない前に、また新しく好い人ができると苦になるようなものじやないかつて、聞いて見たんです……」

主人はこんな事をはなだ気楽そうに述べ立てた。その話の様子からして考えると、彼のべつにこういう場所に出入しつにゆうして、その刺戟しげきにはどうに麻痺まひしながら、因習の結果、依

然として月に何度となく同じ事を繰り返しているらしかった。よく聞き糺ただして見ると、しかく平気な男も、時々は歓楽の飽満ほうまんに疲労して、書斎のなかで精神を休める必要が起るのだそうであつた。

宗助はそういう方面にまるで経験のない男ではなかつたので、強しいて興味を装よそおう必要もなく、ただ尋常な挨拶あいさつをするところが、かえつて主人の気に入るらしかった。彼は平凡な宗助の言葉のなかから、一種異彩のある過去を覗のぞくような素振そぶりを見せた。しかしそちらへは宗助が進みたがらない痕迹こんせきが少しでも出ると、すぐ話を転じた。それは政略よりもむしろ礼讓からであつた。したがつて宗助には毫ごうも不愉快を与えなかつた。

そのうち小六の噂うわさが出た。主人はこの青年について、肉身の兄が見逃すような新らしい観察を、二三有もつていた。宗助は主人の評語を、当ると当らないとに論なく、面白く聞いた。そのなかに、彼は年に合あわしては複雑な実用に適しない頭を有つていながら、年よりも若い単純な性情を平気で露あらわす子供じやないかという質問があつた。宗助はすぐそれを首肯うけがつた。しかし学校教育だけで社会教育のないものは、いくら年を取つてもその傾かたむきがあるだろうと答えた。

「さよう、それと反対で、社会教育だけあつて学校教育のないものは、随分複雑な性情を

發揮する代りに、頭はいつまでも小供ですからね。かえって始末が悪いかも知れない」

主人はここでちよつと笑つたが、やがて、

「どうです、私の所へ書生に寄こしちや、少しは社会教育になるかも知れない」と云つた。主人の書生は彼の犬が病気で病院へ這入る一カ月前とかに、徴兵検査に合格して入営したぎり今では一人もいないのだそうであつた。

宗助は小六の所置をつける好機会が、求めざるに先だつて、春と共に自から回つて来たのを喜こんだ。同時に、今まで世間に向つて、積極的に好意と親切を要求する勇気を有たなかつた彼は、突然この主人の申し出に逢つて少しまごつくくらい驚ろいた。けれどもできるならなりたけ早く弟を坂井に預けて置いて、この変動から出る自分の余裕に、幾分か安之助の補助を足して、そうして本人の希望通り、高等の教育を受けさせてやろうという分別をした。そこで打ち明けた話を腹藏なく主人にすると、主人はなるほどなるほどと聞いていられるだけであつたが、しまいに雑作なく、

「そいつは好いでしょう」と云つたので、相談はほぼその座で纏まつた。

宗助はそこで辞して帰ればよかつたのである。また辞して帰ろうとしたのである。ところが主人からまあ緩くりなさいと云つて留められた。主人は夜は長い、まだ宵だと云つて

時計まで出して見せた。實際彼は退屈らしかった。宗助も帰ればただ寝るよりほかに用のない身体からだなので、ついまた尻しつぽを据すえて、濃い煙草たばこを新らしく吹かし始めた。しまいには主人の例ならに倣ならつて、柔らかい座蒲團ざぶたんの上で膝ひざさえ崩くずした。

主人は小六の事に關聯して、

「いや弟おととなどを有あつていると、随分厄やっかい介かいなものですよ。私も一人やくざなのを世話をした覚わたくしがありますかね」と云つて、自分の弟が大学にいますとき金のかかった事などを、自分が学生時代の質しつぽく朴へさに比べていろいろ話した。宗助はこの派出はでずき好ずきな弟が、その後どんな径路けいりょを取とつて、どう発展したかを、氣味の悪い運命の意思いしを窺うかがう一端として、主人に聞いて見た。主人は卒然

「アドヴェンチュアラー
「冒ア険ド者ヴェ」と、頭しつぽも尾ぽもない一句を投なげるように吐ついた。

この弟は卒業後主人の紹介で、ある銀行に這はい入いつたが、何でも金を儲もけなくつちやいけないと口癖くちくせのように云いつていたそうで、日露戦争後間もなく、主人の留とめるのも聞きかずに、大いに発展して見たいとかとなえてついに満洲へ渡わたつたのだと云う。そこで何を始めるかと思うと、遼りょう河がを利用して、豆粕まめかす大豆だいずを船ふねで下くだす、大仕掛おほしげな運送業うんそうぎやを経営けいぎやうして、たちまち失敗してしまつたのださうである。元より当人は、資本主ではなかつたのだけれども、

いよいよという曉あかつきに、勘定して見ると大きな欠損と事がきまつたので、無論事業は継続する訳に行かず、当人は必然の結果、地位を失ったぎりになった。

「それから後私あわたしもどうしたかよく知らなかつたんですが、その後のちようやく聞いて見ると、驚ろきましたね。蒙古もうこへ這入うづつつて漂浪うろつしているんです。どこまで山気やまぎがあるんだか分らないで、私も少々劍けん呑のんになつてゐるんですよ。それでも離れているうちは、まあどうかしているだろうぐらいに思つて放はなつておきます。時たま音便たよりがあつたつて、蒙古もうこという所は、水に乏しい所で、暑い時には往来へ泥溝どぶの水を撒まくとかね、またはその泥溝の水が無くなると、今度は馬の小便を撒くとか、したがつてはなはだ臭いとか、まあそんな手紙うちやが来ただけですから、——そりやあ金の事も云つて来ますが、なに東京と蒙古だから打遣うちやつておけばそれまでです。だから離れてさえいれば、まあいいんですが、そいつが去年の暮突然出て来ましてね」

主人は思いついたように、床の柱にかけた、綺麗きれいな房のついた一種の裝飾物を取りおろした。

それは錦の袋はいに這入はいつた一尺ばかりの刀であつた。鞘さやは何なにとも知れぬ緑色の雲母きららのようなものでできていて、その所々が三カ所ほど巻いてあつた。中身は六寸ぐらいしかなかつ

た。したがって刃も薄かった。けれども鞘の格好はあたかも六角の檜の棒のように厚かった。よく見ると、柄の後に細い棒が二本並んで差さっていた。結果は鞘を重ねて離れないために銀の鉢巻をしたと同じであった。主人は

「土産にこんなものを持って来ました。蒙古刀だそうですね」と云いながら、すぐ抜いて見せた。後に差してあつた象牙のような棒も二本抜いて見せた。

「こりや箸ですよ。蒙古人は始終これを腰へぶら下げていて、いざ御馳走という段になると、この刀を抜いて肉を切つて、そうしてこの箸で傍から食うんだそうですね」

主人はことさらに刀と箸を両手に持つて、切つたり食つたりする真似をして見せた。宗助はひたすらにその精巧な作りを眺めた。

「まだ蒙古人の天幕に使うフェルトも貰いましたが、まあ昔の毛氈と変つたところもありませんね」

主人は蒙古人の上手に馬を扱う事や、蒙古犬の瘡せて細長くて、西洋のグレー・ハウンドに似ている事や、彼らが支那人のためにだんだん押し狭められて行く事や、——すべて近頃あつちから帰つたという弟に聞いたままを宗助に話した。宗助はまた自分のいまだかつて耳にした事のない話だけに、一々少なからぬ興味を有つてそれを聞いて行つた。その

うちに、元來この弟は蒙古で何をしているのだろうという好奇心が出た。そこでちよつと主人に尋ねて見ると、主人は、

アドヴェンチュアラ

「冒険者」と再び先刻の言葉

を力強く繰り返した。「何をしているか分らない。

私には、牧畜をやっています。しかも成功していますと云うんですがね、いつこう当にはなりません。今までもよく法螺を吹いて私を欺したもんです。それに今度東京へ出て来た用事と云うのがよつほど妙です。何とか云う蒙古王のために、金を二万円ばかり借りたい。もし借してやらないと自分の信用に關わるつて奔走しているんですからね。そのとつぱじめに捕まったのは私だが、いくら蒙古王だつて、いくら広い土地を抵当にするつたつて、蒙古と東京じゃ催促さえできやしませんもの。で、私が断ると、蔭へ廻つて妻に、兄さんはあれだから大きな仕事ができつこないつて、威張っているんです。しようがない」

主人はここで少し笑つたが、妙に緊張した宗助の顔を見て、

「どうです一遍逢つて御覧になつちや、わざわざ毛皮の着いただぶだぶしたものなんか着て、ちよつと面白いですよ。何なら御紹介しましょう。ちよつと明後日の晩呼んで飯を食わせる事になつているから。——なに引つ掛つちやいけませんかね。黙つて向に喋舌らしで、聞いている分には、少しも危険はありません。ただ面白いだけです」としきりに勧め

出した。宗助は多少心を動かした。

「おいでになるのは御令弟だけですか」

「いやほかに一人弟の友達で向からいつしよに来たものが、来るはずになっていきます。安井とか云つて私はまだ逢つた事もない男ですが、弟がしきりに私に紹介したがるから、実はそれで二人を呼ぶ事にしたんです」

宗助はその夜蒼い顔をして坂井の門を出た。

十七

宗助と御米の一生を暗く彩どつた関係は、二人の影を薄くして、幽霊のような思はどこかに抱かしめた。彼らは自己の心のある部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでいるのを、仄かに自覚しながら、わざと知らぬ顔に互と向き合つて年を過した。

当初彼らの頭脳に痛く応えたのは、彼らの過が安井の前途に及ぼした影響であつた。二人の頭の中で沸き返つた凄い泡のようなものがようやく静まつた時、二人は安井もまた半途で学校を退いたという消息を耳にした。彼らは固より安井の前途を傷けた原因をなした

に違なかつた。次に安井が郷里に帰つたという噂うわさを聞いた。次に病氣に罹かつて家に寝てい
るといふ報知しらせを得た。二人はそれを聞きたびに重い胸を痛めた。最後に安井が満洲に行つ
たと云う音信たよりが来た。宗助は腹の中で、病氣はもう癒なつたのだらうかと思つた。または満
洲の方が嘘うそではなからうかと考えた。安井は身体からだから云つても、性質から云つても、満
洲や台湾に向く男ではなかつたからである。宗助はできるだけ手を回して、事の真疑を探
つた。そうして、或る関係から、安井がたしかに奉天にいる事を確め得た。同時に彼の健
康で、活潑かつぱつで、多忙である事も確め得た。その時夫婦は顔を見合せて、ほつという息を
吐ついた。

「まあよかろう」と宗助が云つた。

「病氣よりはね」と御米が云つた。

二人はそれから以後安井の名を口にするのを避けた。考え出す事さえもあえてしなかつ
た。彼らは安井を半途で退学させ、郷里へ帰らせ、病氣に罹からせ、もしくは満洲へ駆かりや
つた罪に対して、いかに悔恨の苦しみを重ねても、どうする事もできない地位に立つてい
たからである。

「御米、御前信仰の心が起つた事があるかい」と或時宗助が御米に聞いた。御米は、ただ、

「あるわ」と答えただけで、すぐ「あなたは」と聞き返した。

宗助は薄笑いをしたがり、何とも答えなかった。その代り推して、御米の信仰について、詳しい質問も掛けなかった。御米には、それが仕合せかも知れなかった。彼女はその方面に、これというほど判然した凝り整った何物も有っていなかったからである。二人はとかくして会堂の腰掛にも倚らず、寺院の門も潜らずに過ぎた。そうしてただ自然の恵から来る月日と云う緩和剤の力だけで、ようやく落ちついた。時々遠くから不意に現れる訴も、苦しみとか恐れとかいう残酷の名を付けるには、あまり微かに、あまり薄く、あまりに肉体と慾得を離れ過ぎるようになった。必竟ずるに、彼らの信仰は、神を得なかつたため、仏に逢わなかつたため、互を目標として働らいた。互に抱き合つて、丸い円を描き始めた。彼らの生活は淋しいなりに落ちついて来た。その淋しい落ちつきのうち、一種の甘い悲哀を味わった。文芸にも哲学にも縁のない彼らは、この味を舐め尽しながら、自分で自分の状態を得意がつて自覚するほどの知識を有たなかつたから、同じ境遇にある詩人や文人などよりも、一層純粹であつた。——これが七日の晩に坂井へ呼ばれて、安井の消息を聞くまでの夫婦の有様であつた。

その夜宗助は家に帰つて御米の顔を見るや否や、

「少し具合が悪いから、すぐ寝よう」と云つて、火鉢ひばちに倚よりながら、帰かえりを待ち受けていた御米を驚ろかした。

「どうなすつたの」と御米は眼を上げて宗助を眺ながめた。宗助はそこに突つ立っていた。

宗助が外から歸つて来て、こんな風をするのは、ほとんど御米の記憶にないくらい珍らしかつた。御米は卒然何とも知れない恐怖の念に襲おそわれたごとくに立ち上がったが、ほとんど器械的に、戸棚とだなから夜具蒲団やぐふとんを取り出して、夫の云いつけ通り床を延べ始めた。その間宗助はやつぱり懐ふところ手てをして傍そばに立っていた。そうして床が敷けるや否や、そこそこに着物を脱ぎ捨てて、すぐその中に潜もぐり込んだ。御米は枕元まくらもとを離れ得なかつた。

「どうなすつたの」

「何だか、少し心持が悪い。しばらくこうしてじつとしていたら、よくなるだろう」

宗助の答は半ば夜着の下から出た。その声こゑが籠こもつたように御米の耳に響いた時、御米は済まない顔をして、枕元まくらもとに坐すわつたなり動かなかつた。

「あつちへ行つていてもいいよ。用があれば呼ぶから」

御米はようやく茶の間へ歸つた。

宗助は夜具を被かぶつたまま、ひとり硬くなつて眼を眠ねむっていた。彼はこの暗い中で、坂井

から聞いた話を何度となく反覆した。彼は満洲にいる安井の消息を、家主たる坂井の口を通して知ろうとは、今が今まで予期していなかった。もう少しの事で、その安井と同じ家主の家へ同時に招かれて、隣り合せか、向い合せに坐る運命になろうとは、今夜晩食を済ますまで、夢にも思いがけなかった。彼は寝ながら過去二三時間の経過を考えて、そのクライマックスが突如として、いかにも不意に起つたのを不思議に感じた。かつ悲しく感じた。彼はこれほど偶然な出来事を借りて、後から断りなしに足絡をかけなければ、倒す事のできないほど強いものは、自分ながら任じていなかったのである。自分のような弱い男を放り出すには、もつと穩当な手段でたくさんでありそうなものだと思つていたのである。

小六ころうくから坂井の弟、それから満洲、蒙古もうこ、出京、安井、——こう談話の迹を辿れば辿るほど、偶然の度はあまりにはなはだしかった。過去の痛恨を新あらたにすべく、普通の人が減多めつたに出逢わないこの偶然に出逢うために、千百人のうちから撰えり出されなければならないほどの人物であつたかと思つと、宗助は苦しかった。また腹立たしかつた。彼は暗い夜着の中で熱い息を吐ついた。

この二三年の月日でようやく癒なほりかけた創口きずぐちが、急に疼うずき始めた。疼うずくに伴つれて熱ほてつ

て来た。再び創口が裂けて、毒のある風が容赦なく吹き込みそうになった。宗助はいつそのこと、万事を御米に打ち明けて、共に苦しみを分つて貰おうかと思った。

「御米、御米」と二声呼んだ。

御米はすぐ枕元へ来て、上から覗き込むように宗助を見た。宗助は夜具の襟から顔を全く出した。次の間の灯が御米の頬を半分照らしていた。

「熱い湯を一杯貰おう」

宗助はとうとう言おうとした事を言い切る勇氣を失つて、嘘を吐いてごまかした。

翌日宗助は例のごとく起きて、平日と変わる事なく食事を済ました。そうして給仕をしてくれる御米の顔に、多少安心の色が見えたのを、嬉しいような憐れなような一種の情緒をもつて眺めた。

「昨夕は驚ろいたわ。どうなすつたのかと思つて」

宗助は下を向いて茶碗に注いだ茶を呑んだだけであつた。何と答えていいか、適当な言葉を見出さなかつたからである。

その日は朝からから風が吹き荒んで、折々埃と共に行く人の帽を奪つた。熱があると悪いから、一日休んだらと云う御米の心配を聞き捨てにして、例の通り電車へ乗つた宗助は、

風の音と車の音の中に首を縮めて、ただ一つ所を見つめていた。降りる時、ひゅうという音がして、頭の上の針線が鳴ったのに気がついて、空を見たら、この猛烈な自然の力の狂う間に、いつもより明らかな日がのそりと出ていた。風は洋袴の股を冷たくして過ぎた。宗助にはその砂を捲いて向うの堀の方へ進んで行く影が、斜めに吹かれる雨の脚のように判然見えた。

役所では用が手に着かなかつた。筆を持って頬杖を突いたまま何か考えた。時々は必要な墨を妄りに磨りおろした。煙草はむやみに呑んだ。そうしては、思い出したように窓硝子を通して外を眺めた。外は見るたびに風の世界であつた。宗助はただ早く帰りたいかつた。

ようやく時間が来て家へ帰つたとき、御米は不安らしく宗助の顔を見て、

「どうもなくなつて」と聞いた。宗助はやむを得ず、どうもないが、ただ疲れたと答えて、すぐ炬燵の中へ入つたなり、晩食まで動かなかつた。そのうち風は日と共に落ちた。昼の反動で四隣は急にひっそり静まつた。

「好い案排ね、風が無くなつて。昼間のように吹かれると、家に坐つていても何だか氣味が悪くつてしょうがないわ」

御米の言葉には、魔物でもあるかのように、風を恐れる調子があつた。宗助は落ちついて、

「今夜は少し暖たかいようだね。穏やかで好い御正月だ」と云つた。飯を済まして煙草を一本吸う段になつて、突然、

「御米、寄席へでも行つて見ようか」と珍らしく細君を誘つた。御米は無論否む理由を有たなかつた。小六は義太夫などを聞くより、宅にいて餅でも焼いて食つた方が勝手だというので、留守を頼んで二人出た。

少し時間が遅れたので、寄席はいっぱいであつた。二人は座蒲団を敷く余地もない一番後の方に、立膝をするように割り込まして貰つた。

「大変な人ね」

「やっぱり春だから入るんだろう」

二人は小声で話しながら、大きな部屋にぎつしり詰まつた人の頭を見回した。その頭のうちで、高座に近い前の方は、煙草の煙で霞んでるようにぼんやり見えた。宗助にはこの累々たる黒いものが、ことごとくこう云う娯楽の席へ来て、面白く半夜を潰す事のできる余裕のある人らしく思われた。彼はどの顔を見ても羨ましかつた。

彼は高座の方を正視して、熱心に浄瑠璃を聞こうと力めた。けれどもいくら力めても面白くならなかった。時々眼を外らして、御米の顔を偷み見た。見るたびに御米の視線は正しい所を向いていた。傍に夫のいる事はほとんど忘れて、真面目に聴いているらしかった。宗助は羨やましい人のうちに、御米まで勘定しなければならなかった。

中入の時、宗助は御米に、

「どうだ、もう帰ろうか」と云い掛けた。御米はその唐突なのに驚ろかされた。

「厭なの」と聞いた。宗助は何とも答えなかった。御米は、

「どうでもいいわ」と半分夫の意に忤らわれないような挨拶をした。宗助はせっかく連れて来た御米に対して、かえって気の毒な心が起った。とうとうしまいまで辛抱して坐っていた。

家へ帰ると、小六は火鉢の前に胡坐を掻いて、背表紙の反り返るのも構わずに、手に持った本を上から翳して読んでいた。鉄瓶は傍へ卸したなり、湯は生温るく冷めてしまった。盆の上に焼き余りの餅が三切か四片載せてあった。網の下から小皿に残った醤油の色が見えた。

小六は席を立って、

「面白かったですか」と聞いた。夫婦は十分ほど身体からだを炬燵こたつで暖めた上すぐ床へ入った。

翌日になつても宗助の心に落ちつきが来なかつた事は、ほほ前の日と同じであつた。役所が退ひけて、例の通り電車へ乗つたが、今夜自分と前後して、安井が坂井の家へ客に来ると云う事を想像すると、どうしても、わざわざその人と接近するために、こんな速力うちで、家へ歸かへつて行くのが不合理に思われた。同時に安井はその後どんなに変化したらうと思つたと、よそから一目彼の様子が眺ながめたくもあつた。

坂井が一昨日おとといの晩、自分の弟おととを評して、一口に「冒険者」と云つた、その音おんが今宗助の耳に高く響き渡つた。宗助はこの一語の中に、あらゆる自暴と自棄と、不平と憎そ悪うと、乱倫と悖はい徳とくと、盲断と決行とを想像して、これらの一いっ角かくに触れなければならぬほどの坂井の弟と、それと利害を共にすべく満洲からいっしょに出て来た安井が、いかなる程度の人物になつたかを、頭の中で描えがいて見た。描かれた画えは無む論ろん冒アドヴェンチュアラー険アドヴェンチュアラー者者の字面じづらの許す範囲内で、もつとも強い色彩を帯びたものであつた。

かように、墮落の方面をとくに誇張した冒険者アドヴェンチュアラーを頭の中で拵こしらえ上げた宗助は、その責任を自身一人で全く負わなければならぬような気がした。彼はただ坂井へ客に来る安井の姿を一目見て、その姿から、安井の今こんにち日の人格を髣髴ほうふつしたかつた。そうして、

自分の想像ほど彼は墮落していないという慰藉を得たかった。

彼は坂井の家の傍に立つて、向に知れずに、他を窺うような便利な場所はあるまいかと考えた。不幸にして、身を隠すべきところを思いつき得なかつた。もし日が落ちてから来るとすれば、こちらが認められない便宜があると同時に、暗い中を通る人の顔の分らない不都合があつた。

そのうち電車が神田へ来た。宗助はいつもの通りそこで乗り換えて家の方へ向いて行くのが苦痛になつた。彼の神経は一步でも安井の来る方角へ近づくに堪えなかつた。安井をよそながら見たいという好奇心は、始めからさほど強くなかつただけに、乗換の間際になつて、全く抑えつけられてしまつた。彼は寒い町を多くの人のごとく歩いた。けれども多くの人のごとくに判然した目的は有つていなかつた。そのうち店に灯が点いた。電車も灯火を照もした。宗助はある牛肉店に上がつて酒を呑み出した。一本は夢中に呑んだ。二本目は無理に呑んだ。三本目にも酔えなかつた。宗助は背を壁に持たして、酔つて相手のない人のような眼をして、ぼんやりどこかを見つめていた。

時刻が時刻なので、夕飯を食いに来る客は入れ代り立ち代り来た。その多くは用弁的に飲食を済まして、さつさと勘定をして出て行くだけであつた。宗助は周囲

のざわつく中に黙然もくねんとして、他の倍も三倍も時を過ひとごしたごとくに感じた末、ついに坐り切れずに席を立つた。

表は左右から射す店の灯で明らかであつた。軒先を通る人は、帽も衣装いしやうもはつきり物色する事ができた。けれども広い寒さを照らすには余りに弱過ぎた。夜は戸とごとの瓦斯ガスと電灯を閑かんきやく却くして、依然として暗く大きく見えた。宗助はこの世界と調和するほどな黒味の勝つた外套マントに包まれて歩いた。その時彼は自分の呼吸する空気さえ灰色になつて、肺の中の血管に触れるような気がした。

彼はこの晩に限つて、ベルを鳴らして忙がしそうに眼の前を往つたり来たりする電車を利用する考かんがえが起らなかつた。目的を有もつて途みちを行く人と共に、抜目なく足を運ばす事を忘れた。しかも彼は根の締しまらない人間として、かく漂浪ひようろうの雛形ひながたを演じつつある自分の心を省かえりみて、もしこの状態が長く続いたらどうしたらよかろうと、ひそかに自分の未来を案じ煩わづらつた。今日こんにちまでの経過から推おして、すべての創口きずぐちを癒合ゆごうするものは時日であるという格言を、彼は自家の経験から割り出して、深く胸に刻みつけていた。それが一昨日おとといの晩にすつかり崩くずれたのである。

彼は黒い夜の中を歩るきながら、ただどうかしてこの心から逃れ出たいと思つた。その

心はいかにも弱くて落ちつかなくって、不安で不定で、度胸がなさ過ぎて希知に見えた。彼は胸を抑えつける一種の圧迫の下に、いかにせば、今の自分を救う事ができるかという實際の方法のみを考えて、その圧迫の原因になつた自分の罪や過失は全くこの結果から切り放してしまつた。その時の彼は他の事を考える余裕を失つて、ことごとく自己本位になつていた。今までは忍耐で世を渡つて来た。これからは積極的に人世觀を作り易えなければならなかつた。そうしてその人世觀は口で述べるもの、頭で聞くものでは駄目であつた。心の実質が太くなるものでなくては駄目であつた。

彼は行く行く口の中で何遍も宗教の二字を繰り返した。けれどもその響は繰り返す後からすぐ消えて行つた。攫んだと思ふ煙が、手を開けるといつの間にか無くなつていように、宗教とははかない文字であつた。

宗教と関聯して宗助は坐禅という記憶を呼び起した。昔し京都にいた時分彼の級友に相国寺へ行つて坐禅をするものがあつた。当時彼はその迂濶を笑つていた。「今の世に……」と思つていた。その級友の動作が別に自分と違つたところもないようなのを見て、彼はますます馬鹿馬鹿しい気を起した。

彼は今更ながら彼の級友が、彼の侮蔑に値する以上のある動機から、貴重な時間を惜し

まずに、相国寺へ行つたのではなからうかと考え出して、自分の輕薄を深く恥じた。もし昔から世俗で云う通り安心とか立命とかいう境地に、坐禪の力で達する事ができるならば、十日や二十日役所を休んでも構わないからやって見たいと思つた。けれども彼はこの道にかけては全くの門外漢であつた。したがつて、これより以上明瞭な考も浮ばなかつた。

ようやく家へ辿り着いた時、彼は例のような御米と、例のような小六と、それから例のような茶の間と座敷と洋灯と筆筒を見て、自分だけが例にない状態の下に、この四五時間を暮していたのだという自覚を深くした。火鉢には小さな鍋が掛けてあつて、その蓋の隙間から湯気が立つていた。火鉢の傍には彼の常に坐る所に、いつもの座蒲団を敷いて、その前にちやんと膳立がしてあつた。

宗助は糸底を上にしてわざと伏せた自分の茶碗と、この二三年来朝晩使い慣れた木の箸を眺めて、

「もう飯は食わないよ」と云つた。御米は多少不本意らしい風もした。

「おやそう。余り遅いから、おおかたどこかで召上がったろうとは思つたけれど、もしまだだといけないから」と云いながら、布巾で鍋の耳を撮んで、土瓶敷の上におろした。

それから清きよを呼んで膳ぜんを台所へ退さげさした。

宗助はこういう風に、何ぞ事故ができて、役所の退出ひけからすぐ外へ回って遅くなる場合には、いつでもその顛てんまつ末の大略を、帰宅早々御米に話すのを例にしていた。御米もそれを聞かないうちは気がすまなかった。けれども今夜に限って彼は神田で電車を降りた事も、牛肉屋へ上った事も、無理に酒を呑のんだ事も、まるで話したくなかった。何も知らない御米はまた平常の通り無邪気にそれからそれへと聞きたがった。

「何別にこれという理由わけもなかったのだけれども、——ついあすこいらで牛ぎゆうが食いたくなつただけの事さ」

「そうして御腹おなかを消化こなすために、わざわざここまで歩るいていらしたの」

「まあ、そうだ」

御米はおかしそうに笑った。宗助はむしろ苦しかった。しばらくして、

「留守に坂井さんから迎いに来なかつたかい」と聞いた。

「いいえ、なぜ」

「昨日おとといの晩行つたとき、御馳走ごちそうするとか云っていたからさ」

「また？」

御米は少し呆れた顔をあきした。宗助はそれなり話を切り上げて寝た。頭の中をざわざわ何か通った。時々眼を開けて見ると、例のごとく洋灯ランプが暗くして床の間の上に載せてあった。御米はさも心地好さそうに眠っていた。ついこの間までは、自分の方が好く寝られて、御米は幾晩も睡眠の不足に悩まされたのであった。宗助は眼を閉じながら、明らかに次の間の時計の音を聞かなければならない今の自分をさらに心苦しく感じた。その時計は最初は幾つも続けざまに打った。それが過ぎると、びんとただ一つ鳴った。その濁った音がほうき星ぼしの尾のようにほうと宗助の耳みみたぶ朶たぶにしばらく響いていた。次には二つ鳴った。はなはだ淋しい音であった。宗助はその間に、何とかして、もつと鷹揚おうように生きて行く分別をしなればならないと云う決心だけをした。三時は朦朧もうろうとして聞えたような聞えないようなうちに過ぎた。四時、五時、六時はまるで知らなかった。ただ世の中が膨ふくれた。天が波を打って伸びかつ縮んだ。地球が糸で釣つりるした毬まりのごとくに大きな弧線こせんを描えがいて空間うごに揺いた。すべてが恐ろしい魔の支配する夢であった。七時過に彼ははつとして、この夢から覚めた。御米がいつもの通り微笑して枕元に曲かがんでいた。冴さえた日は黒い世の中を疾とくにどこかへ追いやっていた。

十八

宗助そうすけは一封の紹介状ふどころを懐ふとこにして山門さんもんを入いつた。彼はこれを同僚の知人なにがしの某たから得た。その同僚は役所の往復に、電車の中で洋服の隠袋かくしから菜根譚さいこんたんを出して読む男であつた。こう云う方面に興味のない宗助は、固もとより菜根譚の何物なるかを知らなかつた。ある日一つ車の腰掛に膝を並べて乗つた時、それは何だと聞いて見た。同僚は小形の黄色い表紙を宗助の前に出して、こんな妙な本だと答えた。宗助は重ねてどんな事が書いてあるかと尋ねた。その時同僚は、一口に説明のできる格かっこう好こうな言葉を有もつていながつたと見えて、まあ禅学の書物だろうというような妙な挨拶あいさつをした。宗助は同僚から聞いたこの返事をよく覚えていた。

紹介状を貰もらう四五日前しごんちまえ、彼はこの同僚の傍そばへ行つて、君は禅学をやるのかと、突然質問を掛けた。同僚は強く緊張した宗助の顔を見てすこぶる驚ろいた様子であつたが、いややらない、ただ慰なぐさみ半分にあんな書物を読むだけだと、すぐ逃げてしまつた。宗助は多少失望ゆるに弛ゆるんだ下唇したくちびるを垂れて自分の席に歸つた。

その日歸りがけに、彼らはまた同じ電車に乗り合あひわした。先刻さつき宗助の様子を、氣の毒に

觀察した同僚は、彼の質問の奥に雑談以上のある意味を認めたものと見えて、前よりはもつと親切にその方面の話をして聞かした。しかし自分はいまだかつて参禅という事をした経験がないと自白した。もし詳しい話が聞きたければ、幸い自分の知り合によく鎌倉へ行く男があるから紹介してやろうと云った。宗助は車の中でその人の名前と番地を手帳に書き留めた。そうして次の日同僚の手紙を持ってわざわざ回り道をして訪問に出かけた。宗助の懐にした書状はその折席上で認めて貰ったものであった。

役所は病氣になつて十日ばかり休む事にした。御米の手前もやはり病氣だと取り繕つた。「少し脳が悪いから、一週間ほど役所を休んで遊んで来るよ」と云った。御米はこの頃の夫の様子のごとくに異状があるらしく思われるので、内心では始終心配していた矢先だから、平生煮え切らない宗助の果断を喜んだ。けれどもその突然なものにも全く驚ろいた。

「遊びに行くつて、どこへいらつしやるの」と眼を丸くしないばかりに聞いた。

「やっぱり鎌倉辺が好かろうと思つている」と宗助は落ちついて答えた。地味な宗助とハイカラな鎌倉とはほとんど縁の遠いものであった。突然二つのものを結びつけるのは滑稽であった。御米も微笑を禁じ得なかつた。

「まあ御金持ね。私もいつしよに連れてつてちようだい」と云った。宗助は愛すべき細君

のこの冗談じょうだんを味わう余裕を有たなかつた。真面目まじめな顔をして、

「そんな贅ぜいたく沢たくな所へ行くんじゃないよ。禅寺へ留とめて貰もらつて、一週間か十日、ただ静かに頭を休めて見るだけの事さ。それもはたして好くなるか、ならないか分らないが、空気のいい所へ行くと、頭には大変違ちがうと皆みんな云いうから」と弁解した。

「そりや違いますわ。だから行つていらつしやいとも。今のは本当の冗談よ」

御米は善良な夫に調戯からかつたのを、多少濟まないように感じた。宗助はその翌あくるひ日ひすぐ貰もらつて置いた紹介状ふところを懐ふところにして、新橋から汽車に乗つたのである。

その紹介状の表には釈宜しゃくぎ道どう様と書いてあつた。

「この間まで侍者じしやをしていましたが、この頃では塔頭たっちゆうにある古い庵室あんしつに手を入れて、そこに住んでいるとか聞きました。どうですか、まあ着いたら尋ねて御覧なさい。庵の名はたしか一窓庵いっそうあんでした」と書いてくれる時、わざわざ注意があつたので、宗助は礼を云つて手紙を受取りながら、侍者じしやだの塔頭たっちゆうだのという自分には全く耳新らしい言葉の説明を聞いて帰つたのである。

山門を入ると、左右には大きな杉があつて、高く空を遮さへぎっているために、路が急に暗くなつた。その陰気な空気に触れた時、宗助は世の中と寺の中との区別を急に覺さとつた。静か

な境内けいだいの入口に立つた彼は、始めて風邪ふうじやを意識する場合に似た一種の悪寒さむけを催した。

彼はまず真直まつすくに歩るき出した。左右にも行手いくてにも、堂のようなものや、院のようなものがちよいちよ見えた。けれども人の出入でいりはいっさいなかった。ことごとく寂寞せきぼくとして錆び果はてていた。宗助はどこへ行つて、宜道ぎしやうのいる所を教えて貰おうかと考えながら、誰も通らない路の真中に立つて四方を見回みまわした。

山の裾すそを切り開いて、一二丁奥へ上のぼるように建てた寺だと思えて、後うしろの方は樹きの色で高く塞ふさがっていた。路の左右も山やまつぎ続か丘続の地勢に制せられて、けつして平ではないようであった。その小高い所々に、下から石段を疊んで、寺らしい門を高く構えたのが二三軒目に着いた。平地ひらちに垣めくを繞らして、点在しているのは、幾多いくたもあつた。近寄つて見ると、いずれも門もん瓦がわらの下に、院号やら庵号やらが額かみにしてかけてあつた。

宗助は箔はくの剥はげた古い額を一二枚読んで歩いたが、ふと一窓庵から先へ探さがし出して、もしそこに手紙の名宛なまての坊さんがいなくなつたら、もつと奥へ行つて尋ねる方が便利だろうと思いついた。それから逆戻りをして塔頭を一つ調べにかかると、一窓庵は山門はいを這入はいるや否やすぐ右手の方の高い石段の上にあつた。丘おか外はずれなので、日ひ当あたりの好い、からりとした玄関先うしろを控えて、後うしろの山の懷ふところに暖まつているような位置に冬を凌しのぐ気色けしきに見えた。宗助

は玄関を通り越して庫裡くりの方から土間に足を入れた。上り口の障子しょうじの立ててある所まで来て、たのむたのむと二三度呼んで見た。しかし誰も出て来てくれるものはなかった。宗助はしばらくそこに立つたまま、中の様子を窺うかがっていた。いつまで立っけていても音沙汰おとさたがないので、宗助は不思議な思いをして、また庫裡を出て門の方へ引返した。すると石段の下から剃立そりたての頭を青く光らした坊さんが上つて来た。年はまだ二十四五としか見えない若い色白の顔であった。宗助は門の扉の所に待ち合わせて、

「宜道さんとおっしゃる方はこちらにおいででしょうか」と聞いた。

「私が宜道です」と若い僧は答えた。宗助は少し驚ろいたが、また嬉うれしくもあつた。すぐ懷中から例の紹介状を出して渡すと、宜道は立ちながら封を切つて、その場で読み下くだした。やがて手紙を巻き返して封筒へ入れると、

「ようこそ」と云つて、叮嚀ていねいに会釈えしやくしたなり、先に立つて宗助を導いた。二人は庫裡くりに下駄げたを脱いで、障子を開けて内へ這入つた。そこには大きな囲炉裏いろりが切つてあつた。宜道は鼠木綿ねずもめんの上に羽織はおつていた薄い粗末な法衣ころもを脱いで釘くぎにかけて、

「御寒うございましょう」と云つて、囲炉裏の中に深く埋いけてあつた炭を灰の下から掘り出した。

この僧は若いに似合わずはなはだ落ちついた話振をする男であった。低い声で何か受答えをした後で、にやりと笑う具合などは、まるで女のような感じを宗助に与えた。宗助は心のうちに、この青年がどういふ機縁の元に、思い切つて頭を剃つたものだろうかとか考へて、その様子のしとやかなところを、何となく憐れに思つた。

「大変御静なようですが、今日はどなたも御留守なんですか」

「いえ、今日に限らず、いつも私一人です。だから用のあるときは構わず明け放しに出ます。今もちよつと下まで行つて用を足して参りました。それがためせつかくおいでのところを失礼致しました」

宜道はこの時改めて遠來の人に対して自分の不在を詫びた。この大きな庵を、たった一人で預かつているさえ、相応に骨が折れるのに、その上に厄介が増したらさぞ迷惑だろうと、宗助は少し気の毒な色をほかに動かした。すると宜道は、

「いえ、ちつとも御遠慮には及びません。道のためでございますから」とゆかしい事を云つた。そうして、目下自分の所に、宗助のほかに、まだ一人世話になつて居る居士の旨を告げた。この居士は山へ来てもう二年になるとかいう話であつた。宗助はそれから二三日して、始めてこの居士を見たが、彼は剽軽な羅漢のような顔をしている氣楽そう

な男であつた。細い大根だいこんを三四本ぶら下げて、今日は御馳走ごちそうを買つて来たと言つて、それを宜道に煮てもらつて食つた。宜道も宗助もその相しょうばん伴ばんをした。この居士は顔が坊さんらしいので、時々僧堂の衆に交つて、村の御齋おとぎなどに出かける事があるとか云つて宜道が笑つていた。

そのほか俗人で山へ修業に来ている人の話もいろいろ聞いた。中に筆墨ふですみを商あきなう男がいた。背中へ荷をいっばい負しよつて、十日はつかなり三十日さんじゅうにちなり、そこから中回つて歩いて、ほぼ売り尽してしまふと山へ帰つて来て坐禅をする。それからしばらくして食うものがなくなる、また筆墨を背に載のせて行商に出る。彼はこの両面の生活を、ほとんど循環じゆんかん小しょう数すうのごとく繰り返して、飽あく事を知らないのだと云う。

宗助は一見いつけんこだわりの無さそうなこれらの人の月日と、自分の内面にある今の生活とを比べて、その懸隔けんかくの甚はなはだしいのに驚ろいた。そんな気楽な身分だから坐禅ざぜんができるのか、あるいは坐禅をした結果そういう気楽な心になれるのか迷つた。

「気楽ではいけません。道楽にできるものなら、二十年も三十年も雲水うんすいをして苦しむものはありません」と宜道は云つた。

彼は坐禅をするときの一般の心得こころえや、老師らうしから公案こうあんの出る事や、その公案に一生懸命

嘯かじりついて、朝も晩も昼も夜も嘯りつづけに嘯らなくてはいけない事やら、すべて今の宗助には心元なく見える助言しよこんを与えた末、

「御室おへやへ御案内しましょう」と云つて立ち上がった。

囲炉裏いろりの切つてある所を出て、本堂を横に抜けて、その外れはずにある六畳の座敷の障子しょうじを縁から開けて、中へ案内された時、宗助は始めて一人遠くに来た心持がした。けれども頭の中は、周囲の幽静な趣おもむきと反照はんしょうするためか、かえつて町にいるときよりも動揺した。約一時間もしたと思う頃宜道の足音がまた本堂の方から響いた。

「老師らうしが相見しやうけんになるそうでございますから、御都合ごごうごが宜よろしければ参りましょう」と云つて、丁寧ていねいに敷居ひざの上に膝ひざを突いた。

二人はまた寺を空からにして連立つて出た。山門の通りをほぼ一丁ほど奥へ来ると、左側に蓮池はすいけがあった。寒い時分だから池の中はただ薄濁りに淀よどんでいるだけで、少しも清しやうじ浄ような趣おもむきはなかつたが、向側むこうがわに見える高い石の崖外がけはずれまで、縁えんに欄干らんかんのある座敷が突き出しているところが、文人画ぶんじんがにでもありそうな風致を添えた。

「あすこが老師の住んでいられる所です」と宜道は比較的新らしいその建物を指ゆびさした。

二人は蓮池の前を通り越して、五六級の石段のぼを上つて、その正面にある大きな伽藍がらんの屋

根を仰いだまま直左りへ切れた。玄関へ差しかかった時、宜道は

「ちよつと失礼します」と云つて、自分だけ裏口の方へ回つたが、やがて奥から出て来て、「さあどうぞ」と案内をして、老師のいる所へ伴れて行つた。

老師というのは五十格好に見えた。赭黒い光沢のある顔をしていた。その皮膚も筋肉もことごとく緊つて、どこにも怠のないところが、銅像のもたらす印象を、宗助の胸に彫りつけた。ただ唇があまり厚過ぎるので、そこに幾分の弛みが見えた。その代り彼の眼には、普通の人間にとうてい見るべからざる一種の精彩が閃めいた。宗助が始めてその視線に接した時は、暗中に卒然として白刃を見る思があつた。

「まあ何から入つても同じであるが」と老師は宗助に向つて云つた。「父母未生以前本来の面目は何だか、それを一つ考えて見たら善かろう」

宗助には父母未生以前という意味がよく分らなかつたが、何しろ自分と云うものは必竟何物だか、その本体を捕まえて見ると云う意味だろうと判断した。それより以上口を利くには、余り禪というものの知識に乏しかつたので、黙つてまた宜道に伴れられて一窓庵へ歸つて来た。

晩食の時宜道は宗助に、入室の時間の朝夕二回あることと、提唱の時間

が午前である事などを話した上、

「今夜はまだ見解もできないかも知れませんか、明^{みょう}朝^{ちやう}か明晩御誘い申しましよう」と親切に云つてくれた。それから最初のうちは、つめて坐^すわるのは難儀だから線香を立てて、それで時間を計つて、少しずつ休んだら好かろうと云うような注意もしてくれた。

宗助は線香を持つて、本堂の前を通つて自分の室^{へや}ときまった六畳に這^{はい}入つて、ぼんやりして坐つた。彼から云うといわゆる公^{こう}案^{あん}なるものの性質が、いかにも自分の現在と縁の遠いような気がしてならなかつた。自分は今腹痛で悩んでいる。その腹痛と言う^う訴^たを抱^{いだ}いて来て見ると、あにはからんや、その対症療法として、むずかしい数学の問題を出して、まあこれでも考えたらよかろうと云われたと一般であつた。考えろと云われれば、考えないでもないが、それは一応腹痛が治まつてからの事ではなくては無理であつた。

同時に彼は勤^{つとめ}を休んで、わざわざここまで来た男であつた。紹介状を書いてくれた人、万事に気をつけてくれる宜道に対しても、あまりに軽卒な振^{ふる}舞^{まい}はできなかつた。彼はまづ現在の自分が許す限りの勇氣を提^ひさげて、公案に向おうと決心した。それがいずれのところを彼を導^びびいて、どんな結果を彼の心に持ち来^{きた}すかは、彼自身といえども全く知らなかつた。彼は悟^{さと}りという美名に欺^{あざむ}かれて、彼の平生に似合わぬ冒険を試みようとして企てたので

ある。そうして、もしこの冒険に成功すれば、今の不安な不定な弱々しい自分を救う事ができるしまいかと、はかない望を抱いたのである。

彼は冷たい火鉢ひばちの灰の中に細い線香を燻くゆらして、教えられた通り座蒲団ざぶたんの上に半跏はんかを組んだ。昼のうちはさままでとは思わなかった室へやが、日が落ちてから急に寒くなった。彼は坐りながら、背中のぞくぞくするほど温度の低い空気に堪たえなかった。

彼は考えた。けれども考える方向も、考える問題の実質も、ほとんど捕つかまえようのない空漠くうばくなものであった。彼は考えながら、自分は非常に迂濶うかつな真似まねをしているのではなからうかと疑うたがった。火事見舞まきわに行く間際に、細かい地図を出して、仔細しさいに町名や番地を調べているよりも、ずっと飛び離れた見当違しよざいの所作しよさを演じているごとく感じた。

彼の頭の中をいろいろなものが流れた。そのあるものは明らかに眼に見えた。あるものは混沌こんとんとして雲のごとくに動いた。どこから来てどこへ行くとも分らなかった。ただ先のものが消える、すぐ後あとから次のものが現われた。そうして仕切りなしにそれからそれへと続いた。頭の往來を通るものは、無限で無数で無尽蔵で、けっして宗助の命令によって留まる事も休む事もなかった。断ち切ろうと思えば思うほど、滾こんこん々々として湧わいて出た。

宗助は怖こわくなつて、急に日常の我を呼び起して、室の中を眺ながめた。室は微かすかな灯ひで薄暗

く照らされていた。灰の中に立てた線香は、まだ半分ほどしか燃えていなかった。宗助は恐るべく時間の長いのに始めて気がついた。

宗助はまた考え始めた。すると、すぐ色のあるもの、形のあるものが頭の中を通り出した。ぞろぞろと群がる蟻のごとくに動いて行く、あとからまたぞろぞろと群がる蟻のごとくに現われた。じつとしているのはただ宗助の身体だけであった。心は切ないほど、苦しいほど、堪えがたいほど動いた。

そのうちじつとしている身体も、膝頭から痛み始めた。真直に延ばしていた脊髄がしだいしだいに前の方に曲つて来た。宗助は両手で左の足の甲を抱えるようにして下へおろした。彼は何をする目的もなく室の中に立ち上がった。障子を明けて表へ出て、門前をぐるぐる駈け回つて歩きたくなくなった。夜はしんとしていた。寝ている人も起きている人もどこにもおりそうには思えなかった。宗助は外へ出る勇気を失った。じつと生きながら妄想に苦しめられるのはなお恐ろしかった。

彼は思い切つてまた新しい線香を立てた。そうしてまたほぼ前と同じ過程を繰り返した。最後に、もし考えるのが目的だとすれば、坐つて考えるのも寝て考えるのも同じだろうと分別した。彼は室の隅に畳んであつた薄汚ない蒲団を敷いて、その中に潜り込んだ。

すると先刻さつぎからの疲れで、何を考える暇もないうちに、深い眠りに落ちてしまった。

眼まなこが覚さめると枕元の障子がいっつの間にか明るくなって、白い紙にやがて日の逼せまるべき色が動いた。昼も留守るすを置かずに済む山寺は、夜に入っても戸を閉たてる音を聞かなかつたのである。宗助は自分が坂井の崖がけ下の暗い部屋に寝ていたのでもない意識するや否いなや、すぐ起き上がった。縁へ出ると、軒端のきばに高く大霸王樹おおきぼてんの影が眼に映った。宗助はまた本堂の仏壇の前を抜けて、囲炉裏いろりの切つてある昨日の茶の間へ出た。そこには昨日の通り宜道の法衣ころもが折釘おりくぎにかけてあつた。そうして本人は勝手の竈かまどの前に蹲踞うずくまって、火を焚たいていた。宗助を見て、

「御早う」と慇懃いんぎんに礼をした。「先刻さつぎ御誘ごまよい申そうと思いましたが、よく御寝おやすみのようでしたから、失礼して一人参りました」

宗助はこの若い僧が、今朝夜明がたにすでに参禅を済まして、それから帰つて来て、飯いを炊かいでいるのだという事を知つた。

見ると彼は左の手でしきりに薪まきを差し易かえながら、右の手に黒い表紙の本を持って、用の合間合間にそれを読んでいる様子であつた。宗助は宜道に書物の名を尋ねた。それは碧へ巖がん集しゅうというむずかしい名前のものであつた。宗助は腹の中で、昨夕ゆうべのように当途あてどもな

かんがえふけ
 い考に耽つて脳を疲らすより、いつそその道の書物でも借りて読む方が、要領を得る捷ちかみ徑ちではなからうかと思いついた。宜道にそう云うと、宜道は一も二もなく宗助の考を排斥した。

「書物を読むのはごく悪うございます。有体ありていに云うと、読書ほど修業さまたげの妨さまたげになるものは無いようです。私共でも、こうして碧巖などを讀みますが、自分の程度以上のところになると、まるで見当けんとうがつきません。それを好加減いかげんに揣摩しまする癖がつくと、それが坐る時の妨さまたげになつて、自分以上の境きようがい界がいを予期して見たり、悟を待ち受けて見たり、充分突込んで行くべきところに頓挫とんざができます。大變毒になりますから、御止しになつた方がよいでしょう。もし強しいて何か御讀みになりたければ、禪ぜん関かん策さく進しんというような、人の勇氣を鼓舞こぶしたり激励こほりしたりするものが宜よろしゆうございましょう。それだつて、ただ刺戟しげきの方かた便として読むだけで、道その物とは無関係です」

宗助には宜道の意味がよく解らなかつた。彼はこの生なまわか若わかい青い頭をした坊さんの前に立つて、あたかも一個の低能児であるかのごとき心持を起した。彼の慢心は京都以来すでに銷磨しょうまし尽していた。彼は平凡を分として、今こん日にちまで生きて来た。聞達ぶんたつほど彼の心に遠いものはなかつた。彼はただありのままの彼として、宜道の前に立つたのである。し

かも平生の自分より遙かに無力無能な赤子であると、さらに自分を認めざるを得なくなつた。彼に取つては新らしい発見であつた。同時に自尊心を根絶するほどの発見であつた。

宜道が竈の火を消して飯をむらしている間に、宗助は台所から下りて庭の井戸端へ出て顔を洗つた。鼻の先にはすぐ雑木山が見えた。その裾の少し平な所を拓いて、菜園が榨えてあつた。宗助は濡れた頭を冷たい空氣に曝して、わざと菜園まで下りて行つた。そうして、そこに崖を横に掘つた大きな穴を見出した。宗助はしばらくその前に立つて、暗い奥の方を眺めていた。やがて、茶の間へ帰ると、囲炉裏には暖かい火が起つて、鉄瓶に湯の沸る音が聞えた。

「手がないものだから、つい遅くなりまして御氣の毒です。すぐ御膳に致しましょう。しかしこんな所だから上げるものがなくなつて困ります。その代り明日あたりは御馳走に風呂でも立てましょう」と宜道が云つてくれた。宗助はありがたく囲炉裏の向に坐つた。

やがて食事を了えて、わが室へ歸つた宗助は、また父母未生以前と云う稀有な問題を眼の前に据えて、じつと眺めた。けれども、もともと筋の立たない、したがつて発展のしようのない問題だから、いくら考えてもどこからも手を出す事はできなかつた。そうして、すぐ考えるのが厭になつた。宗助はふと御米にここへ着いた消息を書かなければならぬ

事に気がついた。彼は俗用の生じたのを喜ぶごとくに、すぐ鞆かばんの中から巻紙と封じ袋を取り出して、御米にやる手紙を書き始めた。まずこの閑静な事、海に近いせい、東京よりはよほど暖かい事、空気の清朗な事、紹介された坊さんの親切な事、食事の不味まずい事、夜具蒲団やぐふとんの綺麗きれいに行かない事、などを書き連ねているうちに、はや三尺余りの長さになつたので、そこで筆を擱おいたが、公案に苦しめられている事や、坐禅をして膝ひざの関節を痛くしている事や、考えるためにますます神経衰弱が劇はげしくなりそうな事は、噫おくびにも出さなかつた。彼はこの手紙に切手を貼はつて、ポストに入れなければならぬ口実を求めて、早速山を下つた。そうして父母未生以前と、御米と、安井に、脅おびかされながら、村の中をうろついて帰つた。

午ひるには、宜道から話のあつた居士こじに会つた。この居士は茶碗を出して、宜道に飯よそを盛つて貰もらうとき、憚はばり様とも何とも云わずに、ただ合がっし掌しょうして礼を述べたり、相図あひづをしたりした。このくらい静かに物事を為するのが法だとか云つた。口を利きかず、音を立てないのは、考かんえの邪魔になると云う精神からだそうであつた。それほど真剣にやるべきものをと、宗助は昨夜からの自分が、何となく恥はたずかしく思われた。

食後三人は囲炉裏いろりの傍はたでしばらく話した。その時居士は、自分が坐禅をしながら、いつ

か気がつかずとうとうと眠ってしまっていて、はっと正気に帰る間際に、おや悟つたな
 と喜ぶことがあるが、さていよいよ眼を開いて見ると、やっぱり元の通の自分なので失望
 するばかりだと云つて、宗助を笑わした。こう云う気楽な考で、参禅している人もあると
 思うと、宗助も多少は寛ろいだ。けれども三人が分れ分れに自分の室に入る時、宜道が、
 「今夜は御誘い申しますから、これから夕方までしっかり御坐りなさいまし」と真面目に
 勧めたとき、宗助はまた一種の責任を感じた。消化れない堅い団子が胃に滞おっているよ
 うな不安な胸を抱いて、わが室へ歸つて来た。そうしてまた線香を焚いて坐わり出した。
 その癖夕方までは坐り続けられなかつた。どんな解答にしろ一つ拵らえておかなければな
 らないと思ひながらも、しまいには根気が尽きて、早く宜道が夕食の報知に本堂を通り
 抜けて来てくれれば好いと、そればかり気にかかつた。

日は懊惱と困憊の裡に傾むいた。障子に映る時の影がしだいに遠くへ立ち退くに
 つれて、寺の空気が床の下から冷え出した。風は朝から枝を吹かなかつた。縁側に出て、
 高い庇を仰ぐと、黒い瓦の小口だけが揃つて、長く一列に見える外に、穏かな空が、蒼い
 光をわが底の方に沈めつつ、自分と薄くなつて行くところであつた。

十九

「危険うございます」と云つて宜道は一足先へ暗い石段を下りた。宗助はあとから続いた。町と違つて夜になると足元が悪いので、宜道は提灯を点けてわずか一丁ばかりの路を照らした。石段を下り切ると、大きな樹の枝が左右から二人の頭に蔽い被さるように空を遮つた。闇だけでも蒼い葉の色が二人の着物の織目に染み込むほどに宗助を寒がらせた。提灯の灯にもその色が多少映る感じがあつた。その提灯は一方に大きな樹の幹を想像するせいか、はなはだ小さく見えた。光の地面に届く尺数もわずかであつた。照らされた部分は明るい灰色の断片となつて暗い中にほつきり落ちた。そうして二人の影が動くに伴つて動いた。

蓮池を行き過ぎて、左へ上る所は、夜はじめての宗助に取つて、少し足元が滑かに行かなかつた。土の中に根を食っている石に、一二度下駄の台を引掛けた。蓮池の手前から横に切れる裏路もあるが、この方は凸凹が多くて、慣れない宗助には近くても不便だらうと云うので、宜道はわざわざ広い方を案内したのである。

玄関を入ると、暗い土間に下駄がだいぶ並んでいた。宗助は曲んで、人の履物を踏ま

ないようにそつと上へのぼった。室は八畳ほどの広きであつた。その壁際に列を作つて、六七人の男が一側に並んでいた。中に頭を光らして、黒い法衣を着た僧も交つていた。他のものは大概袴を穿いていた。この六七人の男は上り口と奥へ通ずる三尺の廊下口を残して、行儀よく鉤の手に並んでいた。そうして、一言も口を利かなかつた。宗助はこれらの人の顔を一目見て、まずその峻刻なのに気を奪われた。彼らは皆固く口を結んでいた。事ありげな眉を強く寄せていた。傍にどんな人がいるか見向きもしなかつた。いかなるものが外から入つて来ても、全く注意しなかつた。彼らは活きた彫刻のように己れを保持して、火の氣のない室に肅然と坐つていた。宗助の感覚には、山寺の寒さ以上に、一種厳かな氣が加わつた。

やがて寂寞の中に、人の足音が聞えた。初は微かに響いたが、しだいに強く床を踏んで、宗助の坐っている方へ近づいて来た。しまいに一人の僧が廊下口からぬつと現れた。そうして宗助の傍を通つて、黙つて外の暗がりへ抜けて行つた。すると遠くの奥の方で鈴を振る音がした。

この時宗助と並んで厳肅に控えていた男のうちで、小倉の袴を着けた一人が、やはり無言のまま立ち上がつて、室の隅の廊下口の真正面へ来て着座した。そこには高さ二尺

幅一尺ほどの木の杵わくの中に、銅鑼どらのような形をした、銅鑼よりも、ずっと重くて厚そうなものがかかっていた。色は蒼あおくろ黒く貧しい灯ひに照らされていた。袴を着けた男は、台の上にある撞しゅもく木を取り上げて、銅鑼に似た鐘の真中を二つほど打ち鳴らした。そうして、ついと立つて、廊下口を出て、奥の方へ進んで行った。今度は前と反対に、足音がだんだん遠くの方へ去るに従って、微かすかになった。そうして一番しまいにぴたりとどこかで留まった。宗助は坐いながら、はつとした。彼はこの袴を着けた男の身の上に、今何事が起りつつあるだろうかを想像したのである。けれども奥はしんとして静まり返っていた。宗助と並んでいるものも、一人として顔の筋肉を動かすものはなかった。ただ宗助は心の中で、奥からの何物かを待ち受けた。すると忽然こっぜんとして鈴を振る響が彼の耳に応こたえた。同時に長い廊下を踏んで、こちらへ近づくと足音がした。袴を着けた男はまた廊下口から現われて、無言のまま玄関を下りて、霜しもの裡うちに消え去った。入れ代つてまた新しい男が立つて、最前の鐘を打った。そうして、また廊下を踏み鳴らして奥の方へ行った。宗助は沈黙の間に
行われるこの順序を見ながら、膝ひざに手を載のせて、自分の番の来るのを待っていた。

自分より一人置いて前の男が立つて行った時は、ややしばらくしてから、わっと云う大きな声が、奥の方で聞えた。その声は距離が遠いので、劇はげしく宗助の鼓膜を打つほど、強

くは響かなかつたけれども、たしかに精一杯威を振つたものであった。そうしてただ一人の咽喉から出た個人の特色を帯びていた。自分のすぐ前の人が立った時は、いよいよわが番が回つて来たと言ふ意識に制せられて、一層落ちつきを失つた。

宗助はこの間の公案に対して、自分だけの解答は準備していた。けれども、それははなはだ覺束ない薄手のものに過ぎなかつた。室中に入る以上は、何か見解を呈しない訳に行かないので、やむを得ず納まらないところを、わざと納まつたように取繕つた、その場限りの挨拶であつた。彼はこの心細い解答で、僥倖にも難関を通過して見たいなどとは、夢にも思い設けなかつた。老師をごまかす気は無論なかつた。その時の宗助はもう少し真面目であつたのである。単に頭から割り出した、あたかも画にかいた餅のような代物を持つて、義理にも室中に入らなければならぬ自分の空虚な事を恥じたのである。

宗助は人のするごとくに鐘を打つた。しかも打ちながら、自分は人並にこの鐘を撞木で敲くべき権能がないのを知つていた。それを人並に鳴らして見る猿のごとき己れを深く嫌忌した。

彼は弱味のある自分に恐れを抱きつつ、入口を出て冷たい廊下へ足を踏み出した。廊下

は長く続いた。右側にある室はことごとく暗かった。角を二つ折れ曲ると、向の外れの障子に灯影が差した。宗助はその敷居際へ来て留まった。

室中に入るものは老師に向つて三拝するのが礼であった。拝しかたは普通の挨拶のよう、頭に畳に近く下げると同時に、両手の掌を上向に開いて、それを頭の左右に並べたまま、少し物を抱えた心持に耳の辺まで上げるのである。宗助は敷居際に跪ずいて形のごとく拝を行なつた。すると座敷の中で、

「一拝で宜しい」と云う会釈があつた。宗助はあとを略して中へ入つた。

室の中はただ薄暗い灯に照らされていた。その弱い光は、いかに大字な書物をも披見せしめぬ程度のものであつた。宗助は今日までの経験に訴えて、これくらい微かな灯火に、夜を営なむ人間を憶い起す事ができなかつた。その光は無論月よりも強かつた。かつ月のごとく蒼白い色ではなかつた。けれどももう少しで朦朧の境に沈むべき性質のものであつた。

この静かな判断然しない灯火の力で、宗助は自分を去る四五尺の正面に、宜道のいわゆる老師なるものを認めた。彼の顔は例によつて鑄物のように動かなかつた。色は銅であつた。彼は全身に渋に似た柿に似た茶に似た色の法衣を纏つていた。足も手も見えなかつた。

ただ頸くびから上が見えた。その頸くびから上が、げんしゆく 厳 肅と緊張の極度に安んじて、いつまで経つても変る恐おそれを有せざるごとくに人を魅みした。そうして頭には一本の毛もなかった。

この面前に気力なく坐すわった宗助の、口にした言葉はただ一句で尽きた。

「もつと、ぎろりとしたところを持って来なければ駄目だ」とたちまち云われた。「そのくらいな事は少し学問をしたものなら誰でも云える」

宗助は喪家そうかの犬のごとく室中を退いた。後に鈴れいを振る音が烈はげしく響いた。

二十

障子しょうじの外で野中さん、野中さんと呼ぶ声が二度ほど聞えた。宗助そうすけは半睡はんすいの裡うちにはいと応こたえたつもりであつたが、返事を仕切らない先に、早く知覚を失つて、また正体なく寝入つてしまった。

二度目に眼が覚さめた時、彼は驚ろいて飛び起きた。縁側えんがわへ出ると、宜道ぎどうが鼠木綿ねずみもめんの着物たすきに襷たすきを掛けて、甲斐かい甲斐がいしくそこいらを拭ぬいでいた。赤く凍かじんだ手で、濡雑巾ぬれぞうきんを絞しぼりながら、例のごとく柔和やわしいにこやかな顔をして、

「御早う」と挨拶あいさつした。彼は今朝もまたとくに参禅を済ました後のち、こうして庵に帰って働いていたのである。宗助はわざわざ呼び起されても起き得なかった自分の怠慢かえりを省みて、全くきまりの悪い思をした。

「今朝もつい寝忘れて失礼しました」

彼はこそこそ勝手口から井戸端いどばたの方へ出た。そうして冷たい水を汲くんでできるだけ早く顔を洗った。延びかかった髻ひげが、頬あたりの辺で手を刺すようにざらざらしたが、今の宗助にはそれを苦にするほどの余裕はなかった。彼はしきりに宜道と自分を対照して考えた。

紹介状を貰うときに東京で聞いたところによると、この宜道という坊さんは、大変性質たちのいい男で、今では修業もだいぶでき上がつっていると云う話だったが、会って見ると、まるで一丁いっぺい字もない小廝こもののように丁寧ていねいであった。こうして禪たすきがけ掛けで働いているところを見ると、どうしても一個の独立した庵あんの主人らしくはなかった。納所なっしょとも小坊主とも云えた。

この矮わいしやう小しょうな若じゃく僧そうは、まだ出家をしない前、ただの俗人としてここへ修業に来た時、七日の間結跏けっかしたぎり少しも動かなかつたのである。しまいには足が痛んで腰が立たなくなつて、廁かわやへ上のぼる折などは、やつとの事壁伝かくだいに身体を運んだのである。その時分の

彼は彫刻家であつた。見性した日に、嬉しさの余り、裏の山へ馳け上つて、草木国土悉皆成仏と大きな声を出して叫んだ。そうしてついに頭を剃つてしまった。

この庵を預かるようになってから、もう二年になるが、まだ本式に床を延べて、樂に足を延ばして寝た事はないと云つた。冬でも着物のまま壁に倚れて坐睡するだけだと云つた。侍者をしていた頃などは、老師の犢鼻褌まで洗わせられたと云つた。その上少しの暇を偷んで坐りでもすると、後から来て意地の悪い邪魔をされる、毒吐かれる、頭の剃り立てには何の因果で坊主になつたかと悔む事が多かつたと云つた。

「ようやくこの頃になつて少し楽になりました。しかしまだ先がごさいます。修業は實際苦しいものです。そう容易にできるものなら、いくら私共が馬鹿だつて、こうして十年も二十年も苦しむ訳がごさいません」

宗助はただ惘然とした。自己の根氣と精力の足らない事をはがゆく思う上に、それほど歳月を掛けなければ成就できないものなら、自分は何しにこの山の中までやつて来たか、それからが第一の矛盾であつた。

「けつして損になる氣遣はごさいません。十分坐れば、十分の功があり、二十分坐れば二十分の徳があるのは無論です。その上最初を一つ奇麗にぶち抜いておけば、あとはこう

云う風に始終しじゆうここにおいでにならないでも済みますから」

宗助は義理にもまた自分の室へやへ帰つて坐らなければならなかつた。

こんな時に宜道が来て、

「野中さん 提唱ていしょうです」と誘つてくると、宗助は心から嬉しい気がした。彼は禿はげあた頭まを捕つかまえるような手の着けどころのない難題に悩まされて、坐いながらじつと煩悶はんもんするのを、いかにも切なく思つた。どんなに精力を消耗しょうこうする仕事でもいいから、もう少し積極的に身体からだを働らかしたく思つた。

提唱のある場所は、やはり一窓庵から一町も隔へだたつていた。蓮池れんちの前を通り越して、それを左へ曲らずに真直まつすくに突き当ると、屋根瓦やねがわらを厳いめしく重ねた高い軒が、松の間に仰あおがれた。宜道ふとこうは懐ふとこに黒い表紙の本を入れていた。宗助は無論手ぶらであつた。提唱ていしょうと云うのが、学校でいう講義の意味である事さえ、ここへ来て始めて知つた。

室へやは高い天井てんじように比例して広くかつ寒かつた。色の変つた畳の色が古い柱と映てり合つて、昔を物語るように寂さび果さつていた。そこに坐つている人々も皆地味に見えた。席次せきじ不同に思い思いの座を占めてはいるが、高声こうせいに語るもの、笑うものは一人もなかつた。僧そうは皆紺麻こんあさの法衣ころもを着て、正面きよくろくの曲まがり左右さゆうに列を作つて向い合せに並んだ。その曲

は朱で塗つてあつた。

やがて老師が現われた。畳を見つめていた宗助には、彼がどこを通つて、どこからここへ出たかさっぱり分らなかつた。ただ彼の落ちつき払つて曲に倚る重々しい姿を見た。一人の若い僧が立ちながら、紫の袈紗を解いて、中から取り出した書物を、恭しく卓上に置くところを見た。またその礼拝して退ぞく態を見た。

この時堂上の僧は一斉に合掌して、夢窓国師の遺誠を誦し始めた。思い思いに席を取つた宗助の前後にいる居士も皆同音に調子を合せた。聞いていると、経文のような、普通の言葉のような、一種の節を帯びた文字であつた。

「我に三等の弟子あり。いわゆる猛烈にして諸縁を放下し、專一に己事を究明するこれを上等と名づく。修業純ならず駁雑学を好む、これを中等と云う」と云々という、余り長くはないものであつた。宗助は始め夢窓国師の何人なるかを知らなかつた。宜道からこの夢窓国師と大燈国師とは、禅門中興の祖であると云う事を教わつたのである。平生跛ちんぱで充分に足を組む事ができないのを憤いきんつて、死ぬ間際に、今日こそおれの意のごとくにして見せると云いながら、悪い方の足を無理に折つべしよつて、結跏けつかしたため、血が流れて法衣ころもを煮染にじましたという大燈国師の話もその折宜道おりから聞いた。

やがて提唱が始まった。宜道は懐ふところから例の書物を出して、頁ページを半ば擦ずらして宗助の前へ置いた。それは宗門しゅうもん無む尽じん燈論とうろんと云う書物であった。始めて聞きに出た時、宜道は、「ありがたい結構な本です」と宗助に教えてくれた。白隠はくいん和尚おしょうの弟子の東嶺とうれい和尚おしょうとかいう人の編へん輯しゅうしたもので、重に禅を修行するものが、浅い所から深い所へ進んで行く径路けいじろやら、それに伴なう心境の変化やらを秩序立てて書いたものらしかった。

中途から顔を出した宗助には、よくも解げせなかつたけれども、講こう者じやは能弁にへんの方かたで、黙もくつて聞きいているうちに、大變面白おもしろいところがあつた。その上参禅さんぜんの士しを鼓舞こぶするためか、古来こらいからこの道みちに苦しんだ人の閱えつ歴れき譚だんなどを取り交ませて、一段の精彩せいさいを着けるのが例であつた。この日もその通りであつたが、或所あるところへ来ると、突然語調ごてうを改めて、

「この頃室中むすぶちゆうに来て、どうも妄想もうざうが起つていけないなどと訴うえるものがあるが」と急いそに入室者にゅうしつしやの不熱心ふねつしんを戒いしめ出したので、宗助は覺おぼえずうぎくりとした。室中むすぶちゆうに入いつて、その訴うたえをなしたものは実に彼自身かみじんであつた。

一時間の後宜道と宗助は袖そでをつらねてまた一窓庵いっしやうあんに歸かへつた。その歸り路かへりぢに宜道は、「ああして提唱ていせうのある時に、よく参禅者さんぜんしやの不心得ふしんじやくを諷ふうせられます」と云つた。宗助は何も答こたえなかつた。

二十一

そのうち、山の中の日は、一日一日と経^たつた。御米^{およね}からはかなり長い手紙がもう二本来た。もつとも二本とも新たに宗助^{そうすけ}の心を乱すような心配事は書いてなかった。宗助は常の細君思いに似ずついに返事を出すのを怠^たつた。彼は山を出る前に、何とかこの間の問題に片をつけなければ、せつかく来た甲斐^{かい}がないような、また宜道^{ぎしどう}に対してすまないような気がしていた。眼^{まなこ}が覚^さめている時は、これがために名状しがたい一種の圧迫を受けつづけに受けた。したがって日が暮れて夜が明けて、寺で見る太陽の数が重なるにつけて、あたかも後から追いかけてられでもするごとく気を焦^いつた。けれども彼は最初の解決よりほかに、一步もこの問題にちかづく術^{すべ}を知らなかった。彼はまたいくら考えてもこの最初の解決は確なものであると信じていた。ただ理窟^{りくつ}から割り出したのだから、腹^{はら}の足^{たし}にはいっこうならなかった。彼はこの確なものを放り出して、さらにまた確なものを求めようとした。けれどもそんなものは少しも出て来^こなかった。

彼は自分の室^{へや}で独^{ひと}り考えた。疲れると、台所から下りて、裏の菜園へ出た。そうして崖^{がけ}

の下に掘った横穴の中へ這入^{はい}つて、じつと動かずにいた。宜道は気が散るようでは駄目だと云った。だんだん集注して凝^こり固まつて、しまいには鉄の棒のようにならなくては駄目だと云った。そう云う事を聞けば聞くほど、実際にそうなるのが、困難になった。

「すでに頭の中に、そうしようと云う下心があるからいけないのです」と宜道がまた云つて聞かした。宗助はいよいよ窮した。忽^{こっぜん}然安井の事を考え出した。安井がもし坂井の家へ頻^{ひんぱん}繁^{でいり}に出入でもするようになって、当分満洲へ帰らないとすれば、今のうちあの借^{しゃく}家を引き上げて、どこかへ転宅するのが上^{じょう}分^{ぶん}別^{べつ}だろう。こんな所にぐずぐずしているより、早く東京へ帰つてその方の所置をつけた方がまだ实际的かも知れない。緩^{ゆる}くり構えて、御米にでも知れるとまた心配が殖^ふえるだけだと思つた。

「私のようなものにはとうてい悟^{さと}りは開かれそうに有りません」と思いつめたように宜道を捕^{つか}まえて云った。それは帰る二三日^{にさんち}前の事であつた。

「いえ信念さえあれば誰でも悟れます」と宜道は躊^{ちゆう}躇^{ちよ}もなく答えた。「法^{ほっけ}華^けの凝^こり固まりが夢中に太鼓を叩^{たた}くようにやつて御覽なさい。頭の巔^{てつ}辺^{ぺん}から足の爪先までがごとごとく公案で充実したとき、俄^{がぜん}然として新天地が現前するのでございます」

宗助は自分の境遇やら性質が、それほど盲目的に猛烈^{はたらき}な働^{はたら}きをあえてするに適しない事を

深く悲しんだ。いわんや自分のこの山で暮らすべき日はすでに限られていた。彼は直ちよくせに生活の葛藤かつとうを切り払うつもりで、かえつて迂濶うかつに山の中へ迷い込んだ愚物ぐぶつであった。

彼は腹の中でこう考えながら、宜道の面前で、それだけの事を言い切る力がなかった。彼は心からこの若い禅僧の勇氣と熱心と真面目まじめと親切とに敬意を表していたのである。

「道は近きにあり、かえつてこれを遠きに求むという言葉があるが實際です。つい鼻の先にあるのですけれども、どうしても気がつきません」と宜道はさも残念そうであった。宗助はまた自分の室へやしりぞに退いて線香を立てた。

こう云う状態は、不幸にして宗助の山を去らなければならぬ日まで、目に立つほどの新生面を開く機会なく続いた。いよいよ出立の朝になって宗助は潔いさぎよく未練を抛なげ棄すてた。「永々御世話になりました。残念ですが、どうも仕方がありません。もう当分御眼にかかると折もございますまいから、随分御機嫌ごきげんよう」と宜道に挨拶あいさつをした。宜道は気の毒そうであった。

「御世話どころか、万事不行届でさぞ御窮屈でございましたらう。しかしこれほど御坐りになつてもだいぶ違います。わざわざおいでになつただけの事は充分ございます」と云つ

た。しかし宗助にはまるで時間を潰しに来たような自覚が明らかにあった。それをこう取り繕ろつて云つて貰うのも、自分の腑甲斐なさからであると、独り恥じ入った。

「悟の遅速は全く人の性質で、それだけでは優劣にはなりません。入りやすくも後で塞えて動かない人もありますし、また初め長く掛かつても、いよいよと云う場合に非常に痛快にできるのもあります。けつして失望なざる事はございません。ただ熱心が大切です。亡くなられた洪川和尚などは、もと儒教をやられて、中年からの修業でございましたが、僧になつてから三年の間と云うものまるで一則も通らなかつたです。それで私は業が深くて悟れないのだと云つて、毎朝廁に向つて礼拝されたくらいでありましたが、後にはあのような知識になられました。これなどはもつとも好い例です」

宜道はこんな話をして、暗に宗助が東京へ帰つてからも、全くこの方を断念しないようにあらかじめ間接の注意を与えるように見えた。宗助は謹んで、宜道のいう事に耳を借した。けれども腹の中では大事がもうすでに半分去つたごとくに感じた。自分は門を開けて貰いに来た。けれども門番は扉の向側にいて、敲いてもついに顔さえ出してくれなかつた。ただ、

「敲いても駄目だ。独りで開けて入れ」と云う声が聞えただけであった。彼はどうしたら

この門かんのきの門かを開ける事ができるかを考えた。そうしてその手段と方法を明らかに頭の中で拵こしらえた。けれどもそれを実地に開ける力は、少しも養成する事ができなかった。したがって自分の立つている場所は、この問題を考えない昔と毫ごうも異なるところがなかった。彼は依然として無能無力に鎖さぎされた扉の前に取り残された。彼は平生自分の分別を便たよりに生きて来た。その分別が今は彼に崇たたつたのを口惜くちおしく思った。そうして始から取捨も商量も容れない愚なものの一徹一凶うちらやを羨あつんだ。もしくは信念に篤あつい善男善女の、智慧も忘れ思議も浮うばぬ精進しやうじんの程度を崇高と仰いだ。彼自身は長く門外に佇立たたずむべき運命をもつて生れて来たものらしかった。それは是非もなかった。けれども、どうせ通れない門なら、わざわがそこまで辿たどりつくのが矛盾であつた。彼は後うしろを顧かえりみた。そうしてどうていまた元の路へ引き返す勇氣を有もたなかつた。彼は前を眺ながめた。前には堅固な扉がいつまでも展望さへを遮さへぎっていた。彼は門を通る人ではなかつた。また門を通らないで済む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦すくんで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた。

宗助は立つ前に、宜道と連れだつて、老師の許もとへちよつと暇いとま乞こいに行つた。老師は二人を蓮池れんちの上の、縁こしらに勾欄こうらんの着いた座敷に通した。宜道は自ら次みずかの間に立つて、茶を入れて出た。

「東京はまだ寒いでしょう」と老師が云つた。「少しでも手がかりができてからだと、帰つたあとも楽だけれども。惜しい事で」

宗助は老師のこの挨拶あいさつに対して、丁寧ていねいに礼を述べて、また十日前に潜くぐつた山門を出た。藁いづかを圧する杉の色が、冬を封じて黒く彼の後うしろに聳そびえた。

二十二

家の敷居またを跨またいだ宗助そうすけは、己おのれにさえ憫然びんぜんな姿すがたを描えがいた。彼は過去十日間毎朝頭あたまを冷水れいすいで濡ぬらしたなり、いまだかつて櫛くしの齒はを通した事がなかつた。髭ひげは固もとより剃そる暇いとまを有もたなかつた。三度とも宜道ぎじょうの好意こういで白米かしの炊かいだのを食べたには食べたが、副食物あおと云つては、菜の煮たのか、大根の煮たのぐらいなものであつた。彼の顔おのずは自おのから蒼あおかつた。出る前まへよりも多少面おも裏やつれていた。その上彼は一窓庵いっしょうあんで考えつづけに考えた習慣しゅうかんがまだ全く抜け切らなかつた。どこかに卵たまごを抱いだく牝めんどり鶏どりのような心持こころもちが残のこつて、頭あたまが平生へいせいの通り自由に働はたらかなかつた。その癖くせ一方いっぽうでは坂井さかいの事が気きにかかつた。坂井さかいと云うよりも、坂井さかいのいわゆる冒アドヴェンチュアラー険けん者しやとして宗助そうすけの耳みみに響ひびいたその弟おととと、その弟おととの友達ともだちとして彼の胸むねを

騒がした安井の消息が気にかかった。けれども彼は自身に家主の宅へ出向いて、それを聞き糺す^{ただ}勇氣を有たなかつた。間接にそれを御米^{およね}に問うことはなおできなかつた。彼は山にいる間さえ、御米がこの事件について何事も耳にしてくれなければいいがと氣遣^{きづか}わない日はなかつたくらいである。宗助は年来住み慣れた家の座敷に坐つて、

「汽車に乗ると短かい道中でも氣のせいか疲れるね。留守中に別段變つた事はなかつたかい」と聞いた。實際彼は短かい汽車旅行にさえ堪^たえかねる顔つきをしていた。

御米はいかな場合にも夫の前に忘れなかつた笑顔さえ作り得なかつた。と云つて、せつかく保養に行つた転地先から今歸つて来たばかりの夫に、行かない前よりかえつて健康が悪くなつたらしいとは、氣の毒で露骨に話し悪^{にく}かつた。わざと活^{かつ}澆^{ぼつ}に、

「いくら保養でも、家^{うち}へ歸ると、少しは氣^{きづ}疲^{かれ}が出るものよ。けれどもあなたは余^{あん}まり爺^ぢ々汚^{じむ}いわ。後^ご生^{しょう}だから一^{ひと}休^{やす}みしたら御湯に行つて頭を刈^ひつて髭^{ひげ}を剃^すつて来てちようだい」と云いながら、わざわざ机の引出から小さな鏡を出して見せた。

宗助は御米の言葉を聞いて、始めて一窓庵の空氣を風で払つたような心持がした。一たび山を出て家へ歸ればやはり元の宗助であつた。

「坂井さんからはその後何とも云つて来ないかい」

「いいえ何とも」

「小六こしろくの事も」

「いいえ」

その小六は図書館へ行つて留守だった。宗助は手拭てぬぐいと石鹼シヤボンを持って外へ出た。

明る日役所へ出ると、みんなから病気はどうだと聞かれた。中には少し瘡やせたようですねと云うものもあった。宗助にはそれが無意識の冷評の意味に聞えた。菜根譚さいこんたんを読む男はただどうです旨うまく行きましたかと尋ねた。宗助はこの問にもだいぶ痛い思をした。

その晩はまた御米と小六から代る代る鎌倉の事を根掘り葉掘り問われた。

「気楽でしょうね。留守居るすいも何もおかないで出られたら」と御米が云った。

「それで一日いちんちいくら出すと置いてくれるんです」と小六が聞いた。「鉄砲でも担かついで行って、猟りようでもしたら面白かろう」とも云った。

「しかし退屈ね。そんなに淋さむしくつちや。朝から晩まで寝ていらつしやる訳にも行かないでしょう」と御米がまた云った。

「もう少し滋養物が食える所でなくつちやあ、やつぱり身体からだによくないでしょう」と小六がまた云った。

宗助はその夜床の中へ入って、明日こそ思い切つて、坂井へ行つて安井の消息をそれとなく聞き糺ただして、もし彼がまだ東京にいて、なおしばしば坂井と往復があるようなら、遠くの方へ引越してしまおうと考えた。

次の日は平凡に宗助の頭を照らして、事なき光を西に落した。夜に入つて彼は、

「ちよつと坂井さんまで行つて来る」と云い捨てて門を出た。月のない坂を上つて、瓦斯灯とうに照らされた砂利を鳴らしながら潜戸くぐりどを開けた時、彼は今夜ここで安井に落ち合うよくな万一はまず起らないだろうと度胸すを据えた。それでもわざと勝手口へ回つて、御客来ですかと聞くことは忘れなかつた。

「よくおいでです。どうも相変らず寒いじゃありませんか」と云う常の通り元気の好い主人を見ると、子供を大勢自分の前へ並べて、その中の一人と掛声をかけながら、じゃん拳けんをやつていた。相手の女の子の年は、六つばかりに見えた。赤い幅のあるリボンを蝶ちようち々ようのように頭の上にくつつけて、主人に負けないほどの勢で、小さな手を握り固めてさつと前へ出した。その断然たる様子と、その握り拳にぎこぶしの小ささと、これに反して主人の仰ぎよう山さんらしく大きな拳けん骨こつが、対照になつて皆みんなの笑を惹ひいた。火鉢ひばちの傍はたに見ていた細君は、「そら今度こそ雪子の勝だ」と云つて愉快そうに綺麗きれいな歯あらを露あらわした。子供の膝ひざの傍そばには

白だの赤だの藍だのの硝子玉ガラスだまがたくさんあった。主人は、

「とうとう雪子に負けた」と席を外して、宗助の方を向いたが、「どうですまた洞窟へでも引き込みますかな」と云つて立ち上がった。

書齋の柱には、例のごとく錦の袋に入れた蒙古刀が振ら下がっていた。花活にはどこで咲いたか、もう黄色い菜の花が挿してあった。宗助は床柱の中途を華やかに彩どる袋に眼を着けて、

「相変らず掛かつておりますな」と云つた。そうして主人の気色を頭の奥から窺つた。主人は、

「ええちと物数奇過ぎますね、蒙古刀は」と答えた。「ところが弟の野郎そんな玩具を持つて来ては、兄貴を籠絡するつもりだから困りものじゃありませんか」

「御舎弟はその後どうなさいました」と宗助は何気ない風を示した。

「ええようやく四五日前帰りました。ありや全く蒙古向ですね。御前のような夷狄は東京にや調和しないから早く帰れつたら、私もそう思うつて帰つて行きました。どうしても、ありや万里の長城の向側にいるべき人物ですよ。そうしてゴビの沙漠の中で金剛石でも捜していればいいんです」

「もう一人の御伴侶は」

「安井ですか、あれも無論いっしよです。ああなると落ちついちゃいられないと見えますね。何でも元は京都大学にいたこともあるんだとか云う話ですが。どうして、ああ変化したのですかね」

宗助は腋わきの下から汗が出た。安井がどう変つて、どう落ちつかないのか、全く聞く気にはならなかつた。ただ自分が主人に安井と同じ大学にいた事を、まだ洩もらさなかつたのを天祐てんゆうのようにありがたく思った。けれども主人はその弟と安井とを晩餐ばんさんに呼ぶとき、自分をこの二人に紹介しようと申し出た男である。辞退をしてその席へ顔を出す不面目だけはやつと免まぬかれたようなものの、その晩主人が何かの機会はすみについて自分の名を二人に洩もらさないとは限らなかつた。宗助は後うしろぐら暗い人の、変へんみ名なを用いて世を渡る便利を切に感じた。彼は主人に向つて、「あなたはもしや私の名を安井の前で口にしませんか」と聞いて見たくて堪たまらなかつた。けれども、それだけはどうしても聞けなかつた。

下女が平たい大きな菓子皿に妙な菓子を盛つて出た。一丁の豆腐ぐらいな大きさの金玉糖きんぎょとうの中に、金魚が二疋透すいて見えるのを、そのまま庖丁ぼうちようの刃を入れて、元の形を崩くずさずに、皿に移したものであつた。宗助は一目見て、ただ珍らしいと感じた。けれど

も彼の頭はむしろ他の方面に気を奪われていた。すると主人が、

「どうです一つ」と例の通りまず自分から手を出した。

「これはね、昨日ある人の銀婚式に呼ばれて、貰つて来たのだから、すこぶるおめでたいのです。あなたも一切ぐらい肖つてもいいでしょう」

主人は肖りたい名の下に、甘垂るい金玉糖を幾切か頬張つた。これは酒も呑み、茶も呑み、飯も菓子も食えるようにできた、重宝で健康な男であつた。

「何実を云うと、二十年も三十年も夫婦が皺だらけになつて生きていたつて、別におめでたくもありませんが、そこが物は比較的なところだね。私はいつか清水谷の公園の前を通つて驚ろいた事がある」と変な方面へ話を持つて行つた。こういう風に、それからそれへと客を飽かせないように引張つて行くのが、社交になれた主人の平生の調子であつた。

彼の云うところによると、清水谷から弁慶橋へ通じる泥溝のような細い流の中に、春先になると無数の蛙が生れるのだそうである。その蛙が押し合い鳴き合つて生長するうちに、幾百組か幾千組の恋が泥渠の中で成立する。そうしてそれらの愛に生きるものが重ならなればかりに隙間なく清水谷から弁慶橋へ続いて、互に睦まじく浮いていると、通り掛りの小僧だの閑人が、石を打ちつけて、無残にも蛙の夫婦を殺して行くものだから、その数

がほとんど勘定し切れなほど多くなるのださうである。

「死屍累々とはあの事ですね。それが皆夫婦なんだから實際気の毒ですよ。つまりあそこを二三丁通るうちに、我々は悲劇にいくつ出逢うか分らないんです。それを考えると御互は実に幸福できあ。夫婦になつてるのが悪らしいって、石で頭を破られる恐れは、まあ無いですからね。しかも双方ともに二十年も三十年も安全なら、全くおめでたいに違ありませんよ。だから一切ぐらい肖つておく必要もあるでしょう」と云つて、主人はわざと箸で金玉糖を挟んで、宗助の前に出した。宗助は苦笑しながら、それを受けた。

こんな冗談交りの話を、主人はいくらでも続けるので、宗助はやむを得ず或る辺までは釣られて行つた。けれども腹の中はけつして主人のように太平樂には行かなかつた。辞して表へ出て、また月のない空を眺めた時は、その深く黒い色の下に、何とも知れない一種の悲哀と物凄さを感じた。

彼は坂井の家に、ただいやしくも免かれんとする料簡で行つた。そうして、その目的を達するために、恥と不愉快を忍んで、好意と真率の気に充ちた主人に対して、政略的に談話を駆つた。しかも知ろうと思ふ事はことごとく知る事ができなかつた。己れの弱点に付いては、一言も彼の前に自白するの勇氣も必要も認めなかつた。

彼の頭を掠めんとした雨雲は、辛うじて、頭に触れずに過ぎたらしかつた。けれども、これに似た不安はこれから先何度でも、いろいろな程度において、繰り返さなければすまないような虫の知らせがどこかにあった。それを繰り返させるのは天の事であつた。それを逃げて回るのは宗助の事であつた。

二十二

月が變つてから寒さがだいぶ緩んだ。官吏の増俸問題につれて必然起るべく、多数の噂に上つた局員課員の淘汰も、月末までにほぼ片づいた。その間ほつりほつりと首を斬られる知人や未知人の名前を絶えず耳にした宗助は、時々家へ歸つて御米に、「今度はおれの番かも知れない」と云う事があつた。御米はそれを冗談とも聞き、また本気とも聞いた。まれには隠れた未来を故意に呼び出す不吉な言葉とも解釈した。それを口にする宗助の胸の中にも、御米と同じような雲が去来した。

月が改つて、役所の動揺もこれで一段落だと沙汰せられた時、宗助は生き残つた自分の運命を顧りみて、当然のようにも思つた。また偶然のようにも思つた。立ちながら、御米

を見下して、

「まあ助かった」とむずかし気に云った。その嬉しくも悲しくもない様子が、御米には天から落ちた滑稽に見えた。

また二三日して宗助の月給が五円昇った。

「原則通り二割五分増さないでも仕方があるまい。休められた人も、元給のままにいる人もたくさんあるんだから」と云った宗助は、この五円に自己以上の価値をもたらし帰ったごとく満足の色を見せた。御米は無論の事心のうちに不足を訴えるべき余地を見出さなかつた。

翌日の晩宗助はわが膳の上に頭つきの魚の、尾を皿の外に躍らす態を眺めた。小豆の色に染まった飯の香を嗅いだ。御米はわざわざ清をやって、坂井の家に引き移った小六を招いた。小六は、

「やあ御馳走だなあ」と云つて勝手から入つて来た。

梅がちらほらと眼に入るようになった。早いのはすでに色を失なつて散りかけた。雨は煙るように降り始めた。それが霽れて、日に蒸されるとき、地面からも、屋根からも、春の記憶を新にすべき湿気がむらむらと立ち上つた。背戸に干した雨傘に、小犬がじゃれ

かかつて、蛇じやの目の色がきらきらする所に陽かげろう炎が燃えるごとく長閑のどかに思われる日もあつた。

「ようやく冬が過ぎたようね。あなた今度こんだの土曜に佐伯ささえきの叔母さんのところへ回つて、小六さんの事をきめていらつしやいよ。あんまりいつまでも放つておくと、また安やすさんが忘れてしまうから」と御米が催促した。宗助は、

「うん、思い切つて行つて来よう」と答えた。小六は坂井の好意で、その書生に住み込んだ。その上に宗助と安之助が、不足のところを分担する事ができたらと小六に云つて聞かしたのは、宗助自身であつた。小六は兄の運動を待たずに、すぐ安之助に直談判じきだんぱんをした。そうして、形式的に宗助の方から依頼すればすぐ安之助が引き受けるまでに自分で埒らちを明けたのである。

小康はかくして事を好まない夫婦の上に落ちた。ある日曜ひるの午宗助は久しぶりに、四日目の垢あかを流すため横町の洗場に行つたら、五十ばかりの頭を剃そつた男と、三十代の商あきんど人らしい男が、ようやく春らしくなつたと云つて、時候の挨拶あいさつを取り換わしていた。若い方が、今朝始めて鶯うぐいすの鳴声を聞いたと話すと、坊さんの方が、私は二三日前にも一度聞いた事があると答えていた。

「まだ鳴きはじめだから下手だね」

「ええ、まだ充分に舌が回りません」

宗助は家へ帰つて御米にこの驚の問答を繰り返して聞かせた。御米は障子の硝子に映る麗かな日影をすかして見て、

「本当にありがたいわね。ようやくの事春になつて」と云つて、晴れ晴れしい眉を張つた。宗助は縁に出て長く延びた爪を剪りながら、

「うん、しかしまたじき冬になるよ」と答えて、下を向いたまま鋏を動かしていた。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年3月29日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集5」筑摩書房

1971（昭和46）年

初出：「朝日新聞」

1910（明治43）年3月1日～6月12日

入力：柴田卓治

校正：高橋知仁

1999年4月22日公開

2015年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

門

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>